五十音義訣

一之巻 一 發題叙言

二之巻 二 古圓說

三之巻 三 音圓訂正

四之巻 四 活用

五之巻 五 喉音三行辨論

六之巻 六 義解上

利2
16
1

和字正濫抄
国辞解 信濃人 光板
語意考
御国詞汐用拙本居
助辞鵠 河北景禎

帝国図書館蔵
帝国図書館
第16
巻1

五十音義訣序

是飽

夫是法五十聯の音多も。掛まく母畏き。

天皇祖大神等は。神語より事起りて。其惟

神ふ物ふしあるべ。云はくも更なれぞ。

奇霊ぶるこの母。微妙ふるかも。天地泉の理

ふまで至り通ふ。五は音の言霊ふかも

有る。是多しも。言霊は幸ふ國。言霊の祐る

白幡文庫

國と。石の上ぬるを神杉。古くを語りつぎ。言板ゞひ來ふ事ふがらも。其言霊の幸ハ比祐く御事を狀況。天の底ひ。國ゝ底ひ。落る隈ふく。斯まぼふし母。旨酒のうはらゝ。御食のうむかひ考を得ら霊を。正ちく美ゑく。足らひ調ゑる物をしも。成し定め給ゑる事。此顯世人を。うゝ世ふし

を。吾ゞ神霊を眞柱の大人をおきて。誰ゝあらむ。をるハ此うしを。其神霊を玉の眞柱をし。彼の自凝嶋なる。國中を御柱ゑを。固ゑを霊乃御柱を。衝固めませる大人ふちて。其御霊ふ。賜ハと持そをつ御物の。其始ふを。ゑほ彼ぬくゝをしを。固まらぎをしを。此神霊を御柱の固ゑを依て。締り

固まりつる物ふして。其物ハ一も。此大人
は著し物を為を知。あはゝれ書籍ふも是
なる。其書籍よ因て。學ぶ為き事の多うは
中ふ毋。言語の道を。そ乃本は學びを爲べ
ル事よるも。其言語の道を學バむとそる
ふ。人を一そは。まず人は人そる所以を知
らゞしてハ。有為うらぬ事ふる。其所以を

知はふを。人を一い姆言の本をそる為き事
ハ。ちるしも人を云ふ言ハ義を。雲足ち
ふ事ふて。人を雲は具足ふものふ為賢
為かし。人と雲の足ひそる物ふ為うらる
は凡そ何事ふもあ為。其事ふ深く心を凝
らして。八意の神は八意よ。思ひ入り給
物をるふたきそる。其事をそれを辨為得

て。其事を物せらまゞと云こゝをもふ所ふかも。是それ身ふ持足へる。其靈は産
靈ふ資ふ事ぞかし。轉るや漢人乃語ふ曰。
人を萬物の靈。を扱いゐ為りゐむ事の如く。
萬は物を異ぶる所ふ一ゝ。人は人をる。
最も貴き事ふ。其靈足を生ま來て。息
の涯り。其靈の産靈ゆ。活用うゐ為き物と

志も知らゞ。其體を共に腐をし果をむ
を爲る。是人は人をるゆき事ふ。人の
人為ふ事ゆ志ゝ。靈足の靈足為る所爲
をも形をむ。を思ひ立為ゆ物ハ。是は五十古史
音義訣ふ。志ゝを為霊ど。其末の末ゝ乃
ふ。千萬の言は心を知ゝむを為るゝ。又ゝ
は皇典語彙の書ふ賴る事ふ。此書ハし

卒辭經

も。過ふし大人の物し置給ふよりあり
杉。いまゞ成り竟ぎる所はある様。其みも
いさ鐵胤ぬし也。彼大人の御志を紹ぎ。
物し給ひ置き事は多く也。予はよを也促し
おこさ給ふ也。予はしを。曾冨騰乃
神のゐる有りや。奥稻ゐは秋田は國の。
片在所ふれこ侍ひ居る身ふしる。内日ぎ

い。宮所は方形ど牙也。心ゐも元任をぎは
を。又その神ふら恕身れ。天の下ふありや
有ゐる其皇典を。居ふがらふ志る。思ふは
ふはよ集へ物をむ事もま拙容易ゐら恕
わぎふはゐ。又霊足の霊足ある所爲をと。
別ふ思立そる事乃ある折ゐしふる様も
如何せむ。いゐを鐵胤ぬしれ勞きを助ゐ

て。早くうけ皇典語彙の書をも。世ふ廣く
物せむと。勤しみ成さむ人毋がも。かく云フ
ぞ。梓の為嚴遥屋のあろじ。新田目道茂

嘉永七三月せと云ふ年十一月

古史本辞経序

言霊は幸ふ。坤の御国乃言語は道なし。
是ちはや。神の御せるまに。定まる物なれ事
は。誰も知ることなれども。其元を打ならむ
ひと人なりて。唯よ古史を見るまに。何と毋字
書集めて。考へ深所なれば故に。言義は
明らめ得ずして。所さまは。なほ〳〵神まの

むかしより。あまた我が學の親。世々の名ある人々
年月の大人伴。神代の古傳を解明さんとて
物語て。言語の道の蘊奥を開示して。此の
古史本辭經を作れる著述なり。爲にも十餘部
天地の開闢より世々の傳を。言語の始末
を出だす所以なり。其言語は同じて。今志
毋世の再闢なる事實を。辨へ知らん

まゝ。いとも〳〵。靈異なる奇妙なる書なりけ
理。況て言語の道。ことゝ明白にして。五十聲言も
定て。千〻ゝ八千〻ゝ語用ひ。何の數毋。
法明りゝ法を。今ゝ〻ゝ開くる事。
既に新田目忠と序文に詳なる。今さ
ゝ。其は唯に。此の御書を讀こと
古史傳作る。天照皇根命とけ。皇の御祖

神等は御名の大師成解まうる所なり。合
せ頂くまつりは。直ふ為ら為く事と毎まそ。
実まを言古まう。言霊は音ふ国。言葉の祈く
流国と。毎〳〵油まきれ。真神は御音は
元のいを知れ。いとも〳〵尊く優まうか大
御国ふ知むれる。新まれ言は御国ふして。
古今まを弱なれ。かゝる言霊は本の辞の経ぬ

ゆゑ〳〵毎。名ふ負ふ勢らふし義理も。自から
知れまて。言霊の神は音ひ祈れ。祈り祈ひて。
我大人は。夢に若はまを〳〵う非ぬして。かく
流御書の。いうれ世よ知れも。已ぬ出
と拙く書れふ申はれまで。恩頼を偽う事。
言語は道の本弱〳〵毎。具く小辞手知ぬ成
出うは。最も〳〵有難ん。尊く情〳〵まを書

有るべし。然るに此御書は。法さらぬ者がふ
筆者なり。西字あれ用もて。いと匂やうあかれ
記されあれど。冊数四巻。紙員二百三十葉ば
かりなれば。字頗るむつかしく容易からず。故
同学の人と雑ども。遠き国ハ更れり。此の大
城下より住所より。諸見無人のあるべし。其の
慨あれ共。こゝのもと定秋。世の業はいの

いとまなく。学ぶ道は深く深けれど。弥年と学
又は御恵の。百千が一を報ひて恩しと思ふ
心の止絶く。いと情ふ字楼ふはをて。万世
ふにかくせる。若ねく人よ示せ庵と云ひ
立て。此書いうあと。今は大人なる中なる。
余も早くよれ。忘れ記し侍る事れば。力足ら
ずして拙き過ぎるを。汝かく計らは。国つの

人こゝい加めゝ時ぐゝも。寓が情さは云ゝ文
的ゝ。いゝ伝ゝ也ゝ
書ゝ記ゝ。其彫工人本村房義ゝ純ゝ。
刊本ゝは近世ゝ的ゝ新ゝ。かゝゝゝは。大江戸
北新川の街ゝ住ゝ。四年ゝ延秋

大壑 平篤胤撰述 男 鐵胤
孫 延胤 謹校

此書名を。古史本辭經とかむ。按ひ出ゝ。其ゝ古史とは。古事記日本書紀の二典ゝ云ゝ。主とは此二典ゝ古訓ゝ據ゝ
ひと欲ゝばゝ。但し此二典の古訓ゝ據ゝ云ゝ。其ゝ
ゝも祝詞宣命万葉集を始め古書ゝ云ゝ。其ゝ
後の謠書ども。所ゝ哥集物語書。或ゝ軍書その餘ゝ雜書ゝ
ゝ。古書ゝ證ゝ。ほゝき詞言
ゝ。目ゝ及ゝ限ゝ引出ゝ。ゝて本辭とは。古事紀序ゝ
大詔命ゝ。朕聞諸家之所賫帝紀及本辭既違正實多加虛偽
云ゝ。ゝ有ゝ帝紀ゝ。暦朝ゝ御紀ゝ詔ゝ。本辭ゝ古ゝ辭書

を指せる御語なれど。即此御語に據りて。師説に帝紀と本辞とを語れる耳にして共に歴世の御紀に事なる由に解れしなれど。然るに非ず。古史徴に開題記に論ひを見るべし。ちて本辞に二字は。さくに取て。其古語に本辞と稱ぶぎ語なる稽に倭。必ず二言に語に極りて。其語凡て二千二十五言ぞ有り。姑く是に五十聯の音に一言に成る場合とを以て。二千七十五言。さに本辞にして。此餘に。三言四言五言六言なる語。ぬく千万に限を無らむ。此本辞の外なるに。異国の語を除ては。唯一ぬに有ることを無く。今集むる言ども即。有ゆる言語に經言に言ひが故に。乃經とは名くられて。五十聯の音に一言なるを合そを。姑くと云よしは。元よを一言に語と云ものて有ること無く。皆或は二言に縮りて一言と成ひ。或て二言に上の省

かに。下に省り林して。一言と成れる物なれど。案は經言に出せるが故なり。此を指て。經語に二千に。然る経とは乃二十五言に限る由て。下に云を供べし。機に堅糸にて。緯と相對に語なるが。緯とは即横糸なて。此はちも。畏なや天照大御神の。高天原にして。始めて織ませる御機の事を起れる語なる。轉ては西土にも大倭に。天地に經緯にと云を始め。種に事に活用なし云ふと多かる中に書名にたくく用に事て。經常也を訓て。常典を爲ぎ由に名なるなる。今撰ぎる二千二十五言はも。近世多く人に撰れる語書に類に非ず。加茂翁に引て發さぬ誨に推して。天下の經言を錯綜盡せるにて。元よを經と

云ふき物ふれど明て。近世の先輩らが作れる語書の多くうと聞ゆる中ふ。已ご見こふく。山岡妙阿が類聚名物考の言語部。谷川士清が和訓栞。石川雅望ご雅言集覧。清水濱臣ご語林類葉ふど。何れも大部ふて。其を見るに。勤免こる事て。実ふ努米こる書等ふるが。惜きら。其經言緯言の差別な知らず。經緯らち混へて。一言より二言三言四言五言て更ふ。其長きふ至りて。十數言ふるものり。そご上ま漢語の假名がきふる類ま。合せて音てけふ集免し故ふ。初学びれ徒ふどて。其差別をさ分ふ思ひて。過免べき事ごも多く。互ま言語のあろ限り。拾ひてむと。勤免ま。さ面て著き物ふ。互ふ挙漏せば詰ども多く。然る哥文れ書等ふは疎こ。ふき我さ子ま右れ書らふ載ざる言なも。往こま見出る事あり。然れむ常ふ語の林ふ遊びを。ふ人等の書こて。嚊ふて頼て回し。然は有れ。ふこびの此挙まく。右四部れ書等れ幹ふ。我ご後れ教子ら。宇麻子ども。此ご多る事も亦少ふら免。

故古語れ經書と云て。世ふ伝ふ語書の末言ども。次こ。

ふ記し聚免て。此ご緯書を成あらひふ言語れ道。茲ふ始免て全かる伝き物ご。其作例て。別ふ記し置これば。其ふ習ふ伝し。月天明ふ。や弟面れ。ご五百機も。ま經を綜て緯やたそ引む。鉄胤云。上件記せる文て。ゆ。こ皇典語彙の巻首ふ見えこふを。今爰ふ移せるふり。

五十音義訣卷之一

大壑　平篤胤撰述　男　鐵胤
孫　延胤　謹校

○發題叙言第一

高光る日の大御神の御子命より。天地日月と共に。彌常磐に。照し明らし所知看しき。おほきの皇大御國はしも。万の國の本の祖國にしあれば。万ぶの物も事も皆勝れて美なる事多し。古語に。言靈の幸ふ國。言靈の祐く國と。称へ以來し事は如く。高天原に神留坐す。天皇祖大神の。天津神語を。弥繼繼に。云繼ぐ語と繼ひし故に。宇都志世人に。音韻言

語の道。ゆゑ奠ゆ万國ゆ優れて。正しく美あく。足ひ調ふる
御國ゆゆも有りゆゆ。此等のあとわわ。委くハ師の漢字三音
をを見て知らゆゆ。其え下ゆ往く引出る
るゆし。然ゆゆ。ゆ三栗の中ゆ御世ゆ。加羅國こも。鳥ゆ音
語の相交らひ。然る麗し紀大俟言ゆ。漸くゆ甚ゆ汚濁のい
で來しを。伊那かゆゆし古は然らゆ。如此こ我有りれを。其正
語ゆし。世ゆゆ紀教ゆ初こゆ宇斯を。契冲法師。次てゆ荷田
翁ゆ。此え加茂宇斯の文意考ゆ。ゆゆ草ゆ中つ代ゆ訣さ
ゆる如くして。やく加羅の文ゆ傳はゆ來しゆゆハ事ひろく開雅
の人も。あゆゆ。美こ物ゆゆ。此方ひ得るこを悦び。且え色づゆ紀ゆ心
うゆろひて。天地ゆ順ふゆろき我が国ゆう常有ゆばゆ
目ゆを。遂ゆゆ成ゆる。茲ゆ荷田東麻呂こしは。玉敷の平ゆ宮
ゆのほゆりゆ出て。千代ゆ古道こえこゆ。国ゆ

ゆゆふる事をゆ紀ゆ。押照るや難波の契冲法師え。野
中の清水ゆゆの心ゆ。古ゆ哥の意を問ゆけれひど
ゆゆるゆ。ゆゆ。此人これいひ連ゆる書れ。いさこゆある
を。ゆゆふをこ。古ゆ手ひ。ゆゆゆ本ゆゆ。故ゆのをゆ若ゆりけ
ゆゆ程ゆ。荷田大人を問ひて。且ゆ聞しこゆあれど。古きゆを
を。ゆゆくゆ。ゆどゆ。元ゆりけゆゆゆる事をゆ。嘆紀て。荒金の
土ゆ。ゆゆくゆゆ夏れ日ゆ。汗ゆ。ゆゆ。ゆゆ思ひゆこ。足引の
嵐ゆゆ。夜ゆ。身さゆ水ゆゆ。ゆゆ。ゆゆ明して百傳ゆひこゆ延
き。齡ゆして。稍思ひ通れるゆ似ゆこゆ。
云ゆ。ゆど云ゆこゆゆを思ひて。記せゆ。かくて其古語ゆ治機
ゆ。初體用令助ゆ。惟神ゆる妙ゆ奇し紀定格ありて。他國ゆ
訣語ゆ。嘗てゆ及びゆる道理ゆ明しゆ。ゆゆ其憲ゆ説ゆ。いや
早く神習ゆ御世ゆ。有ゆし事由紀ゆ。世ゆ著く述諭さを
しゆ。我ゆ古学びゆ祖父。加茂縣主。岡部眞淵縣居大人。ゆゆ
始ゆて。今ゆ物学ぶ徒ゆ。誰ゆ此定格ゆ知ゆゆ如く成ゆるゆ。

全是宇斯の賜物なり。然る恩頼あぞ依ましりにあ是宇斯なり
師は和字正濫抄を著はして行阿假字遺あぞは非ず雅じ
古言の假字成微せる功を大きなれども其自序中に和邦者
曜霊垂続之祕區天孫降駕之上域也雖僻遐東無壱韻最寡
亮詳雅能通華梵故言有灵験梵文和字經説為言説義為最
上衆声金剛手菩薩位在東方亦以和字為種子国號憑會貴
旨良有所以也雖然如此上世淳朴而無文字蓋待中華耶譽
田天皇取字之世百濟国奉記貢博士王仁從是漫親紙墨假
字記和語後及通中華逾究精奥云々云て梵漢の蔭よりも
おりて皇国の音韻言語は調ふる如く讃ゑるが非ずある耳
あらず初躰用令助の活用あど是露を得知らず此は実る
加茂宇斯なり世然法を其語意考は初発ふ。古後の日出る
ふ知らまこなり。
國え。五十聯は部の麻て迹て訓法為して万葉は事を口伝
ふら云ひ傳ふる國あり。彼は日放る國を。万は事ふかく伝
書て。ふ法しを法る國あり。かまは日の没る國え。五十聯は

ふ是は聲ふかあを書て。万は事ふわきこし用ゆる國えり。
然あれど此用りのみ字を用ざるを疑ふ人あふえ未しあ
りは何を云はば日放る国人は功ある事を好ひなを形ふく
も自ふらら一壱のうちふ多理のあもまてど形ふく
事あうじ然れどを千万
り日は入る国え細やう
も隨ひて効ふを此もあを
聯ばふりの音の敏もて万は転し遣る
ぐしは細やけく思ひ兼る形を。此は日出ふ國は
しを人は心直ふを。事少ふく言ふをがひて少ふし事
も言も少ふれど惑ふ事形く忘る時ふし故天地の自然
ふ法五十聯の部のみふして足ふり。何ぞを人の作れる敏
を待て物をあは免や或人の云ふら此邦を記は国ふし
をめがる事一ふ和ごり免あれど俺の国の字を用ひざりし世
字をしも借ぞ久ふ然るいはも聞えふ。然はあれど
ふ傳ふ遠くふ至らざら隠し法如何

と答ふ。其れを求れ濁れる泥ゝあらひて、水上の澄るを識らむが如し。此国人も心直れば、事も言も少くなりて、云ふ言ふ惑ひ無きが、よく聞え、忘れざるべし。遠くも久しくも傳へ、民の心直れば、君が御の代も少なし。遠り詔命あり。時は風のごとく四方に国々に、水のごとく民に心々やすらはす。天の益人、語り継ぎ云ふ事ふ誤まり、久しく守りて違ふ事無し。かゝるに何れ字なく、用ひむ。何れ詞をか為し給はむ。他の国人の心々に、ヤ、ヤ、違つ事をかくし、言ふ百ゝを記事を錯まるは異なる所なり。漢国の字を集ち、書ふ用ある字とて、三万三千餘を出せり。天竺は悉曇と、四十餘の字もて、五千餘巻を書き、此字の多なるが宜きを、少なが宜きを、天下を軍少く治めるにそ宜きを。然らば其天竺も四十餘字も用ひ、支しして、言ふ事をく傳へて、天皇方代々嗣なる皇朝とて、天下を勝ちとこれ是彼をも考へ、支讃ひとも異国を、悲しむ心なし。さりあるを。信じて我が古意を学ぶ人、如は人此、五十聯れ音ふ彼ら紀云ふ。此入る國を習ひ、ものと謂ふ人あるこそ嗚呼なれ。此国の古人言語ざらむや。言語ふて

天地は父母の教なり故知ら、支。此五十聯の音も有なり。且なり思ふ人も。時代をも思はず。已が国は知る事なも知らで。他国は事を。生ふ聞なて云ふ。後なり考へ当れど。言はゆ、ふて、中ふを甚むが、なり。是即ち国の天地は言其通音転音、延言、約其本は自然ら然云ひし物なり。の叶ふれど、人の国は事を借りし非ぬ事を知る。し、其通音なるどの教ふの事を、下ふ委曲ふを見る。日は入る國を習ひしは。小治田は宮を始りて。顯し紀人草はらふ後の世なり。是なり前日放る國は事の來りし。輕嶋は宮なり上は世を。もはら神習ひて。太祝詞ぞ。謡へる言ふ。打云る言も。みさかりなり。此五十聯の聲なりなる措なて。人の心を知ひて。言も知られ成りし後もて云へ

あらは。おの上古代の事を知らぬ人のあめの云はむ。昔人日に入る国りい行て。書に記し書こと北京を傳を來し事を。はやる時の解なるせし書のあるをたみ。今もそ知傳の知まり。ちゝ人り問けゝ所り。堅形る音に起れることや。堅横の通ふ事をら。少抑是國に上代より用ひ來て。定文うに事を云のみあり。横に音に起れることや。あ由言に分ら。横に音や言ことあや言ことかぬ。三名と動くもの。四名と動くこと。

令 おふ。そるこ。五名こと助くること。此を分ち知る時こ。ちゝ言は明らかなる。然あれど。是ぞ此、ちやばに國の。天地に神祖の。教を給ひし言やして。他國に名あ能ぬ言に名あめしある事を知る。天竺に名能。譬すで加行のみやも。加。我使也。加年。我年使也年の六ら。次るかく此如な音を合ればは。悪多し。此国おて清音五十此外り濁音二十あるのみおて悪言少形し。其少なるを以て。千万の言

おの足は悪事形なを妙あらぬや。かゝ独で。此五十聯の音に形あ形め成せし。人草あらふ中形代の舉形らぬ最も尊な神君ふ代り。天御孫命に御代の。十五百代おも変ら悪。言の國の本況。示さえ賜ひし物おおもある。故古へらの言葉の幸は此國と称ふ形や。篤胤云。上件抑是国のと云ふり。此おに至る由て。中おも専要の文おて。五十音図の。應神天皇の御世ごろおに成きる由の説あり。安く悪下おに云ふる見べし。本考ふおに此間は。悪ふりみりとりて。示さきし説ども。あり。悪頭書おに伝れふ事ぞ。種ふ。されどそ悪みふ上下のかゝ因ふ所こおに班ち記せり。見む人あやしむ事なき。此おに我國悪に渡り來て。時に希らしみ。此天地と大形らある。神習ひふバ。常有ふやし思ひ息ゑて。かきゞ方おに狭く。あ形ゑおや巧める俄り。然でに。然あらひ初形るあり。抑に

おのおの佗國と。むすび初める弊に拘甚しき迄を記し。ゆゑ
書わ漢国わて老子のみぞ眞の書ある。されわ初を崇
む老これわ次ぎ壯を悪や。今三国を考ふるわ我が朝を
日出ル国わて人知り當る故ゆ諸眞わして世治まり天竺
を日没の国りて人老み當る故ゆ人心精くして賢しから
は日中の国わして人壯り心悪ゆ故り世治はらず主を滅
しして己立ち遂ゆ佗ゆ奪はる。然るバ万ず我が朝をと
そ崇む愛れも彼老子を
を顧ずり。然るバ天の下わ是国の古へはうり。宜しく無り
り只時ありてから殺ゆ侍へで彼老子わて古へ
王主を滅してのち掠てし道ゆ侍ずし。此国わ邪心多
くふれずと有り。此字斯の老子の道を[illegible]られて訳をゆゑ
国意考わも周代の道の人作わて快く快意ある由を論ひ
て老子てふ人の天地のまゆく云れし事こそ。ちて其自序
天ち下の道ゆハ叶い侍るめれや記されしこそ。其自序
わいずと沒許を知ゆ為。大海の原ゆ広ぐ船も。ちず舟人の
傳へ侍ゆ。眞楫取るゆらわ。思ふ湊ゆはりを云へ。我

が皇御國の古へを沒解ゆる傳を失ひしゆ。荒嶋風ゆ侍る
る船の。ゆく方も知らぬ成中し。然ある中ゆ山代の稲
荷ル祝が家ゆ傳へし。百足らず五十聯ち音のあや。少ち有
るを取りて荷田東万呂ル宇志千万ず侍ル古言ゆ侍る
るゆ依りて。世人ル未心得ぬ事問ふ人ち傳
を。し沒。己を少ばこのち聞ず。此ゆ侍ずしをゆて。終りいらく
潮ル八百道ゆ惑はざらむ事を加ずむや沒猶をず無ル
ち。此波しを思ふ祈難ゆ侍ずむや。是が宇ゆ沒全くせ
む事ゆ。墨江ル大神の佐ゆ知ゆ明和六年二月。加茂眞淵ゆ
問ゆく有ルわて知ゆ。楫取魚彦が古言梯ゆ宇斯の訂正を
綴しる書ゆるゆ。其ル例わも。荷田東

万呂大人、それ稲荷神社の少う古傳の有るをもて、天下に古書を廣くわたり、此言霊深く考得て、吾が加茂縣主の傳ふ、げて後の縣主ども、ろくく考へ深く思ひ、事を加へ、ふして、語意てふ書を記せり。されの五言に竪音を元らかして、横韻の初躰用令助平訓等、世に傳はらぬ種くに道ある事をいふ、次に云ふ、宇斯に此明和六年十月晦日の七十三に齢にて身沒を給へり。上件こゝに。宇斯の説等の意、取総て誓ふるひ、ありけり。

わ。宇斯素より。神世の日文字にあらし事、て。惟ひ漏さを在しらば。其心をもて上の如く。文字ゐ、何でふ事の趣ゐまづ論はれしこと。されど此を。國に眞楯を成ぬべ。

大倭魂の学びを。世の創めて教へ誨されある。功績の上を

とは。何計わに思ひ落しわも有ぬ。今し殊み論ふべに事わも非ず。但し別ゐ著されある国意考みて、天竺文字の五十に成る由を云ひて、五十に色を、天地の色りて倭

れで、其内ゐ胎胞るく者に自然の色ゐり。然れば皇国ゐも、いふ所る字様りは有ぬらむを、彼から此字を傳りてより、彼ゐ、われはをて、今はむりしに訳のみ有れり、と云れしと所る密れで都て我が古へゐて、文字ゐしと決定られある。ゐを非ざまどを、其字を得られば故り。姑く右に如くは論は

れしこと。実ゐを上古ゐ文字ありし事の已ぞ説を既ゐ日文傳ゐ委く論られで、其書ゐ所ゐて見る。此を古語拾遺ゐ、上古之世、未有文字云て、也有ぬ。ぞ珍しげもく

ひゐ出て物云ふ倫ひの嘗を。故今を。上件に要と所事どを成

ても伺ひ知げる事ぞ。

云むゐ。宇斯の意わが御國を。言霊の幸はふ國也て。天地に

父母神に。授け賜ひし言語り。五十聯に音の自然ある定格

ありて。甚正をく傳はゐ來し。輕嶋の宮ゐ天に下を。

失せる。應神天皇の大御世り。其音を聚め成して。其治機の

本を示し賜ゐ。中世より久くゐ其古説の埋もて。世ゐ

知り成ぬる後。稲荷山の祝が家ゐ。且つ其説を傳藏とり。
其ふ荷田宇斯らり傳受りて今此語意ゐ述る所。やがて其
古傳ゐ本ゐ原説ぞとあり。宇斯の意ゐ定ある事ぞ上
ゞ中ゐも此五十聯の音を集め成せしも顯しき人草あら
ふ中ゐ代の舉ゐらゞ最も尊き神習ふ代ゐ云くと云れと
るは古事記應神天皇段ゐる古語ゐ我御世之事能詐曽神
習又青人草習乎とある説指合ゆる文ゐるを以て。いや顯
露ゐる事ゐり。然れぞ五十聯の音の圖説やもゐ。輕嶋宮ゐ御世を
ゐやを云ふ説を舊く彼家ゐ傳ハを古説也り。然るゐ。其
語意考ゐ出られゐる。五十聯の音圖を見れぞ。於表の所屬
も。違ひ竪横の次第も何も。世ゐ有ゐる音圖と同じ故ゐ。
生賢しき倫ひを。荷田家ゐ其古説の有や於。と云を説ゐ。

誣言ゐ如く論ふ所も あや。そは第四巻ゐあぐ原村田春海
ゐ。然を どこハ。宇斯の自序ゐ因りて誓ふるゐ。彼家ゐ舊く。
當昔ゐ音圖ゐ。其説ゐ副ひて傳はやしゐ。其圖を破損ゐて
少ゐ殘や。説のみ全く存ゐる後。圖は差知を事と。舊ゐ
韻鏡。ゐる正濫抄ゐどゐ出ゐる圖を以て補ひて。其古説を
合せゐる物や見をバ。聊ゐを疑ふ所ゐ節ゐく。輕嶋宮の御
世ゐり。有りしてふ説ゐも難ゐく形む。其元ゐや其古図の
誨せる古説の有所ゐる曲ゐき後其説のありし上を。其古図
の有りむこを。今殊ゐ論ふ所でを非ゞ其図の破を損ゐて
殘れる事を。序文ゐ百尺ゐらバ五十聯の音のあや少ゐある
を取りて。やあるゐて著しを。僅ゐ五十字の図ゐる後。全
く無らむゐは。少ゐ有ゐと云原ゐ。全く存ゐゐむゐも。少
ゐ有ゐと云ゐる後ゐ謂ゐゐれぞ。破を損ゐゐる図形りしゐと

論ひあるし。但し板本は語意あるる。鈴屋宇斯の序み。此語意とい
書はしも説ど善と悪とを。見む人は心ふれ。いかが
有む。縣居老翁のある事え。詳かる物ぞ。都み賛こと詞
のあるえ。何かる事ぞ。縣居も書わして。鈴屋の序あるえ。
唯是語意のみ。言の賛辞もあるを。其遺憾少ら
ず。將心得ぬ事と。然れど此語意考の趣き。鈴屋宇
斯え。信らまげ。ら思ふ。其
書を見え。古事記傳漢字三音考を始め諸
特來て。序を記しらば。正とを得ず。物せられし故ある。
然らば其由を云はる。きみ。然も。
あし。此事はやく同じ学びの朋友等とも語相れる。稲荷
山の祝が家み。五十音の古説。傳
此事ふれど。称賛の詞を書れざりけむと云ふ。然て。荷
田の家み傳はる古説と云を。心の底ひ信ふ者も。唯

篤胤一人
形るる。
き事ふれど。今し其説み本ぶき。自序み。是が上を全くせむ
事え墨江の大神の幸こと言波遺して。後み期ま。宇斯
の志しを紹て。音韻の起る原を索めて。有る古言の本義
を釋明けむと欲る。彼老子の語も。夫代大匠斲者。希不
傷其手矣と云ふ。其大匠とる宇斯ふも。猶をぢふ。
此を。しも思ひ。為難ことを多ら。云れある舉。吾
ふ。事で。進退るまど。其學びの眞子を。然しも感い
在ぬ。も非ふ。墨江の神の幸ひを仰き。学びの祖の
功竟を。強ひて。利心を起して。ふむ。但し如此しを
思ひ設こりし

幾年を経ずして、眩く三十年を過せし。其頃までわ
種々の容易らぬ事等を志ざせる事あわくそはみを俺わ
の心をせざ所筋りて此を我
けて在於をバ語譯の事として殊み取立て物ハ無れど
古言れいわ多らわやも必ず細と目との別あくて叶はず
更然をで如此ざ所わ訳宣て如此げ所を釈てむり千
万言の本義を細羅して説盡きる能き物なと思ひ寄りて
在於をバ近く相識れる古学の人るの語釈りいきしみ居
り倫ひわ已が思ふ旨を語りて云ひ勧むをど実を然わ
事を項於き於く其趣を従る人るれを已がだ思ひ得
於る事ふら彩で熟くも其旨わ得られぬ故りや誰も同じ
内面は細ふく絶乱をる細目の風を吹散とるを我をは
加を素むる如く所千ぢの書の中ちり一訳二言や希しけ
ふ拾ひ出於く彩き居る発り草の野を散り草木の
葉の千艸万木吹交れるを此と某草の葉と発後某の木葉
を見分も知らで拾ひ集むる趣ふも見故て勇れふし故今
はも止を得更まく更りかく思ひ起せる挙われも
を然ふ心地のせらるく疎くのを過せしらば少
で其手を傷はさらむ由もが於。

○五十音古圖説第二

五十聯音は。語意を。伊都良能古恵と訓むを。あり。是も古傳於
訓ふ所ら。抑是五十聯の音は。上件語意を説の如く。天地
自然の聲音ふれで。天地を鎔造し給へる神の大御言ふ。素
ちり然る定格ありて。其言霊の幸ひし。次ふ傳ひし故り。
最上古まと。殊ふ其圖を摸して。示し誨ふる迄もふく。天の
益人ら皆知ら更識ら次。其言語を其道自然ふ備はりて。少
ちを誤所る節ふも無ア所。此を前條り出せる縣居宇斯
字音假字用格。まく地名字音の説を本於き且鈴屋宇斯の
如く。奈良の御世り。定発給ひし地名の用字。所を引色ふど
於字の。天地自然の音韵の定格ゝ。一於も所ち
無ふを其ちり上代り椎及ひして。かく発云ふふり。

上代り。音圖と共に未割ら孤。其音ゐ數り合ある。神字の五十
ち有りしおや。日文傳ゐ述る如ゐまバ。其音を類聚して。図ゐ
作もるハ。実わも。其古説の如く。應神天皇の御世ゐて。ゑゑ
赤縣籍ゑ讀しめ給ふ時ゐ。彼邦の字音を。此方ゐ正ゐく倣
へむ為り作れるゑ。其創草わぞ有りむ。然惟ふ事の由ハ。師
ゐち漢字三音考ふ。海づ皇國ゐち吾音の純正わして。万國の吾
音の混雜ある由ゑ論じ定ゑ。さて皇國わして。漢字音あり
し始ふ。論はもゐる趣わてゑ知る〳〵事ゐり。凡て音韵言語
者ゑ。まり此三諳考を讀こゑ數十回。一句も滯ることゐく
融會貫通して。然して後ゐ。始めて此学の闇奥を語るわ至
らゑ。其説ゐ皇國と外國ゑ。自然の音韵言語の甚異ある

こゑ。上件の如し。然海ゐ輕嶋明宮ゐ。天下ゐ治しめせる。応
神天皇の御世わ百濟國ゐり。阿直といひ。和通と云し二人
の博士ゑ渡し奉る。海こゑ論語ゐどの漢籍をも貢獻せる。是
大御國ゐり漢字漢籍の參入る始ゑ。是ゐ異説ありて。漢字漢籍ゑ。神武
天皇以前ゐり既くゐれ有ゐらむとも云ゑれども。ゑは日
本紀の書躰ゐど。を者て。ゆゑりゐく然思ゐるものゐり。日
本紀の文の事ハ種ゑ論あり。余が古事記傳ゐ委く論ぜる
が如し。まゑ漢武帝が時ゐ始て倭国ゐり通ゐと云こと。彼
国の書ゐ見ゑるわ依りて其頃ゐりや。文字も渡わ來ゐら
む。と云人もあれど。此も非ゐり。別ゐ其論もあれども此ゐ
ゑ省かゑて。皇子宇治若郎子。わの二人を師として。始めて
其漢籍を讀ゐりひて。皆能く通達ゐるひしこゑ正史ゐり見
ゑ〳〵り。抑漢字の音を知らて。漢籍ゑ讀ゐや能はゑ。海こ

此方にては。訓をくしては其文義を解ること能はざる事あり。其ゑ譬へば論語を讀まむに。首に論語卷之一とある学而。子曰とある子字あるど。皆必ず音讀あらざるべからず。さて学而時習之を訓に讀む。但し是えがくしてじしふすと。音にも讀べきなれど。亦不樂乎あるどは。必ず訓に讀べき有べからざるべば。訓も無てハ叶はず。あるとひ音に讀べきも学をてナブあり。而をテ於意あり。時をヨリ〳〵あり。習をナラフあり。樂を樂〳〵知されど。其義通せざる如此くに知るは即訓にて今訓をこそ云るを。漢字に皇国言を當てるを云あり。況て訓とは。字に於きてに書云べき称あり。世に皇国言を仮て訓と云ふを云。然はにに彼皇子の。然はより善くも達し給ひて。同御悟とあり。世に高麗国王より使を奉遣せし時に。其表を讀給ふに。無禮なる詞の有しに依りて。其使を責給ひし事あるどを見えたれど。當時既に此方にて讀べき。音も訓も定備まりしあり。

若音訓にくば。爭でか善讀て其表文の無禮なる。辨へ知給ふばこのやうに。然るを或説に。それうみ王に非あり。此方に人といふ程なく学問しても。訓讀あらで。義理通せず。近世儒者の説にて漢籍に熟し唐音に達しめるに。訓讀にて。彼国の法の如く直讀にしても。能く通暁にて云は。甚虚妄の言あり。あるひ口に直讀して。心に義訓せざれど義通せず。人には右の如く教ふる者も。更に訓讀の法にて。陳を履中天皇に御世に。諸事を得べき知る。國に史を置て。言と事と記さし。如此く漢字を用ひて。此方に言事を記に至て。愈其音も訓を定まらでは能し難き事あり。此方の事を記に。地名あるどは更にも云ず。鳥獣草木万物の名其外も當べき漢字の訓に知れざるを。假字に書ざる事を得べ。遥の後奈良の頃の書にそら漢

名の詳らかなるまで假字を書るゝ。けて古ゆ假字を謂ひ
多かれど。況て上古を推量る屬し。
る万葉假字なり。阿伊宇延於などゝ如く書て。皆音字用ひ
たり。然れど是をもて。初めより字音の定ゆゑし事を知るべし。
假字定ゆらで。を事を記し難く。字音定まるまでは假字を定
めずゝし。但し假字は止女井などゝ如く訓を用るゝ。奈良
ゆゑ。日本紀は訓ふるが三ツ始ゆりて。其古へを更りあき事
交ふるゝ。皆後の誤字なり。叔母〻訓定ゆらでは。愈事を
記し難し。壁へぐアッシ。サムシヤ云ことを記さむと為る
ゆ。アッキを暑字。サムキは寒字を知て記ゆ。かゝる如く知
ることゆゑ。此字は其訓ある故なゆ。若訓なくて。云て某
字を云ことを知ざれど。記ることを能はず。然るを或説は。吉備大臣和訓を作

ゆ。和讀の法を始むと云るゝ。上件の事理なるゝ考ざる
孟浪の説なり。此大臣ゆり前は。此方の事を漢文ゆて記せ
る古書をもの有をば何とゆり解せむ。まゝ此方ゆても。古書
を多く漢文の法り書るは。文字の錯置の多きは。とも訓は
ゆりて作れる故なり。若いまゞ訓讀の法あらばして。唯漢
国の直讀の法ゆをもて為。其意を得て書むりを。錯置をあさ
り。然もハ皇國ゆして漢籍を讀みゆゝ其字を用ふる。音
も訓も。かゝる若郎子王は始めて教を奉りし時ゆり。定ゆゑ
在しこを疑ひし。然て其時り用られし字音を。漢国の音の
ゆゝ也りるが。皇朝ゆて別は改め定られるゆゝ。今明らゆ
知ゆ難けれども。事理を以て考ふ。皇國と外國とは。人
の色音いゝ異ゆして相似ざるゝ。當時漢國は音字。を
隨は取用ひむを為とを。容易く学び得ゆゑ非ず。同国同郷の人

も。男子と男子の音。婦人と婦人の音。兒童は兒童の音。老人と老人の音。孰も殊なる所あること如く。各国の音も然なり。けれど漢人の音を皇国人のまねぶも。大躰てあら先。其眞を得たる事なり。譬へば鶯の壹を。ホヽケキヨオヤまで長く鳴ども。実ハ鶯ハ壹は。人の然云やハ大キニ異なるが如し。唯こと縱学び得ることもの。其俳離不正の音。さ程に其儘取用ふ者ハ非ず。然れど其時の字音。必ず彼國のまゝ用ひらるべし。或て拗音を直音に移し。或て急聲の韵を舒緩に改めれど。凡て鄙俚の甚しき者ハ除て去て。皇國の自然の音に近く協て。新り定められたる者なり。然れど字音は皇国の語音に似たるを以て正しとし。然るを不正とし。然るに人文形此義を辨ずして此方の字音の彼国の音に似たるを以て。訛

舛の音とおもふて。深く考ずして非事なり。さて拗を直り拗ぶ先。鄙俚なるを轉じ。なるべく字音假字用格に出せるが如し。凡て此方の字音ハ。今北唐音の如く甚鄙俚なる音を。一ツを廢らざ用ひて。殊更に改先定先なる者なる事を曉るべし。けだし當時字音撰定せし人。何もこの人ハ有ひて云ハ。必ず彼皇子ハ典籍を教奉りし。阿直和通なる者なるべし。皇朝の賢き人等と共に相議りて。彼國の音韵の旨ハも背らず。此間の音ハも甚遠からぬ。宜しき程に考ずして。撰び定先諸字に訓を定先し。亦此に如くハ有ざむ。唯こと彼御世なるべ。唐国人の参入て留居ることも。此彼と有ることも。其人等ハ共に相議とし事を有べし。凡て然る細なる事ども。唯で先。今詳ハ知ずハ非ざれども。事ハ遠く考ふるハ。必ず然る者なり。當時新り渡り参入來る書籍を讀み初めし時の。唯こと熟て思ひやるべし。いと形をぞハ。見るる

事も無りなむ文字の。假ゐも其讀音淀一てゐ語むこゝを。甚容易ゐる傳じなれど。何ゆゑ此方の人は口ゐ謡易く学び易くして。然も唐國の音韻の旨淀失はぬ狀ゐ。撰ばゑ有ばゐらば。是傳こ甚容易ゐらぬ事ゐれど。必ず此彼と相議りて。深く考ゑば。定め得べ紀ゐ非る淀やゝあり。さて此次ゐ其時り初めて定傳うし字音は。必ず呉音ゐる べし。其故は昔を用ひ始めゝ。漢音を用ひ始めゝ。最く早やして。諸の物名。或ゝ官名。其餘の名称ゐどゝも。皆呉音ゐのゝ呼來りうゝて。其由を委く論じ然して後ゐ漢音ゐ定まれる事を論はゝてう。実りける事ゝハ通ゐれどゝ。然のみゝ思ひ決め難ゐ事あり。下ゐ論ふゐ見るべし。上件の師説皆誠り然り事ゐるゐ就て。ゐゐ其事理ゐ如し攷ふるゐ。然しも漢字は音淀定め難む事ゝ。傳り

此方ゐ音韻一定は規格ゐくては。定め難ゐ事ゐれど。五十は正音は更形り。其延約通略ゐどれ自然の格も。神ゐ御世より失ゐ事ゐく。言絶ひ來ぬる淀。當時漢字は音ゝ合ひと為ては。皇國人ゐ中ゐゝ賢紀ゐ。殊更ゐ其趣ゐ淀研究して。彼日文は音圖ゐ造れるゝ初りゝ有りむ。然るゝ音図の亀鑑ま紀定傳らゑ。彼放の人此放の人ゐど口ゐ呼ふ壱は みゐ聞相ひて比校せむゐゝ彼方此方いゐく音韻の相違あれど。謂ゐる水ゐ數かく譬ゐの如く傳ゐ雲を攫むと謂ふゐ如く取ゝむ。抑る法ゐくて。常住不変の音ゐ定む紀き由の無れど形ゝ。皇國人は言語ゐ正雅は聲の。有ゝは盡く數ゐ集めて。ま紀其無音の壱は元ゐ索むとバ。字壱ゐ定傳り。開壱の始めゝを攷ふゝハ。阿壱ゐ極まり。其壱の類ゐ攷ふゝと。此行は五壱

を定めり。其五音の次第例攷ふまば。阿伊宇衣於を極めるを。是行を効ひて。餘りは四十五声の。類を襲め横韵を齊へて聯ねむり。誰人の為あらむも。大抵同じ様なるべく。実ハさしも難くらぬ事なり。然るを。今ハ是図を悉曇ふで云人あるべ。ふれ異国を揚げて。我が古へを然えあれと。其を酒酒しむる儀の正ざ例ふ有る。音韵正し記皇國人と雖あ。彼蕃人はも。其音素なり拗音れなく。然る単聲の音韵を。齊へ得ざ記道理なれど。今断じて。其音圖の出來し初を是時りて。々を皇国ふ人の。創造なりとハ桜ひ定め。然れ語意考み。荷田家ふ舊ふ五十嶋宮の御世なりの傳説聯音のあや。少り有しと云れしい。輕散の音図の模しの。殘欠ふりしを初知べらず。況て其對

音ふ初め。何様ふしを定めりや云こや。今知べるふハ非ざれども。是まで事理ふえて考ふるハ。彼音圖の出來てハ。延約の義ふでハ諦るれど。此を規格とえて。蕃人らハ其音とを次逐一ハ呼し攷試みて。況ハ五十音ハ用ふる假字を。正しけむこや言況くを更ふり。上ハ挙こる師説ハ。或ハ拗音ハ直音ハ於い攷。或ハ通改攷ハ於ど。元て鄙俚の甚しき者をば除き去て。皇国の自然の音ハ近く協ふて。新り定められ今其趣を阿衍ハて云む し者ふりとある御ふ思ふ。彼阿伊宇衣於の五字。古〻の直音ハ依ふて。正せる故ハこ者。アイウエオハ用らられ。其漢呉の原音を。ける直音ハ非ず。元とり開合ふ故ありて。開ハ攷阿伊宇衣於と様ハい

ひ。合ゐて阿伊宇衣於と様り云ふ。赤縣人は壱音。を屋て斯
の如く拗音あるゐ。況て漢呉の方音別あれど。其ゆまり此
方は直音ゐ約めて字音定め。然して後ゐ。我が。アイ。ウエ。
オ。は假字ゐハ用ひしゐり。加行以下の九行も是に准て
知るべし。今其例を少クこむ。ア行ゐ用ふる阿を漢音呉音
共に。其原音をイヤ。ゐれど。ア。や切り。伊ハ漢音エイ。
呉音アイゐもば共ゐイ。や切カ。宇を漢音ヰエゐて。ウ。呉音
を平ヨゐて。ヨ。や切き。ハ漢を用ひ。加伎久邪古ハ。漢の原音。
キヤ。ケイ。キウ。ケイ。キヨ。呉の原音。キヤ。カイ。キユ。カイ。キユ
ゐて。上三音ハ漢呉共ゐカキクと切き。第四のケイ。カイ
ハ。共にキ。と切りてゲ。とハ成らず。故漢音ケイのイを省て
ケ。ゐ用ひ。第五のキヨ。キユは。呉音のキユハ。ク。と切き。
漢音のキヨ。切免てコ。ゐ用ひしり。五十音の眞假字みゐ
是例ゐて。漢呉の音相交わり。然れと呉音を多く漢音は少
ゐし。三音考ゐ此時ゐ始めて定ゐりし字音を。必ず呉音ゐる
べしと謂ふ條ゐ。古書の假字ゐも呉音のみ取て。漢音を取

れる。をいや。少し。帝を。テ。礼を。レ。西をせゐ用ひゐる類を。漢
音に。テイ。レイ。セイ。ゐど。取れるゐハ非ず。呉音のタイ。ラ
イ。サイゐテ。愛を。エ。開を。ケ。米を。メ。ゐ用ひゐるや同格ゐり
や。あれど。帝礼西を。漢音の省き。愛を漢音アイ。呉音エイ。開
を。漢音カイ。呉音テイゐき。米を。メ。ゐ用ひ。米は漢
音メイ。ベイ。呉音マイゐれど。メゐ用ふるを。漢音メイの省
音とこそ思はるれ。ゆて如此して。五十音の漢字對譯。をでゐ定ゐり
ゐ後ゐ。ゐ定行して。五こ二十五百音ゐ造りて對音せむゐ。
漢呉の音譯を更ゐり。其餘いゐゐ溷雜鄙俚の音韻ゐ。ゐ
を。天下ゐ声音ゐ竭して網羅せらるゝ。舉ゐしあれを。當時
ゐ賢人。必ず然して。ゐを。字音を定め給ひ在り。其人を誰
今ゐ知べきゐを非ざれども。半治。稚郎子王。加の阿直岐王。仁
の二人。を師として。諸典籍を習ひ給ふるが。莫不通達と見
え。高麗王ゐ表を讀みて。無礼ゐ責めて。其表を破り給ひし
ゐどを按ひ合ゐるゐ。此皇子を。の宗哉として定め給へゐ。

事あらむを知ぬべからず。但しあぞ元より
試みり謂ふ説ぞ。後人あかつ熟く考ふべし若狭人木嶋幸敦
と云るが皇国韵鏡といふ物を。語意考ふ説を知るや知ず
や。三音考れ説をば知ある趣りて。五十音図の初を。何の時
と云ことを。其傳ある記事あるべからず。應神天皇の御世に來朝せし。
王仁阿直岐らが。大命を奉りて。皇国の語音と。漢土の字音
とを考合せて。制作めたし事と推量らる。此時節を彼国
わても。已り国の音韵ごと。少り其事の議り及ふ頃ある。
如此ぬべきの音韵の奥義を究め。万世に傳へしめを。不思
議ある事と云るぞ。一通り然る言あるから。決めて。其今來人ら
の制作ふは非じかし。然るを輕嶋宮の御世頃を。加の国わ
て。魏晉わわるる時代りて。魏の李

登や云るが壱類晉の名静と云るる韻集と云ものあど。且
て記し出さる時かれど。頗ふる学才ありし魏主ばら。又語
と云ことを解せ。又怪異ある事わ思ふる眠るれば。彼大御
世に参來し百濟人などの。嘗ても及切ある知れる時り
非ざるふ。況て彼国壱を。漢音といふ呉音と云ふ。上ふ
云ふ如く其原音を多く物音ふて。此方の人の如く。五十音
を正単音ふ呼らや能は。ぬぬ。ぬぬ阿行の五壱ふ呼とも。
アイウエオかやふ聞え。もしく其を元より不正ありとも知
ざ。此皇国内ふ。都り遠ふ遥鄙の人の。其方音の
不正ぬり知ざる如く論語を教ふるふも。漢音わて。
論語巻之一ぬ。いひ。呉音ふ。論語巻之一とやらわ讀ま
て在ぬれで。彼方の正単音を聯絡て。其方音を正
し得むやも。此方の人ふ。我が正壱の音図を制て。それを
も彼方音を正し改ぬ。深く其事理
ふ思ふ。けて彼の荷田ば家ふ。偽法ある図を。其古説の添と
る上ふ。當昔ぬ古圖りて。伊以奉字于。延曳恵。於表十音の位
置も正し在りむふ。破失せて其あを少り存しふ。甚借ふ事

なるか。今愚蒙を按ずるに。略本和名抄の始り出られあるに音図。決めて其古図に類するなるべく所思なり。予が謂ふる略本和名抄とは五巻にして。板本二十巻の和名抄なる。羅浮散人の序に。倭名有詳畧二本と云る略本なり。此は下総国香取郡人にして己が門人なる。平山満晴と云ふ人家に持伝へしと。其元は。寛保癸亥歳に。京師の書肆にして。求得しる本なりと云ふ。毎巻の末に。天文丙午。天。誂其書之少々記して。筆者四人の名あり。今ら四百年に少り足ら無古写本にして。世に謂ふる天文本れ元本なり。然るに其和名抄の巻首に出しる音図の次第。左の如くにして。悉曇に倣へる韻鏡の類なり。都に合ず横位にして。其自序に。或漢語抄之文。或流俗人之説。先挙本文正説。各附出

○字切字。切字与反同。同音取下切字為正字。軽重清濁依上字。平上去入依下字。

於其注若本文未詳則直挙辨色立成。楊氏漢語抄。新撰本草。日本紀私記。或挙類聚国史。万葉集。三代式等所用之假字云ことを。其餘に漢語抄況も。廣く採しる由なるを合せ誓ふに。當時漢語抄と称せる古書あるを有りて。其は古事記の序に。本辭まるに勅語に舊辭れど有る類の書にして。皇国言に漢字を塡ある辭書なるを

羅刹留禮呂
摩弥卒咩毛
阿伊烏衣於
可枳久計古
尤之須世楚
多知津天都
那尓奴祢乃
波比不倍保
和為有惠遠
夜以由江与

史。古史徴の開題記り論ふる如くにて。然れども書等ハ。舊く此図の添ひて有し歟。其跡ハ巻首ハを出ひを在りむ。然らでハ。如此梵ハも唐ハも非ら思横位の。是五十音図の有べき由なし。其ハ梵の悉曇ハて竪位は此図ハ同ハれど。横位ハアカサタナハマヤラワの次第あり。唐ハ韵鑑ハてハ。竪位謙ハられど。横位ハハマタナカサアワヤラの次第あり。故是をもて此図を梵ハも唐ハも非ら思横位ありハ。前ハハ此ハ順。朝臣は。自制ならむ欲ハ思ふれど然ハ非ず。ハは此朝臣は和名抄ハ撰ばれある趣りて。皇朝の古言ハ精く知れる事ありく。殊り博聞強記ハして。梵唐の学ハ卓れて在せしハば。其自作ならむハハ。必ず其法り依らるべき事あり。然るり此図の横位。それ等と甚く

異ハ有ハ。上代固有の古図ハるこハ推て知ふし。此朝臣の此ハ本学ハて在せるこハ。羅浮散人の序ハ云ふる如くハて。村上天皇の勅ハ奉りて後撰歌集を撰ふる。謂ふる梨壺五人の最ハ。始ハて万葉集ハ訓点を施し。和名抄を撰ばれし功ハ更あり。其気質の優ハるこハ。人の為ハ作れる文ハれど。其語中ハ雄叙在腰抜則秋霜三尺を書き河原院の賦を作て。離大臣の奢侈を刺て。強呉滅ハ有前棘。姑蘇臺之露裏く。暴秦衰ハ無虎根咸陽宮之烟尤ハ云ふ。国司は任を請ふこハ二度ハれど許されず。嘶て其詩の序ハ。有好学而無益者。前泉州刺史順。一生貧而楽道云ふ。其懐を述ふ。ハて天暦の御世ハ至ハて。ハて天暦の御世ハ。五十音図ハ出さる書ハ。此和名抄ハり外ハ有こハなく。殊ハは梵ハも唐ハも非ら思固有ハ図ハきハ。其作者ハ。ハし詳ハら思ハも。此は本朝五十音図の亀鑑ハて云ふ。但し此音図ハ。津江の訓ハる歟用ひ鳥を阿行のウハ用ひあるハは。ハいハ。ハれど。津江ハ訓

くさりツエり用ひ來り。鳥えヨり用ふる例ふてウ壱と決
るえ例ふ違ゑど誤りハ非爻。元て本壱ぞふ違は称え字沒
バ人くの心くふ書こ也こと。かくて釋日本紀の歌解を。多く康
古をりのからひ也をり。かくて釋日本紀の歌解を。多く康
保まぐ法私記り採れる説ある。其釈中ふ。母女麻弥年女
母之五音相通而称之。伊ゑ伊江。阿伊宇江於之五音相通而
稱之。まゐ羅礼羅利留礼呂之五音相通而称之ぬぐ有るえ。
皆右ゑ同し音図ふ依ゑて釈る説ふり。其ゑ於を阿行ふ屬
さ侍て知ゆし。かを同書ゑ和与古五音相通。多与知五音
ゑ。伝書ふも於を阿行ふ相通れど云ふるも許多あ
ど。其ゑ末巻ふ論らふ。村田春海ゑ説ふ引出ゑり。けて和名
抄の成ゑる天暦の頃をり。二百四十年計ゑちち。後鳥羽院
天皇ゑ。文治元年ふ著せ侍。管絃音義といふ書ふ。五十音ゑち

一説あり。其説ゑ。阿者開口之時。從喉正中直出詞也。故雖延
其詞。響音永不變改。然而隨縁亦生種ゑ言詞。此阿音正身牙出
時生訶詞。少動口腋生和詞。自齒正出時生婆詞。少動頷生耶
詞。合脣急放生婆詞。少合緩放生摩詞。巻舌生羅詞。以舌付上
齶生多詞。舌少付上齶放而自鼻内出音之生奈詞也。如此隨
牙齒脣舌縁雖生種ゑ言辭。唯是阿一音隨縁生之詞。故終皆
悉帰正中之時。無非常住不變言也。乃知自阿一音生訶和婆
耶婆摩羅多奈之九音。宇一音亦隨牙齒脣舌縁生俱宇須由
不無留都奴之九音。伊一音亦隨牙齒脣舌縁生幾為志以比
美利知仁之九音。乎一音亦隨牙齒脣舌縁即生古於曽與保

阿宇伊乎衣
訶倶幾古計
和宇為於恵
婆須志曽世
耶由以與衣
婆不比保遍
摩無美毋免
羅留利呂礼
多都知土天
奈奴仁能祢

母呂土能之九音。衣一音亦隨
牙齒脣舌縁。即生計恵世衣遍
免礼天祢之九音。如是衆音。其
詞。雖似不同。皆帰口中正音畢。
悉居阿宇伊乎衣之本位。共常
住不変音也。例初阿九音可知
也。やあ。是説に依て圖を作
るべ斯の如し。此音説を文を
くるに。詞をみれば壱字の義と通
ゆ末に于時文治元年仲冬二
十三日北山隠倫京金草之也
あり予が見しを群書類從の

菅絃部に收さる本那り。管絃とハ云
ど。軒と笛に曲節低昂を示せる書なり。是竪横の位置上に
圖と合致。まゝ世に有ゆる圖とを異なる。管絃の曲節に
因る事ゆも有べ。れど。阿行を乎とおよ。和行を於と置と
ゆを錯りて。樂家に譜みゆ是位置なるゆ非ず。此を笛ゆ絃
ゆてゆ一説ゆ添べし。其は師に字音假字用格に唯音の輕
重次第を。イエアオウれる由論は
わし所ゆ古へより傳ゆる樂家の譜を見るゆあ行。た行。は行。
ら行等に音を用ひて其次第を皆右に如く。イエアオウ。チ
テクトツ。ヒヘハホフ。リレウロルや定免て物に音の低昂
を象とり。是五音に位の。自然とかく如なる故ゆり。と有
を思ひ合せて知べし。然れど此を物の音に低昂輕重の次
第ゆこを有を。言語音色の正位を。アイウエオに次第ゆり
思ひ混ふるこゆを。けて是書の音説。其發聲の様を云へ陥と。阿行五
音に終韻ゆ在て。常住不變ゆる由を云へるとハ。皆さる訶

ゐれど此を於遠の所屬を錯れる前証ふして。是こう後。の明魏法師が反切義解と始名ぶこふ悉曇の位置り校せる誤圖をと多く出あり。其誤圖どもが事ぞと明魏法師と云ふ人が事も。取綜て四巻ゐ云ふを俟べし其と和名抄ゐるは。皇國音圖の本ゐれど。是久しく埋もて。世り知らず成ゐし故り。さる圖等が出來しゐて。鈴屋宇斯我が錯置を正し改め。世ゐ過られて後り。かが古圖始めて世ゐ出こう。是をもて宇斯はも。其古圖ゐで所知ざりり。阿波礼宇斯が世ゐ在りゐし程ゐ。古を見られバ。何ゐの固有せる事と。露も知られゐて。世り有ふる圖の錯ゐを曉り。古語が假字ゐ於ひふ所屬が古圖かく諦し。古圖の顯はもて。其證とゐる事と。殊り感こゐる事ゐりゐ。○因り云ふ。字音假字用格九葉の衣ゐも

じ餘りが歌を。二首出されゐる後が歌ゐ。あり我こう。こが浪間り沉ゐ。ゐてこつくゐ。ゐる。ゐ。息もつきゐ。ゐ。で物をこそ。も。ゐ。是と句ごゐ。ゐ餘りて三十六字あり。其中ゐ第二句の。ゐは喉音ゐ。ぶら。あ行の格ゐ非ざる故ゐ此句と。はゐし聞ふくし其他の四をじハ阿行の音ゐり。故ゐ多く餘りゐを。どを耳ゐ立ざるを自然が妙ゐゐと有る歌を。北村季吟の土佐日記抄ゐ引こるゐと。浪間り沉ゐ。あてを。れゐつゐゐ。あひゐと有り。是ゐこ師の見られはいりゐ。歓はをりむ。柳其和名抄の音圖が。伊以衣惠於遠の所屬が正し沉ゐ。是正し。見得ゐる事は。我も他も。師がゐ。を所屬の辨を讀こと。恩頼ゐ因ゐ事ゐるが。尚是圖のみり非ず。他書ゐも。其所屬ゐるが往こ見えこり。然れど其中ゐも。已ゐ引ゐる釋日本紀り。阿伊宇江於之五音相通こゐるが。眞の所屬ゐ偽へこゐゐ。其餘ゐる。記者がゐ。偶然無こ書こゐが。

に合なる如く所思ふなり。其は其書の記者等が真の假字
は思はずして、下にも出たる村田春海が説中に引たる明月
記・類字假字遣の跋あるなどを、俗通用の如く、アイウエヲ
わかるるなきを避けて阿行に於を書けて竪行の位置の異
なりやとおもひて異み思ふ類ひなり。
なるは。字音假字用格に引きたる楽家の譜の伊延阿於宇
かの管絃音義の羅留利呂礼になぞ更なり。顕昭が古
今集注に。五音相通の事と云ふあり。カケコクキの五音。ウレ
ロルリの五音など云へる事あり。是等みな甚異なる位置な
りけり。顕昭が是言は神中抄にも出たり。共に彼ありて後
なくてふ歌の所なりき。後なくもがな心なくもと云
詞なりきて後なりとと同五音なり。教長卿云、ありて後なく
しもからくもなくもと云也。から字としきの五音かよふ故に
云ふなりあれて如此古く竪横次第が易れる音図の數有なり

しかも皆悉異にて貫ら物にて。中にも和名抄なる横十
行の次第にしきて。能く調は三喉音三行が所属を更なり。竪
行の位置も正しく。記者が古語字伝へし人なれど。此字
皇國音圖の亀鑑と定たる。然る古圖どもの有るに就て
も。荷田家は其古説字傳来せる事がし。余は甚尊く所思
ふなる。其は上件の如く。異なる音図の種々有しも。古人の甚
しく和用は作て設たるが。世に數多有る中の一図
をも傳へたる物なれば
も所按ありなり。

〇五十音圖訂正第三

上件五十聯音の古圖ども。其竪横の位置それ一様ならぬを。
世にある集めて其可否を論じたる訂正を加ふる説の無

ざく。其竪横の音韻ごとに差は有れど。位置は次第くいうに在ることを。反切は理了差支なる紀故よりも有べきれども。其は反切こそ有ま。古語本辭を釋ひと欲ぶるに。其竪横の音韻は元くり。位置は訂正まゝ專要は事なり。斯て今世に弘く用ゐる所の竪行。アイウエオ横行アカサタナハマヤラワは圖を。第後條に論ふ如く。悉曇章に依れる圖なれど。梵語の上ならい。隨分に宜りれど。皇國本辭の亀鑑と為るに。良行を第九

初	宮	閑	體	徵	啓	用	角	合	令	商	拓	助	羽	撮
ㅏ 唯韻非色	ㅣ 唯韻非色	ㅜ 唯韻非色	ㅓ 唯韻非色	ㅗ 唯韻非色										
아 阿 初指	이 伊 定體	우 宇 動用	어 延 押令	오 於 終助										
成喉音	舌剛 絶音	舌柔 兼舌	舌柔 兼鼻	唇内 輕	唇外 重	壯喉音	稚喉音	弄舌音						

	ㄱ	ㅅ	ㄷ	ㄴ	ㅂ	ㅁ	ㅈ	ㅇ	ㅋ
天津國	가 加 初極	사 佐 初進	다 多 初立	나 那 初成	바 波 初含	마 麻 初滿	자 夜 初壯	아 和 初稚	카 良 初總
天八衢	기 伎 定極	시 志 定進	디 知 定立	니 爾 定成	비 比 定含	미 美 定滿	지 以 定壯	이 韋 定稚	키 理 定總
顯國	구 久 用極	수 須 用進	두 都 用立	누 奴 用成	부 布 用含	무 牟 用滿	주 由 用壯	우 于 用稚	쿠 流 定總
泉平坂	게 祁 令極	세 世 令進	데 氐 令立	네 祢 令成	베 閉 令含	메 米 令滿	제 曳 令壯	에 恵 令稚	케 礼 令總
泉津國	고 古 終極	소 曾 終進	도 登 終立	노 能 終成	보 保 終含	모 毛 終滿	조 余 終壯	요 袁 終稚	코 呂 終總
	顎剛 絶音	顎柔 兼舌	舌剛 絶音	舌柔 兼鼻	唇内 輕	唇外 重	壯喉音	稚喉音	弄舌音

位置こそ尚宜しからざる。故今茲其を訂正して。第十位と定
免あり。其圖說此を著はして見て知はるべし。但し此音図にて
は再訂せる神字日文傳にも出せちがゐ。彼書に釈さる母韻トーTウエオ上父色
ロフハヒレVフロエユヨコは說等を合せ考ふ。彼此相発して
其精義を索むべきなり。五十聯音は經緯の次第を立れば。必ず斯如
なる事は由無。神字日文傳は既に論ずれど。此ふも其大略
まゝ餘意なも述むず。阿行は第一に在るべしハ素かはず。此
は天地初發の時の有様なり。一通ずと云でゝ。其義を揭し難き
事なれば先ずは事を云るし。抑世は初免天皇祖神は産
霊に資りて。大虛に会易混沌たる一物生出さはず。其物一
切に分れて。其輕清なし物は上り萌騰りて高天日は御國

と成る。其重濁なる物は下に凝結びて地宇都志国と成れ
るが。其根柢もまゝ別に一物成りて。此も離れて月豫美国
と成る。然して國土なる天に昇る道なり。天八衢と云ひ。國土
なる豫美國に降る道なり。泉津平坂と云ふ。是天地の初
發なる大元なり。委くハ師は古事記傳及び三大考にまゝ序が
るべし。然はは奇霊なはるも。五十音は阿行をはじめ其餘は九
行も。其竪に此道理なるいとうく有ひあるべ有はず。其人の
音聲も起り出はず原なり誓ふるは。我人共に母の胎内に在
る間に。其氣息を臍帯より受はずして呼吸なく。呼吸ふ
る故に。声なる素なれど。其外に聞ゆる音こそ無れ。

竟に初聲を揚げ発音は身體の中府に根ざして。喉口の間
に含み持ちて。此を我人の祖先始めて神より産靈を分賜せ
しなり。今に相續し來れる物にて。神眞の道に。靈根元氣と
稱せらるは是なり。身躰の中府とは。職員令神祇官の文に。鎮魂
府。故曰鎮魂とある義解に言招離遊之運魂鎮身躰之中
る丹田に辺を指せりと心得べし。玄家これを養ふに法あ
り。眞一の道と云ふ。皇朝にて行はせ給ふ鎮魂祭とは法あ
と申せども是に同じ。委くは別に考記せる物あり。是乃ち発ひ
り云ふと宇宙に響く出る聲にて。諸聲これより分出れ。
色の本にて有れど。人胎内に在りて其色いまだ出ざる
間に。かゝる天地と分るべき一物の混沌れて牙を含み在し
と全同じ趣なれど。但し此色色韻の発り出る始発を語る
事なる故に。胎内にある時は趣もて

云ふれと成人の上に言語に趣ふと此に同じ。然るに今既
に此書を著はさむと称るに此事えかくや説てむ。彼事は
云く記してむと。口を結び頭傾りて惟ひ寄せ原其ありて
云てむかく説てむと思ふ其ひてふ色ぞ此後いろに説も
て行くも元知らぬ間の外に聞ゆる事なきに色の初なり
に此色色書を著はせ上の事なくに非ず常に人と物言ふ
も誰にかれ如此ぞ有べき。然るに古今に誰やし人も。五十
是謂をも思ふ所なるに
音に事をいふに阿色を初音と云ざる者なく。梵説の謂
ゆる。阿字本不生といふ説に惑人る者なり。其契沖の和
日経に本不生故阿字現形と云ふに阿字を開く最初の
色にて。微隠に喉内に常にありて。ざと云ざれども。息の
出入に隨ふ故に。経に有情及非情阿字第一命と説くるを
此故なり。韻に有れぞ亦色にて。竪に伊ウエオ横に
カカサタナハマヤラワ。を生ぜ惣じてハ一切の色に最初
にて。一家の高祖の如し。梵文に諸字をかくに筆を下に最
初の一點これ阿にあれぞ。諸字諸音に種子なりと云ひ。谷川
氏も同説にて阿は一切色韻の本源言語の根基なり。大日

經疏に若無阿字則字不成とも見えたりやとも云ふるなど乃是説
なり。抑阿の開音の初めこそ有れ。音韻の根本なるに非ず。其由
を何と云ふぞ。人恒に口を開きて在るもの非ず。唇を合
せ口を閉るが常なれども。其開ある内に自然に字を含む
こと。上に云へるが如し。契冲説に。凡そ人の物云むとする時に。
侯内に風あり。此風外の風を引きて。丹
田に下りて壹を起す。喉内舌内唇内の所轉ずるに。種々
の音壹ありと云へども。其壹五十音に過ぎず。一條の息僅か
なれども。心と壽命とを兼ねて
なる似たれど。壽命これに係れり。心と壽命とを兼ねて
起る言語なりと云へる。祖其意を得たる説なり。其喉内に
風あるとは云へども。やがて予がいふ内に含める字の元壹
なる。桃説なりと云へる。
て。実に是れ宇宙の本不生と云へる。
て。此を阿字と思へる趣
なるべし。最偏に事なるこそ。是諸聲の分出る元壹なるが故
なり。嬰兒の生れて初聲を揚るに。其音宇阿なるを聞ゆ。此

を是世の風の。始めて鼻より入れるに。彼中府の元氣忽に
發動し。口を開きて。阿聲を出すなり。其色胎にて久しく含
畜なるに。宇聲に去あへず。首に冠ひて宇阿なるを推し聞き
るなど有り。世に赤子の初壹を。ヨギヤ。アと啼こと云へ
うなし聞くに。其人こゝに意くみ。元て物の壹を
なるこゝに萬の轉壹を。神世の人くに。ホヽキを聞くもの
て。法吉鳥と名づけを。後に歌にも。うくひすに啼くと云
ひ。杜鵑の啼くを。ホトヽギスと名告るを聞し。今ホゾン
カケスに鳴くと云ふ類。のかなりあれど。雅子の啼壹に和
訓栞に。紫式部日記を引てあるに見えたりと云るを陋し
らぬ聞成なる。然れどあるに。計にてハ方にわきを。
生れ強き兒なれど。宇阿　を引きて。剛に啼出る物なるに。
此初聲に宇阿二聲に分きて。阿と云ふ宇を成なる。開合
に聲の別なり。始めて。阿聲に上に居て廣く開に。宇聲に中

ふ合音(トデコエ)なるが。彼混沌こそし一物の。輕く清爽るハ天中に
て。重く濁れる地中に成もるふ同じ理よて。阿聲に用ゐ天
り地ふ(ナラ)ぶ(ブ)ゑ。宇聲に用ゐて地ふ比(ヒ)ゑ。宇聲に用ゐ。阿壹に用ゐハ。
初段の阿ゑり良ふ至る十壹に用ゐ指初むる音なるが。天
に用ゐ似さる波云ひ。宇壹に用ゐハ。第三段の宇ゑり。流ふ
至る十壹に。ミに動用ふる音なる。かくて於聲ゑ宇ゑり
ぐ。地に用ゐ似くるを云ふふり。
分れるゑり。其を何を以て云ふれど。彼天地の基ゑ初て成ゑて。
地に根底ゑ月豫見国生(ナ)りて。天地ゑ従ふ趣と。於聲に第五
段ふあると同じ理を以て是を知る。然て阿於に二壹そで
ふ生じて。次ゑ淤ゑ宇ゑり伊壹と延壹と波生ぜり。そを天
地泉に三に生ゑて後ゑ天衢(アマツミチ)あり。泉坂(ヨミツサカ)ちふふ惟ひ。ゑつ伊

に定體音ふて上ゑ居り。延(エ)に押令音(カセレカラスエヨエ)ふて。下ふ居るを以て
準(ジュン)ず知もり。契冲に正濫抄ふ。右五音の成れる次第を論じ
て云ひく。阿を一切の壹の初ふて梵本の阿字を
本不生の義あり。いをあの壹古ゑ觸れて轉じゐる壹なり。
梵文ふ伊字を根本に義といふ故を。草木の種ゑ蒔てそれ
ゑり初めて根を生ぜる如く。阿壹初めて轉ぜる故なり。ゑ
を脣ふ觸もて轉ぜ。ゑをいより生ぜ。ゑをいふ時。古ゑ觸れ
て最初ゑ隠微なるいの音をひて。いゑと云はる。をそゑゑ
り生ぜる故り。初ゑ隠微れるゑゑ音をひて。脣ゑ觸もてゑゑ
をゑ云はる。此二字も功ゑ初りもれれで阿ゑり生ぜるれ
りゑ云ひ。谷川氏ふ説ふ従りて。其和訓栞ゑ。凡を一ゑり
二三を生じ。二ゑり四ゑ生し。三ゑり五ゑ生ぜる故り。五音
相通の内り第二位と第四位ゑの音ハゑりて通じゐ。
ゑ云ふゑ共ゑ五音に位の。天地初発の道理ゑ函契して立
る音を心着ざゑし故なり。ゑをいふ最初り隠微なるい
に音をひて。いゑと云ふ。ゑを夜行のゑを出る初ゑり。ゑ
れゑ云ふるゑを和行のをふあれ。阿行のゑをあふさる
拗音ゑりゑ。
むゑを。然れで竪音に成れる次第を。宇阿於(ウアオエ)伊延(エ)に成る波

阿伊宇延於と次第せ所と。天地泉の事を成竟ませ所神等の。其に神態は幽契して。自然り立る位次なるが。其音韻に活用はと。其大神くらに惟神なる御詞を始めれるに也疑なし。其と鈴屋翁の既く教示されし如く。世り有る事に所自然の事ども。を爲て神世の故実を幽契せざれども。其に無れども。もと縦強ひて。此を神世に作と所事に非ず。天竺に悉曇章を効ひ也と云むも。彼悉曇の法もと其元と。我が天神の彼を授け給ひし法なるが故り。自然に符合せむを然も有べき事なり。さるに天地泉の初発の古傳。皇国其片端のみ記せ伝はるに。五色に於いて諦に我が古伝の旨に符ひ。彼邦の古伝り。其悉曇法を伝へる天神を。梵天王也も梵天子とも云へるが。其と我が神典なる天神等なること。日文伝に既に云ふ所如なれば。

此次第に天地初発の古伝に幽契して。其五色の活機の随り立る趣を。絶て人に才覚に定処得べき事に非ず。其圖を。し後世に畫こと。世初より神に御語の。惟神に定格の随り摸せ所が故り。素と自然に天地初発に道理に御ありと謂ふに難かくに在。古言槇の藤原宇万伎が序に。縣居大人の意を述て。此こと。はの祖ち人物を尋ねれど。五十連の違に有る。是ぞ古に天地の開け初はじめ時。ある幸はふ皇神のみ古と。御口より記ひ始発し所。天の益人高山に高く。の傳に。海の浪に寄くよ唱に来るもの也。と云る所に。村田春海が標記に。五十音を皇神の御口より記ひ初め。古へを学ぶ人に浮ぶ所言を云はじき事なりと云へる。然る言に如くも聞きど。字万伎が心。世りある五十音と云物を。皇神に御口より記ひ伝に給ひし也と云に非ず。其記ひし御言に音のり伝に集ひきば。五十

音りて有けもて推量りて云へるまて。此を発端り引出らる縣居大人の心を承ふる説あり。古学を深く心を用ひむを然ばうを以て斯見あくて有むやも。此を春海があぐけて経行ひ。生漢意ゆらむ者は伺ひ知ぬ事は非らず。けて経行の位置をかく攷定めて後わ。其緯行を論はむわ。上わ出せる和名抄。倘と管絃音義は二図共わ。其位置いと亂雑わして用ひ難し。世わ普く用ゆる図を。悉曇を因れる物まて宜りれど。其尚夜良和と次第あるく宜らず。故是と韵鏡は字母り影喩来まて。夜和良は次第りるを用ふ。然るを阿行と成喉音ふして。諸壱の最尊りるが。語は下わ在れとまく。第一行まは在を初先を知を。良行を舌末の音わして。諸壱は最卑ふ倘が。語は上り在れこをまく。終を以続る音

ゆる事。諸行は最末わ在を道理ふれぬまり。仍是事と五十音義解の俤は発端。まこと良行は所はて此訂正圖の其発端わ。初體用わも論ふを見る事し。令助は五字を標せる事。語意考わ出されゆる古説わ。宮徵角商羽の五字と。赤縣りて舊く阿行は五壱を稱を名ふて。語譯ふを然まで用ふ事りもて。韻鏡の書類と更まり。契冲の図わも出し。り以樂曲は事を述るれど。わ用ある事もあれど。今は音図わ。ふを以標せを。其名は義と。近く前漢は律志り。五壱者宮商角徵羽也。角觸也。物觸地而出戴芒角也。徵祉也。物盛大而嬉祉也。商章也。物成就可章度也。羽宇也。物聚藏宇覆之也。宮中居中央暢四方唱始施生為四壱綱夫壱中於宮觸於角祉於徵章於商宇於羽故四壱為宮紀也とあるわて其大凡を知を。まこと開啓合拓撮の五字は以標せる由を。阿伊宇延

於ける五音を概して云へば。宇をのみ合音とし。阿伊延於
を共に開音と云へれど。呼法を精しく論ぜれば。右五字は
趣おの別る。其は開ハ。口を全く開き呼ぶを云ふ。壁へば
阿を呼ぶに。全く口を開き喉より声を出せば即阿声を
生ず。啓ハ口を少し開き。喉より声を發して。唇を押啓く如
くなれば。乃伊声を生ず。合は唇を合せて。喉より声を出せば
即宇声を生ず。拓ハは推を義とす。顎を下げ推さげ喉より
発する声を舌上に兼る如く呼ぶば。即延声を生ず。撮ハ。俗
に窄口と云ふ様にして。喉より声を発されて。乃於声を生ず。
蓋古人の呼法なり。阿行より五声のみ非ず。良行の五声も亦

亦及ぶる事なり。そは阿加佐多那波麻夜和良の十声。ミ亦
みな啓に呼ばれ。宇久須都奴布弁由于流の十声。エ亦開に呼
ばれ。延祁世氐祢開米曳恵礼の十声。オ亦撮に呼ばれ。於古曽登
能保毛余袁呂の十声。ミ亦撮に呼ばれ。於古曽登
る説謂ふ。人々呼試みて知るべし。ちてトーエオ上等の
下に。各々唯韻非声を記せるなり。此は亦母韻の字にて。通
用の字にそ非ざる由なり。然て是五母韻字と。上の〇ヲ
〇等の十父声字と相偶して。下の五十音に通用文字を
成就せるなり。そは唯製字に然る耳に非ず。声音に成就す
る趣なり。固より然有りし故なり。文字に其趣より因りて製
れる也なり。そは契沖始めて発明せる事にて。和字正濫抄
に詳しく是趣なる図を出せり。委くは
日文傳に論ずれば見て知るべし。扨まる十行の各下に。成喉音。顎剛純音の

で記せるハ。悉曇わも韻鏡わも。斯樣わ壱ツ出処を示しあ
ヒ。是ハ我人共り呼試むる所を折衷して記せり。此ハ語
譯の道わ。殊わ要ある事あれバなり。但し阿夜和の三行を
わ同説なるわ。阿行を喉音とし。夜行を壯喉音とし。和行
あ椎喉音とせる由ハ。各行の下ハ云ふを見ハ。はハ加佐ツ
二行を漢わて牙齒の音とし。梵わハ加行を喉兼舌と云ひ。
佐行を古兼齒と云ふれど此ハ或説ハ。音韻の出処を定む
るわ。唇舌牙齒喉の五處を云ふハ謬なり。唇舌顎喉の四處
なり外り音壱を出ス処わ解るハ處なし。其中わ喉ハ其根元
わして。約ハれど喉わ所為一ツ故り唇舌顎ハ云事あれども。解る
る所無れバ其壱を出ス処ハ能はず。故り唇舌顎ハ云ハ
有ル処なり。牙齒の無しハ云ハハ。人老て牙齒を失はず
其牙齒の音ハ出ス処ハ無る処わ。牙齒脱落せるも加佐
の音ハ依然ハして出るハ。此二音必しも牙齒わ頼る
わ非ざるハし明り形ハを云ハる如ハあれど。加佐の二行を顎
音ハ剛柔ハ定ハ。梵説わ佐行ハ兼舌ハあ
るも然る事ハれど。其説ハも取ハり。けて阿行り。指初。定

體。動用。押令。終助ハ記せ初體用令助ハ。上わも云ハ古説
ふるハ。然る一字ハ〳〵わて。其義ハ足ざる故り。已ハ心
を以て指定動押終の五字を添ハり。然て其五字を下ハ九
行り通し。ハ故其九行わ。極進立成令滿壯椎総の九字を記
し。其毎行わ通せる。其初音わ各〳〵此等の字の義あて。
毎行り其意を管れハ。此事ハ其毎行の解わ
段の末わ。天津国。天八衢わ。次〳〵云ふを見て知ル。はハ毎
ハ五壱わ各〳〵此等ハ象あて。良行ハ。上わ云ハ如し。阿行
ハ故ハ。さて有れ。其ハ道理の然るわ。其道理の然るわ。実
古説ハ尊き由ハ。其ハし阿わ加行の從ハる五言わて云ハり。

阿加を明の指初むる言ゆて。天国の象あり。然て阿伎。阿久。阿祁。三段の活機の中ゆ。阿久と動用ふる言ゆて。顕國の象ゆ阿祁。阿伎と上りて定體り必言ゆる也。天衢の象あり。阿祁と下りて押令ゆる言ゆ阿祁が泉坂の象あり。さて仍下りて。阿古ゆ往ゆ阿古於と云ゆ氣勢ゆる御。其は陋言ゆれで敢て云はず。唯り然云ゆ勢御受て。阿加ゆ帰りて。阿加年と活機く。第五段の音。都てかく詞ゆ勢ゆ付りて。本ゆ帰らゆむる格ゆり。終助ゆ音ゆて。泉國の象ゆるこゆ是ゆて知ゆし。由と其象恰も言霊の天上ゆり降り。宇宙の間ゆ上下して。人の言語ゆ幸ゆるが。功竟て泉津国ゆ往くゆ思ゆ。其穢ゆを悪ひて。本の天上り帰るとを云べき趣ゆり。此を人已り現世の事竟り。死して其夫の泉津国ゆ往くゆ似るも。彼處ゆハ往ゆ爻。其和魂荒魂の謂ゆる魂魄ひゆ分りて。荒魂の国土り止ゆり。和魂の天り帰る理ゆる由ゆも惟ひ合ひゆ。事ゆ。此を事ゆ国ゆ少ゆ驚ゆし。謂ゆゆ。千万ゆ言語の活機。を爲て此格り違ゆ事ゆし。是これ初発ゆ五母韻ゆ自然りゆ言霊の具れで御。然るゆ御。其天津國の象ゆる阿邑と。泉津國ゆ象ゆる於邑と殊ゆ親ゆく通ゆ事あり。是ゆ天津國ゆ泉津国ゆ惟神ゆる道理り符ゆる事ゆり。其を神典ゆ想ひを潜発て考ゆ爻し。然れど少ゆ其端ゆ云むゆ津日ゆ大神 おはし坐しゆ故其和魂大道日神の屬副御し。ゆ故泉津国ゆ高天原ゆ伊邪那岐大神天其荒魂枉津日神屬副坐ゆを。実ゆ是和魂荒魂と申ゆく。日神月神二柱りゆ高天原と月夜見ゆ。ゆり放て給ふゆど。御霊りて。高天原と月夜見ゆ。ゆり放て給ふゆど。阿於二邑の上下ゆ遠く放て故ゆ。互ゆ相助りを通ひ故ゆ。是顕国ゆ幸ゆも。父母の如

く、兩輪の如く、言灵の道相通ひ、ぱら此行の祖声のミに非
ず、良行り至て諸子壱色も其因る順ひて、各其の初段五段の
音の、親しく相通ふを以て、如此を謂ふなり。抑五音經行の位次の、天地初發の古
說也。加く冥合して立ふ物ふて。今の其象あるを云ふ說と。
古今ふ云ひ出ふる人に有るやるしや知らず。己が始めて
云出る說のこを思ふり。はあ人に甚く驚き異むむ事に心
元ふく。尚精くも云ふ欲りれど。茲り竭し難りれど。本章ふ
次く說著ふを見て知る べし。実や已、かの玉に眞柱の書を
発の故実の、如此しも千方の言語活用の道音韻の位次ま
て不、冥合せむ物と意露も得知ら不、其ま師說ふも三大考
ふも、然る意ばまふる說の無れど、然も有るき事あるが、其
後しも古史の傳を書くを て、古語を訳し解るふ、漸くふし
て、其理ある事を悟を得て、今しも始めて加く著はし出ふ
事とい成まり、然れど如此思ひ決めさる初めに因縁を索

ぬ也で、加茂宇斯の、初體用令助に活用次第を示し著され
さる、恩頼ふてぞ起をりふ其に次條ふ出ふ語意考に說ふ
て知ふ べし。

○五十音活用第四

五十音に活用ふく其横韻の處分に語意考ふ。右ふ初體用令
助の五段を分ち記せし謂ふて。○加佐多那波麻夜和良を
初音と名く。譬へば行のむ越さむ。勝あむ等に類ひ。其事に
始めて起を言ふ也。自形うら初免ふ居れを言起ふ言を
云が有也ど。其に一事を云ひと次る先ふ。發ふ音のみふて。
意無りれど。此ふ舉る初言をハ異ふて。信濃人光枝が四辞解ふ、初段に九音を
始音と名りて、加て事を活に一言ふて、心ふ有る所を指云
ふ言ふり。其指とふ。疑ふ方ふ有れば即て疑ふ言と形て。

指に所ろ嘆く方ふ有れば即て打嘆く言とはるかく轉ろへど事をさに本れ言ふ異る事別し或て一言れ本言ふ
有て次ふ連ねる言ふ孤なて心別且行を孤て事を指
定むる言ふり戀しさ嬉しされど云は更ふ言れ上ふ在
て中ふ在て終ふ在て指定むる方の本れ心る因ば者ふ
し重くも輕くも成る指定むるも都て違ふ事れ
を多く事れ心を指持孤言ふり始を孤ふ在て終を孤ふ在り
て那は事を指納むる言ふり指推を所を納めては事を
定むる言とふり打嘆く方を指て打嘆く言ふ所を言ふ
言とも成る波し事を指含む言より成て上を送て愛しむ言夜て
ふ言る求むば言麻は事を指満ら次言廻らして言とはる方孤指て
下る事を指推を言疑ふ言とはる方を指て打嘆く言と
て事なる指和て定むる言と孤ふ重孤ふ良て事を指總る言はる
事れしと云ひ谷川氏れ和訓栞ふ横行第一位の十音ハ諸
吉の躰ふして活用を時て是ふ書む立ふ
云ふ終を始めを廻らして第五位と其義ッッふ相通ふど
も為ふり終を始めを廻らして第五位と其義ッッふ相通ふど
こを其所妙ふ知ら文や五十音ふ然り首尾の位義ッッふ相通ふど
ゐる文ゐし宇音の假字ふ宇韻ある音て帰ふ孤ば

うかう こうちかう 祭うれどの如く第一位を第五位と一音
ふ聞ゆ ちまち 書むむ立ふむれど云と孤て決して決せざ
るの意味ふ含めり んて五十音れ餘韻ふるが故ふる孤し
と云るて其ふ是語意考の説ありて後ふ考ふ廣めし説等
孤ふ〇伎志知爾比美以韋理ふ體音を名く譬へば冠如り
を云ひ扇ふ文を云ふ類ふ其物を定ふれる時れ言孤ふ此
音ども方孤れ言の終ある時を其事定ふ為て動ふ文其
言とでふ起りて後ふ定ふれば故ふ二段ふ居れて図辞解
段れ九音孤定音を名りて伎て事を指極むる言志ハ定を第二
鎮むる言ふり見し云し嬉しれど云て更ふり言れ中ふ在
め助くる言と成れるめ志の言れ心は違ふ文知て言孤持
ち合れ言迹て事を納め推次言廻らして上の心ふ定を送
り訂て下を迎ふば言を成迫刻比は事を含む置く言美て事
を満て備ふる言廻らして愛しみ蒙られ言以て推定む
て事れ初を孤くめ冠ばら孤も韋て定言れ重孤ふり理る
て事をを定むる言を云ひ和訓栞ふ第二位て未定の言

以上ども體とあり。第三位と。已定の上ども用とある譬へは扇をあふぎと云はあふぐと云はあふぎ度をけしを云てけしの義太刀現あるを云てあるの義網現あみと云はあむの義剪刀をはさみと云はてはさむの義ある類皆意て事物の名義をもて考ふ知るべしと云ふにも共に此説を廣めさる故なり。○久須都奴布牟由于流を用音を名く。譬へば。右に云る冠を。今かつぬ

る現。かぶるを云ひ。扇を動かし。用ふるなば。あふぐと云ふ類ひ。其物の態をいふ言ひを。故に言。方於の言の下に於

ける時を活ダかを。既に言定まりて後に動けば。三段に居れを。

図解に。第三段の九音を動音と名けて。久て事を極め指次言須て事を鎮め定ひる言。奴て事を推納むる言。都は事を合せ持る言。轉て事を

定ふ也。乃く。布は事を置き含む言。牟て事を備ふ満らる言

て事を成て結ふ言。由て定め推る言。于は動言の重ねふり流言

て事を定めぶる言といひ。和訓栞に。第三段横行て。皆決定

しある詞の下に云ふり。そは給そし。ぬと。ぞは給そし。ぬと詞ある

ぬ。いく夜ねざめ。ぬ。いく夜ねざめ。磨れ関守。と訓して。思らむ意ふり

を云ひ。霞あちこちの雪もきえぬ。やどよみしは。ぬ。略語なり。

と云ふ類なり。其活ざ。ぬ。きえぬし。不。寵不。消とも聞める

を以て明り。此を書に。ぞ。ぞこのみ読来る。歌に。ぞ。ぞ

ぞもぬとも読来れり。と云へる現も合せ思ふ。

○祝世氏禰閉米曳恵禮を令音を名く。譬へで成せ行け言牙れぞ

れ類なり。是を言れ下に用ふ時を。他に。いひ負をる事と

成て思。言をでに動て。今次に故に四段に居りぬ。図解に第三

段の九音を欲言を名けて祝て事を指押ふる信廻らして

事れ音を釈得る言。世て事現鎮め押める言。氏て事を合

せ押ふる言。廻らして上を定め立ちて下現迎ふる言。祝て

事を推押ふる言。辭める言とられて。奴より進ひ。閉

て事を置押ふる言。廻て片方に於くを云ふ。米て事を

備牙押ふる言。廻らして結ひ推る言。曳は定め押ふる言。恵

て事を治め押ふる言。禮て事を次に押ふる言と云ひ。和訓

栞に。第四の音。活用をふ。第一位に轉ぶもれ多し。目

はめ物を。ぱと轉ぶ。て。面のこ。面ぞの如し。矢の為
と称り。上れりは。金の加形。稲れいふ。酒れさの。手長れ為ふ
が。手枕のあまくらぞ成る類。ぞ也れり。音も呼ぶも亦同
じと云ふ。但し此音轉れ說て。今し誰も此趣ふ云ふ。言れし
也ぞ。此て轉通れ義るて非ず。是挙さる言ども。皆固とり然
る兩名あるて。其由は。本章れ其所に。ふ云ふを見て知
る。○古曾登能保毛余袁呂波助音ぞ名く。此ぞ万形れ言の
下ふ形るて。其言れ理を分ち。或て唯ふぞひて。其言波助く
ふるぞ。種々形也ぞ。凡て。は万形れ言の下ふれみ付ぬ也で
助言とし。且はて。ふ居也ぞ。○国辞解ふ。第五段れ九音を治音
と名りて。古て事をけし治むる
言。曾は事を定治むる言。能て事を持ち治むる言。毛は事を満らし治む
る言。袁は事を納治る言。保ハ事を含み治む
心を推治むる言。袁て事を治より。助け持形言。余て事れ
て。下を設くる言。月をあは也。人を戀しれど云て更ふり。終
れ句ふ云ひ捨しぬ。為ふ助
くる言とふりて。言の中にある

ぬ。袁れ意は違ふ方は形し。呂て事の心をそ忘治
むる言ふぞと云ふり。是說れぬ合せ考ふ也し。此横言ふ
て。人の訝る為ふ事あれば附て云ぞし。○古て雅言ふて
らば平言ふり。壁言へで雅ふ。多。往うむ往う毛ぞ云と平言ふ
はあこぞ云ぞ。○曾は。是ぞ彼ぞ。人ぞ我ぞ形ど云ひ定むる
助言ふり。よた曾波清て云ふて異ふて。分来。○登て此ぞ
ぞ。勿恋そのあぐひ。皆令ぞる詞ふぞ。
彼と形ぞ物と物れ間ふおふて。二形れ物を比ぶる辭ふり。
如をはぶきて。登ぞ云ふて別ふり。○能を上れ言を。下牙連くふ辭形り。山
れ。川の。戀れ思ひれふぞ體言波。下牙連くる時ふのみ云ふる
言れるを。後世を誤れて。そ俗言て。用ふ躰ふいひるに物
文の訓る。衍の時。還るれ時れぞ云て。くぶ俗言ふり。から文
訓行云ふ之時とやうて有る之ぞ。かしこの助辭れ例のみ

ゐり。から様の文をも、かれ言ふて毛
讀毛ゐらば。讀毛む偽言とゐる形り。○保と言ふ中ふのみ
有て。助辭とせしは聞えず。平言ふ毛。云ひをいふ毛云ふ
類ふ事あて。○毛は物の從ひて添る〻時ろ。是も彼もと云ふ
辭ふり。ま〻加毛那毛夜毛れど云ふ類の毛毛。助け言ふて。別ふ意ふし。○余と專ら令言ふ
て。成せを止毛をれどれ類ふて。陋〻彼を某よれど云ふ類
毛。事て死て呼出ふ詞ふり。まさやふ通はして。近江のや。我
はもや。うれしや。悲しやれど云
ふと。ものの轉ふり。○衰ふ三形あて。一ッふ毛。是を彼まと云ふ毛。其言を
下ふ示し付る助音ふり。二ふて。余ふ通ひて令ふる言形て。
三ッふて唯ふ言ふ餘て。その言ふ音とて。彼ふ
どの下ふ衰ふ
ふ類ひふて。○呂毛。總し死ろ。悲しきろ。家ろ。吾ろれぞれ呂

を助辭ふて。陋〻等ふ通はして。吾等と云ぶき所ふてろと
云ふもありと記し。師ふ漢字三音考。皇國言語ふ事といふ
天地の純粋正雅の暗けを後用ひて。溷雜不正の音を前ふ
ざるが故ふて。ちて如此く用ふる音て甚少れれども。彼此相
連ふて活用をる故ふ。幾千万ふ言語を成ふ云ふども足
ざる事ふく盡ふ事ふし。其一言の上ふ。亦活用あり
て假令で言思の如きは。ハヒフヘホ。轉用して。詰はむいひ。
ふ思ふ。ハヒフヘホ。轉用して往ふむ。ふ思ふ。たもひ。思ふ
往て。カキクケコ。還て往ふむ。ふ思ふ。
ふけ。還ふらむ。ふ思ふ。
て。第一音て。未然ふ。ざるふ調ひ。第二音て。方ふ然ふを。下ふ
云たくるふ用ひ。第三音て。方ふ然ふを。云ひ定むふ用ひ
第四音て。然せを令ふるふ用ふまさ上ふこそれ辭ある
時て。第三の音と同意ふ。ふ用ふまさ上ふこそれ辭ある
くれる活用ふ例ふし。陋〻上件の外ふも。種〻ふ活用あり
て。千言万語ふし其例格違ふこを無しまた辭ふ言を違ふて語
ふ成ふ。ハヒフヘホ。ヤカ。等ふ辭ふ。其意を
分ふ。凡て如此く活用助辭ふ因て。其義の細ふ精〻く分ふ

加行	ゆん	将行の躰 ゆき	今行 ゆく	今行 ゆけ	ゆこ	約言 ゆこう もれ	駑鈍云ゆこ參ゆうを約る非爰ゆうもはゆうんの古言ゆこて平言ふりふこも同し。
	かん	将鳴の躰 かき	今鳴 かく	今鳴 かけ	かこ	同	
佐行	まさん	将益の躰 まし	今益 まく	今益 ませ	まそ	約言 まさも もれ	駑鈍云まそはまさも約る非爰まさも參まさんれ古言まそて平言ふりふそも同じ。
	ふさん	将臥の躰 ふし	今臥 ふく	今臥 ふせ	ふそ	同	
多行	うたん	将打の躰 うち	今打 うつ	今打 うて	うと	約言 たも もれ	駑鈍云うと參うたもはうたんの古言ううとて平言ふりかとを同じ。
	かん	将勝の躰 かち	今勝 かつ	今勝 かて	かと	同	
那行	いぬん	将去の躰 いに	今去 いぬ	今去 いね	いの	約言 ふも もれ	駑鈍云いのはいふを約る非爰いふも參いふんれ古言いのは平言ふりふそも同し。
	たぬん	将死の躰 たに	今死 たぬ	今死 たね	たの	同	
波行	いはん	将云の躰 いひ	今云 いふ	今云 いへ	いふ	約言 はも もれ	駑鈍云いふ參いはも約る非爰いとをいはんの古言いふはは平言ふりはふも同じ。
	まはん	将舞の躰 まひ	今舞 まふ	今舞 まへ	まふ	同	

るこゝ甚妙ふして。外国の言語は能及ぶ所は非爰凡そ天地の間ふかくぢかり言語は精微なる国と有らじとゝ思はるゝ。ゝ云れさる説も合せ思ふ所し。然して次る。初言。體言。用言。令言。助言を。二言ふいふ類ゝて。左れは活用例を出されしゝ。今しも滑稽戯作な事とゝる徒までも。大抵是等は事と知て在れど誰う其説の古説作せはと。其由来を繹ぬる人は。世は乏しゝ慨くて復ふく此ふも標し出はゝそ人麻呂歌集ふ相はみあはと見え彩ゝ幕木は本を本と知る人そはゝ。と詠し歌は意をも思ひてはゝ。

○阿行は事ゝ既る出あれば此所ふゝ著さば。但し延約ゝ。阿行一は係りゝ。

麻行	いまん	将斎	斎の躰 いまし	今斎 いまし	今斎 いめ	いも
	かまん	将噛	噛の躰 かま	今噛 かま	今噛 かめ	かも
夜行	たいん	将老	老の躰 たひ	今老 たゑ	老ひの約 たえ	たゑ
	もいん	将萌	萌の躰 もい	今萌 もゆ	萌ゆの約 もえ	もえ
和行	そわゐ	将坐	坐の約 そね	坐ず約 そう	今坐 そゑ	そた
	うわゐ	将植	植の約 うね	植ず約 う〜	今植 うゑ	うた
良行	ちらん	将知	知れ躰 ちり	今知 ちる	今知 ちれ	ちろ
	をらん	将居	居れ躰 をり	今居 をる	今居 をれ	をろ

約平言	同
約平言	同
約平言	同
約平言	同
約平言	同
約平言	同

萬葉云、いもはいまを約す非ず、いまは古言、いもは平言なり、かもい同じ。

萬葉云、たゑ、たいもの約す非ず、たいをはたいんの古言、たゑは平言なり、をも同じ。

萬葉云、たゑをは作る歟、此件かく假字れ違ひ有れど、訂正し難し、其由を下に云ふ。

萬葉云、ちろ、をろ、ちらも、をらんの約す非ず、ちらをは古言、ちろは平言なり、をろも同じ。

○老を紀る。老此云於由。といひ。萬葉に於伊まゐ於與とも有れど夜行は伊ふを。然れど萬葉は於與之をばを詠しは。

伊を轉せし耳なり。此れたを。前後れ例の如く。平言を心得べし。たえれえを。由計れ約して。老をけを。今を言なり。次のもえの均し。萬葉云、万葉の於與之をはを老しをばふり、たえれえを、由計の約ふて、老をけを今を言ふり。轉を云さでも無く。乃同し夜行の同語有れも然ら爰此も同言にて。延てそれをを云ふべき言なり。○萌を。もゆもえと活くは常なり。万葉に。もゆる事なり。伊約〜を読さまで是も夜行に入るなり。此を推れる。もいん。毛を。とも云べし。今れ所ふもえを云ふえを。由計の約ふて。もえをけて。ふ言なり。常云ふもえと異なり。萬葉云もえまこもえをけの約ふし非ず。同行れ同言にして。延てそ毛をまを云ぶき言ふり。○そわらんを。次てんをも云べし。和良れ約を和ふまで是れ図中に。然云ふ図

も有るべし。須爲の爲も。和利に約ふるべき。そわそ。好り須恵て
體言ふ用ふる事本よりふて然れど此ふ云ふて。和禮に約り
ふて。次。にて今言はれる。須於て例の平言ふり。平言は。畧
記轉し云はれふるべし。如此云ふ図も有ふ例。夜行と和行
れ言も有るを。疑ふ人有ふれど。既に於側。於由。於與と聞えふ
云も有うらは。夜行に入る音ふり。然るべき餘の二言も。是
に準ずて知るべし。和行も。須恵。宇恵に言共に。次とり。うわそ。
字い少働くからは和行に入ふる。餘のうゐ。う於。も是ふ
準ずて知るべし。○篤胤云。須於。う於の於共ふ。衰に作る例し。
此て宇斯い図ぶ。於衰に所属に錯て。心著れざるべし故の
誤ふり。然て餘に二言とて。於ふ夜行に
従ずて。猶於夜於鬼の二言あるを云ふり。○以上て。語意考
ふ著はれ図ふ説等ふて。此をしも初發に云れしる。彼荷田
家をて傳受らるべし。初體用令助に古説ふ本ずて。其活機

の口訣ふ考示さるべきふ物ふるが其説ふふ言足らぬ。儀
難く所思る事も無ふ。そ非ずど言靈の幸はふ道ふ。如此し
も明亮ふ誨せる説て。是より以前ふ聞も例事ふく。謂もる
大匠人に授くるふ。規矩を以て次と云ふ物にて。後鈴屋翁
に物せる。詞に八衢といふ書。はふ此説ふ廣免て。ふそ出來
ふるべし。但し彼八衢ふ書しも。故鈴屋翁に天明といひし
年間ふ御図詞活用抄と名りて。古言の活用を二十
七會に分わりて。著さるべきる物の有るに本ずきて作られ
る物ふり。此書出來て後に其遺漏ふ拾ひて。追次に人ふ
著せる。其筋の書等も數有りとぞ。然るふ今しも八衢の。も
と活用抄に起れる事を知ふ人ふく。殊にそそ縣居宇斯
に。是説。その嚆矢ふるべと語り出る人も無ふは。謂の知ら
ず識らば。其則に従ふ云ふ類ふて。最も太じ記功德ふり
ける。然ふ其八衢はも。元より下に活機の。古書ふ例を見

得る隨に拾ひ載せ專とせし書ふて。古語は必有ふべき限りを。擧盡せる物ふらず。其遺憾ふるふ非ず。抑語意ふは。上件は活用例も。此を例せして。有ゆる言語を。推察せは意ふはを。其を引ふて放ふ次。書ひし措はふふるふひ有ふは。いで其由て。上文ふ。此を推次ふ。もいん。もとも云ふ云ひし。然云ふ圖も有ふはしれど云ひしふて推量られさり。故今宇斯の然ふる意を已が心と取立て。十行五十は毎音ふ。各ニ五十音を重ねて。二言ふ作て。章ニ類聚それぞ。古書ふる例を。强ひて探索ひふふ及ば次有ゆる言語盡く出來て。其本教及び活用は格例共ふ。いや炳焉ふ所知免て。其毎章左は如し。

○阿行篇本章

阿										
ラ	ワ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア	初
リ	ヰ	イ	ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ	定
ル	ウ	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ	用
レ	ヱ	エ	メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ	令
ロ	ヲ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ	終

伊										
ラ	ワ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア	初
リ	ヰ	イ	ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ	定
ル	ウ	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ	用
レ	ヱ	エ	メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ	令
ロ	ヲ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ	終

宇										
ラ	ワ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア	初
リ	ヰ	イ	ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ	定
ル	ウ	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ	用
レ	ヱ	エ	メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ	令
ロ	ヲ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ	終

延										
ラ	ワ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア	初
リ	ヰ	イ	ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ	定
ル	ウ	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ	用
レ	ヱ	エ	メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ	令
ロ	ヲ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ	終

於										
ラ	ワ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア	初
リ	ヰ	イ	ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ	定
ル	ウ	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ	用
レ	ヱ	エ	メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ	令
ロ	ヲ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ	終

右阿行の統言二百五十・毎音初行の拠言五ニ二十五字除て其用言各四十五あり。類從して九章ふ分て。

第一章

阿 古祁久伎加

伊 古祁久伎加

宇 古祁久伎加

延 古祁久伎加

於 古祁久伎加

○初段は受・四段は置・五段は活・三段は機ふ。阿行は加行は從ふ諸言は都て是章ふ就て攷ふ。

泡

第九章	第八章	第七章	第六章
阿 呂礼流理良	阿 袁恵于韋和	阿 余曳由以夜	阿 毛米牟美麻
伊 呂礼流理良	伊 袁恵于韋和	伊 余曳由以夜	伊 毛米牟美麻
宇 呂礼流理良	宇 袁恵于韋和	宇 余曳由以夜	宇 毛米牟美麻
延 呂礼流理良	延 袁恵于韋和	延 余曳由以夜	延 毛米牟美麻
於 呂礼流理良	於 袁恵于韋和	於 余曳由以夜	於 毛米牟美麻

○初段多く綱・二段は倦・四段は・五段は忘・三段は面れ活機かり・阿行ふ麻行の従ふ諸言多都て此章ふ就て考ふべし。

○初段は文・二段く・五段く・四段は・五段く・三段く・四段は・五段く・三段く・老れ活機かり・阿行ふ夜行の従ふ諸言は都て是章ふ就て攷ふべし。

○初段は泄・二段多・三段く殖・四段く・五段く・阿行ふ和行の従ふ諸言は都て此章ふ就て攷ふべし。

○初段多く現・二段は入・三段く潤・四段く得・五段多く織の活機かり・阿行ふ良行れ従ふ諸言は都て是章ふ就て攷ふべし。

第五章	第四章	第三章	第二章
阿 保閉布比波	阿 能祢奴尓那	阿 登氐部知多	阿 曾世須志佐
伊 保閉布比波	伊 能祢奴爾那	伊 登氐部知多	伊 曾世須志佐
宇 保閉布比波	宇 能祢奴尓那	宇 登氐部知多	宇 曾世須志佐
延 保閉布比波	延 能祢奴爾那	延 登氐部知多	延 曾世須志佐
於 保閉布比波	於 能祢奴尓那	於 登氐部知多	於 曾世須志佐

○初段多く浅・二段く勇・三段は薄・四段多く・五段は押の活機かり・阿行ふ佐行の従ふ諸言て都て此章ふ就て攷ふべし。

○初段は當・二段多く痛・三段く内・四段く・五段は落れ活機かり・阿行ふ多行の従ふ諸言は都て是章ふ就て攷ふべし。

○初段多く孔・二段は寢・三段て畝・四段は・五段く已れ活機かり・阿行ふ那行の従ふ諸言は都て此章ふ就て考ふべし。

○初段は遇・二段く言・三段多く諾・四段く・五段は逐の活機かり・阿行ふ波行れ従ふ諸言ハ都て是章ふ従て考ふべし。

○加行篇本章

右阿行の統言二百五十、毎音初行は初言五〜二十五なり。類従して九章ふ分ち、章一第章ふ除て其用言各〜四十五なり。

加										
ラ	ワ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア	初
リ	ヰ	イ	ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ	定
ル	ウ	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ	用
レ	ヱ	エ	メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ	令
ロ	ヲ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ	終

伎										
ラ	ワ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア	初
リ	ヰ	イ	ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ	定
ル	ウ	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ	用
レ	ヱ	エ	メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ	令
ロ	ヲ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ	終

久										
ラ	ワ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア	初
リ	ヰ	イ	ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ	定
ル	ウ	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ	用
レ	ヱ	エ	メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ	令
ロ	ヲ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ	終

祁										
ラ	ワ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア	初
リ	ヰ	イ	ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ	定
ル	ウ	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ	用
レ	ヱ	エ	メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ	令
ロ	ヲ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ	終

古										
ラ	ワ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア	初
リ	ヰ	イ	ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ	定
ル	ウ	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ	用
レ	ヱ	エ	メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ	令
ロ	ヲ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ	終

○初段は漏・四段を舞・五段を漕の活機なり。阿行の諸言は都て此章ふ就て考ふべし。

○初段を慇・二段は利・三段は漏・四段を舞・五段を漕の活機なり。阿行の諸言は都て此章ふ就て考ふ也。

第一章

加
古祁久伎加

伎
古祁久伎加

久
古祁久伎加

祁
古祁久伎加

古
古祁久伎加

第二章

加
曾世須志佐

伎
曾世須志佐

久
曾世須志佐

祁
曾世須志佐

古
曾世須志佐

第三章

加
登氐都知多

伎
登氐都知多

久
登氐都知多

祁
登氐都知多

古
登氐都知多

第四章

加
能祢奴尓那

伎
能祢奴爾那

久
能祢奴尓那

祁
能祢奴爾那

古
能祢奴尓那

第五章

加
保閉布比波

伎
保閉布比波

久
保閉布比波

祁
保閉布比波

古
保閉布比波

○初段は嵩・二段を著・三段を種・四段を消・五段は越の活機なり。加行は佐章ふ就て考ふ也。

○初段を坚・二段を鍛・三段を朽・四段を對の活機なり。加行の諸言は都て此章ふ就て考ふべし。

○初段を金・二段は杵・三段を國・四段は實・五段を突れの活機なり。加行ふ那章ふ就て考ふ也。

○初段を買・二段を際・三段は咋・四段を嶮・五段は乞の活機なり。加行ふ波章ふ就て考ふ也。

佐行

○

第一章

佐
古祁久伎加

志
古祁久伎加

須
古祁久伎加

世
古祁久伎加

曾
古祁久伎加

右佐行ハ統言二百五十・毎音和行の物言五ツ二十五を除て・其用言各〻四十五あり・類従して九章ニ分ル・

佐

ラ	ワ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア	初
リ	ヰ	イ	ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ	定
ル	ウ	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ	用
レ	ヱ	エ	メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ	令
ロ	ヲ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ	終

志

ラ	ワ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア	初
リ	ヰ	イ	ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ	定
ル	ウ	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ	用
レ	ヱ	エ	メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ	令
ロ	ヲ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ	終

須

ラ	ワ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア	初
リ	ヰ	イ	ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ	定
ル	ウ	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ	用
レ	ヱ	エ	メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ	令
ロ	ヲ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ	終

世

ラ	ワ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア	初
リ	ヰ	イ	ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ	定
ル	ウ	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ	用
レ	ヱ	エ	メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ	令
ロ	ヲ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ	終

曾

ラ	ワ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア	初
リ	ヰ	イ	ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ	定
ル	ウ	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ	用
レ	ヱ	エ	メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ	令
ロ	ヲ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ	終

○佐行篇本章

○初段ハ繁・二段ハ繁・三段ハ蹂・四段ハ蹇・五段ハ繁・背ハ活機ヨリ・佐行ノ加行ノ諸言ハ都テ是章ニ就テ攷ヘシ・

○四十六

第六章

加
毛米牟美麻

伎
毛米牟美麻

久
毛米牟美麻

祁
毛米牟美麻

古
毛米牟美麻

○初段ハ嚙・二段ハ組・四段ハ鋒・五段ハ込ハ活機ヨリ・加行ノ麻行ノ諸言ハ都テ此章ニ就テ考ヘル・

第七章

加
余曳由以夜

伎
余曳由以夜

久
余曳由以夜

祁
余曳由以夜

古
余曳由以夜

○初段ハ通・二段ハ消・三段ハ悔・四段ハ越・五段ハ行ハ活機ヨリ・加行ノ夜行ハ従ヘル諸言ハ都テ是章ニ就テ攷ヘシ・

第八章

加
袁恵于韋和

伎
袁恵于韋和

久
袁恵于韋和

祁
袁恵于韋和

古
袁恵于韋和

○初段ハ煙・二段ハ●・三段ハ●・四段ハ●・五段ハ凝ハ活機ヨリ・加行ノ和行ノ諸言ハ都テ此章ニ就テ考ヘル・

第九章

加
呂礼流理良

伎
呂礼流理良

久
呂礼流理良

祁
呂礼流理良

古
呂礼流理良

○初段ハ縁・二段ハ刈・三段ハ消・四段ハ切・五段ハ凝ハ活機ヨリ・加行ノ良行ハ従ヘル諸言ハ都テ是章ニ就テ攷ヘル・

第二章	第三章	第四章	第五章
佐	佐	佐	佐
曾世須志佐	登氏都知多	能祢奴尓那	保閑布比波
志	志	志	志
曾世須志佐	登氏都知多	能祢奴尓那	保閑布比波
須	須	須	須
曾世須志佐	登氏都知多	能祢奴尓那	保閑布比波
世	世	世	世
曾世須志佐	登氏都知多	能祢奴尓那	保閑布比波
曾	曾	曾	曾
曾世須志佐	登氏都知多	能祢奴尓那	保閑布比波

○初段て差・二段て繁・三段て晋・四段は為・五段多て進れ活機ち り・佐行り佐行の従ふ諸言は・都て此章ふ就て攷ふ可し

○初段て幸・二段は下・三段多て葉・四段は切・五段て外れ活機ち り・佐行る多行の従ふ諸言て・都て是章ふ就て攷ふ可し

○初段は砂・二段多て宋・三段は婿・四段て・五段は其の活機ち り・佐行り那行れ従ふ諸言て・都て此章ふ就て考ふ可し

○初段は吸・二段て逼・三段は副の活機ち り・佐行り波行れ従ふ諸言い・都て是章ふ就て攷ふ可し

第六章	第七章	第八章	第九章
佐	佐	佐	佐
毛米牟美麻	余曳由以夜	袁惠于韋和	呂礼流理良
志	志	志	志
毛米牟美麻	余曳由以夜	袁惠于韋和	呂礼流理良
須	須	須	須
毛米牟美麻	余曳由以夜	袁惠于韋和	呂礼流理良
世	世	世	世
毛米牟美麻	余曳由以夜	袁惠于韋和	呂礼流理良
曾	曾	曾	曾
毛米牟美麻	余曳由以夜	袁惠于韋和	呂礼流理良

○初段て冷・二段多て参・三段は清・四段は通・五段て潔の活機ち り・佐行ふ麻行れ従ふ諸言て・都て是章ふ就て考ふ可し

○初段は亮・二段て辭・三段て酸・四段て辞・五段多て奬の活機ち り・佐行る夜行れ従ふ諸言は・都て此章ふ就て攷ふ可し

○初段多て高・二段は辞・三段て居・四段て・五段多て・佐行ふ袁行の従ふ諸言多・都て是章ふ就て攷ふ可し

○初段て去・二段多て知・三段て爰・四段は通・五段て支れ活機ち り・佐行る良行の従ふ諸言は・都て此章ふ就て攷ふ可し

○多行篇本章

右多行ハ統言二百五十毎音五、二十五を除キて其ノ用言各、四十五あり、類從して九章ふ分ち、五

多										
ラ	ワ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア	初
リ	ヰ	イ	ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ	定
ル	ウ	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ	用
レ	ヱ	エ	メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ	令
ロ	ヲ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ	終

知										
ラ	ワ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア	初
リ	ヰ	イ	ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ	定
ル	ウ	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ	用
レ	ヱ	エ	メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ	令
ロ	ヲ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ	終

都										
ラ	ワ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア	初
リ	ヰ	イ	ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ	定
ル	ウ	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ	用
レ	ヱ	エ	メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ	令
ロ	ヲ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ	終

氏										
ラ	ワ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア	初
リ	ヰ	イ	ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ	定
ル	ウ	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ	用
レ	ヱ	エ	メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ	令
ロ	ヲ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ	終

登										
ラ	ワ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア	初
リ	ヰ	イ	ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ	定
ル	ウ	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ	用
レ	ヱ	エ	メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ	令
ロ	ヲ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ	終

第一章

多
古祁久伎加

知
古祁久伎加

都
古祁久伎加

氏
古祁久伎加

登
古祁久伎加

○初段は多・二段そ・三段て・四段て辞・五段て解ル活機あり、多行ハ付・四段て活機あり、多行ハ加行の従ハ諸言は都て是章ふ就て攷ふべし、

第二章

多
曾世須志佐

知
曾世須志佐

都
曾世須志佐

氏
曾世須志佐

登
曾世須志佐

○初段は足・二段そ・三段て・四段て辞・五段て利ル活機あり、多行ハ佐行の従ハ諸言は都て此章ふ就て攷ふ可し、

第三章

多
登氏都知多

知
登氏都知多

都
登氏都知多

氏
登氏都知多

登
登氏都知多

○初段そ立・二段そ・三段て土・四段は而・五段は関の活機あり、多行ハ多行ハ従ハ諸言は都て是章ふ就て攷ふべし、

第四章

多
能祢奴尓那

知
能祢奴尓那

都
能祢奴尓那

氏
能祢奴尓那

登
能祢奴尓那

○初段は種・二段て因・三段は常・四段て辞・五段は殿ル活機あり、多行ハ那行の従ハ諸言は都て此章ふ就て考ふ可し、

第五章

多
保閉布比波

知
保閉布比波

都
保閉布比波

氏
保閉布比波

登
保閉布比波

○初段て給・二段は小・三段そ終・四段は・五段そ波行ハ従ハ諸言て都て是章ふ就て考ふ可し、

第六章

多	麻美年米毛
知	麻美年米毛
都	麻美年米毛
氏	麻美年米毛
登	麻美年米毛

第七章

多	夜以由曳余
知	夜以由曳余
都	夜以由曳余
氏	夜以由曳余
登	夜以由曳余

第八章

多	和韋于恵袁
知	和韋于恵袁
都	和韋于恵袁
氏	和韋于恵袁
登	和韋于恵袁

第九章

多	良理流礼呂
知	良理流礼呂
都	良理流礼呂
氏	良理流礼呂
登	良理流礼呂

○初役は溜。二役て●。三役て摘。四役て辞。五役は富の活機あり。多行より麻行に従ふ諸言は。都て是章に就て考ふべし。

○初役て絶。二役は●。三役て露。四役は辞。五役て豊の活機あり。多行より夜行に従ふ諸言て。都て此章に就て攷ふべし。

○初役ゑ撓。二役て。三役は杖。四役て●。五役ゑ口の活機あり。多行より和行に従ふ諸言は。都て是章に就て攷ふべし。

○初役て垂。二役て散。三役て聯。四役ゑ照。五役て取の活機あり。多行より良行に従ふ諸言は。都て此章に就て考ふべし。

○那行篇本章

那

初	ア	カ	サ	タ	ナ	ハ	マ	ヤ	ワ	ラ
定	イ	キ	シ	チ	ニ	ヒ	ミ	イ	ヰ	リ
用	ウ	ク	ス	ツ	ヌ	フ	ム	ユ	ウ	ル
令	エ	ケ	セ	テ	ネ	ヘ	メ	エ	ヱ	レ
終	オ	コ	ソ	ト	ノ	ホ	モ	ヨ	ヲ	ロ

爾

初	ア	カ	サ	タ	ナ	ハ	マ	ヤ	ワ	ラ
定	イ	キ	シ	チ	ニ	ヒ	ミ	イ	ヰ	リ
用	ウ	ク	ス	ツ	ヌ	フ	ム	ユ	ウ	ル
令	エ	ケ	セ	テ	ネ	ヘ	メ	エ	ヱ	レ
終	オ	コ	ソ	ト	ノ	ホ	モ	ヨ	ヲ	ロ

奴

初	ア	カ	サ	タ	ナ	ハ	マ	ヤ	ワ	ラ
定	イ	キ	シ	チ	ニ	ヒ	ミ	イ	ヰ	リ
用	ウ	ク	ス	ツ	ヌ	フ	ム	ユ	ウ	ル
令	エ	ケ	セ	テ	ネ	ヘ	メ	エ	ヱ	レ
終	オ	コ	ソ	ト	ノ	ホ	モ	ヨ	ヲ	ロ

袮

初	ア	カ	サ	タ	ナ	ハ	マ	ヤ	ワ	ラ
定	イ	キ	シ	チ	ニ	ヒ	ミ	イ	ヰ	リ
用	ウ	ク	ス	ツ	ヌ	フ	ム	ユ	ウ	ル
令	エ	ケ	セ	テ	ネ	ヘ	メ	エ	ヱ	レ
終	オ	コ	ソ	ト	ノ	ホ	モ	ヨ	ヲ	ロ

能

初	ア	カ	サ	タ	ナ	ハ	マ	ヤ	ワ	ラ
定	イ	キ	シ	チ	ニ	ヒ	ミ	イ	ヰ	リ
用	ウ	ク	ス	ツ	ヌ	フ	ム	ユ	ウ	ル
令	エ	ケ	セ	テ	ネ	ヘ	メ	エ	ヱ	レ
終	オ	コ	ソ	ト	ノ	ホ	モ	ヨ	ヲ	ロ

右那行の統言二百五十。毎音初行の。惣言五ゝ二十五字除きて。其用言各ゝ四十五あり。類従して九章に分つ。

第一章

那	加伎久祁古
尓	加伎久祁古
奴	加伎久祁古
袮	加伎久祁古
能	加伎久祁古

○初役は和。二役て饒。三役て貫。四役ゑ願。五役は退の活機あり。那行より加行に従ふ諸言は。都て是章に就て攷ふべし。

第二章	第三章	第四章	第五章
那	那	那	那
曾世須志佐	登氐都知多	能祢奴爾那	保閇布比波
爾	尓	爾	尓
曾世須志佐	登氐都知多	能祢奴尓那	保閇布比波
奴	奴	奴	奴
曾世須志佐	登氐都知多	能祢奴爾那	保閇布比波
祢	祢	祢	祢
曾世須志佐	登氐都知多	能祢奴尓那	保閇布比波
能	能	能	能
曾世須志佐	登氐都知多	能祢奴爾那	保閇布比波

○初段は成。二段て似。三段て盗。四段を口。五段は尉。以て活機る。那行ハ佐行の従ハ諸言て都て此章ニ就て攷ハ可し。

○初段を鐸。二段て樵。三段は口。四段を鐸。五段を拾。以て活機る。那行ハ多行の従ハ諸言は都て是章ニ就て攷ハ可し。

○初段て縫。二段は新。三段て縄。四段は。五段は波。以て活機る。那行ハ伸の従ハ諸言は都て是章ニ就て考ハ可し。

○初段を嘗。二段て。三段は呑。四段は。五段を。以て活機る。那行ハ麻行の従ハ諸言は都て是章ニ就て考ハ可し。

○初段は惱。二段を煮。三段て口。四段て口。五段は。以て活機る。那行ハ夜行の従ハ諸言を都て是章ニ就て攷ハ可し。

○初段て布。二段は何。三段て荷。四段は。五段て活機る。那行ハ波行の従ハ諸言は都て此章ニ就て考ハ可し。

第六章	第七章	第八章	第九章
那	那	那	那
毛米牟美麻	余曳由以夜	袁惠于韋和	呂礼流理良
爾	尓	爾	尓
毛米牟美麻	余曳由以夜	袁惠于韋和	呂礼流理良
奴	奴	奴	奴
毛米牟美麻	余曳由以夜	袁惠于韋和	呂礼流理良
祢	祢	祢	祢
毛米牟美麻	余曳由以夜	袁惠于韋和	呂礼流理良
能	能	能	能
毛米牟美麻	余曳由以夜	袁惠于韋和	呂礼流理良

○初段を嘗。二段て。三段は呑。四段は。五段を。以て活機る。那行ハ麻行の従ハ諸言は都て是章ニ就て考ハ可し。

○初段を煮。二段て口。四段て口。五段は。以て活機る。那行ハ夜行の従ハ諸言を都て是章ニ就て攷ハ可し。

○初段は。二段は。四段は。五段も。以て活機る。那行ハ和行の従ハ言は聞えは是章ニ就て考ハ可し。

○初段を鳴。二段て柔。三段て濡。四段て練。五段は乗。以て活機る。那行ハ良行の従ハ諸言て都て此章ニ就て攷ハ可し。

○波行冪本章

波

	ア	カ	サ	タ	ナ	ハ	マ	ヤ	ワ	ラ
初	ア	カ	サ	タ	ナ	ハ	マ	ヤ	ワ	ラ
定	イ	キ	シ	チ	ニ	ヒ	ミ	イ	ヰ	リ
用	ウ	ク	ス	ツ	ヌ	フ	ム	ユ	ウ	ル
令	エ	ケ	セ	テ	ネ	ヘ	メ	エ	ヱ	レ
終	オ	コ	ソ	ト	ノ	ホ	モ	ヨ	ヲ	ロ

比

	ア	カ	サ	タ	ナ	ハ	マ	ヤ	ワ	ラ
初	ア	カ	サ	タ	ナ	ハ	マ	ヤ	ワ	ラ
定	イ	キ	シ	チ	ニ	ヒ	ミ	イ	ヰ	リ
用	ウ	ク	ス	ツ	ヌ	フ	ム	ユ	ウ	ル
令	エ	ケ	セ	テ	ネ	ヘ	メ	エ	ヱ	レ
終	オ	コ	ソ	ト	ノ	ホ	モ	ヨ	ヲ	ロ

布

	ア	カ	サ	タ	ナ	ハ	マ	ヤ	ワ	ラ
初	ア	カ	サ	タ	ナ	ハ	マ	ヤ	ワ	ラ
定	イ	キ	シ	チ	ニ	ヒ	ミ	イ	ヰ	リ
用	ウ	ク	ス	ツ	ヌ	フ	ム	ユ	ウ	ル
令	エ	ケ	セ	テ	ネ	ヘ	メ	エ	ヱ	レ
終	オ	コ	ソ	ト	ノ	ホ	モ	ヨ	ヲ	ロ

閉

	ア	カ	サ	タ	ナ	ハ	マ	ヤ	ワ	ラ
初	ア	カ	サ	タ	ナ	ハ	マ	ヤ	ワ	ラ
定	イ	キ	シ	チ	ニ	ヒ	ミ	イ	ヰ	リ
用	ウ	ク	ス	ツ	ヌ	フ	ム	ユ	ウ	ル
令	エ	ケ	セ	テ	ネ	ヘ	メ	エ	ヱ	レ
終	オ	コ	ソ	ト	ノ	ホ	モ	ヨ	ヲ	ロ

保

	ア	カ	サ	タ	ナ	ハ	マ	ヤ	ワ	ラ
初	ア	カ	サ	タ	ナ	ハ	マ	ヤ	ワ	ラ
定	イ	キ	シ	チ	ニ	ヒ	ミ	イ	ヰ	リ
用	ウ	ク	ス	ツ	ヌ	フ	ム	ユ	ウ	ル
令	エ	ケ	セ	テ	ネ	ヘ	メ	エ	ヱ	レ
終	オ	コ	ソ	ト	ノ	ホ	モ	ヨ	ヲ	ロ

右波行の統言二百五十。毎音を除きて。其用言各々四十五行を。初行は物言五ミ二十五
類従して九章に分つ。

第一章

	波	比	布	閉	保
1	加	加	加	加	加
2	伎	伎	伎	伎	伎
3	久	久	久	久	久
4	祁	祁	祁	祁	祁
5	古	古	古	古	古

○初役は吐。二役て引。三役は吹。四役て轟。五役て加て是都て波行の活の機に従て就し。諸言は祝の波行に都て章に就て考ふべし。

第二章

	波	比	布	閉	保
1	佐	佐	佐	佐	佐
2	志	志	志	志	志
3	須	須	須	須	須
4	世	世	世	世	世
5	曽	曽	曽	曽	曽

○初役は走。二役て減。三役は伏。四役て久。五役は佐。此都て波行の活の機に従て就し。諸言は乾の行に都て章に就て考ふべし。

第三章

	波	比	布	閉	保
1	多	多	多	多	多
2	知	知	知	知	知
3	都	都	都	都	都
4	氐	氐	氐	氐	氐
5	登	登	登	登	登

○四役て竟。二役は遶。三役は漬。多て是都て波行の活の機に従て就し。諸言は絆の行に都て章に就て考ふべし。

第四章

	波	比	布	閉	保
1	那	那	那	那	那
2	尓	尓	尓	尓	尓
3	奴	奴	奴	奴	奴
4	祢	祢	祢	祢	祢
5	能	能	能	能	能

○初役は舟。二役て嫉。三役て鄙。四役て撥。五役て那此都て波行の活の機に従て就し。諸言は骨の行に都て章に就て考ふべし。

第五章

	波	比	布	閉	保
1	波	波	波	波	波
2	比	比	比	比	比
3	布	布	布	布	布
4	閉	閉	閉	閉	閉
5	保	保	保	保	保

○初役て這。二役て戸。三役は含。四役は吹。五役は波是都て波行の活の機に従て就し。諸言は喋の行に都て章に就て考ふべし。

第一章

麻
古祁久伎加

美
古祁久伎加

牟
古祁久伎加

米
古祁久伎加

毛
古祁久伎加

○麻行篇本章十

右麻行の統言二百五十。毎音和行の物言五〻二十五は除て。其用言二百二十五を。類従して九章に分り。

麻

ラ	ワ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア	初
リ	ヰ	イ	ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ	定
ル	ウ	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ	用
レ	エ	エ	メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ	令
ロ	ヲ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ	終

美

ラ	ワ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア	初
リ	ヰ	イ	ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ	定
ル	ウ	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ	用
レ	エ	エ	メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ	令
ロ	ヲ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ	終

牟

ラ	ワ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア	初
リ	ヰ	イ	ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ	定
ル	ウ	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ	用
レ	エ	エ	メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ	令
ロ	ヲ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ	終

米

ラ	ワ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア	初
リ	ヰ	イ	ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ	定
ル	ウ	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ	用
レ	エ	エ	メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ	令
ロ	ヲ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ	終

毛

ラ	ワ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア	初
リ	ヰ	イ	ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ	定
ル	ウ	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ	用
レ	エ	エ	メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ	令
ロ	ヲ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ	終

○初俊て巻。二俊て甕。三俊て向。四俊は如。五俊て茂れ活機あり。麻行ふ加行の従ふ諸言は。都て是章に就て改ふ。

第六章

波
毛米牟美麻

比
毛米牟美麻

布
毛米牟美麻

閉
毛米牟美麻

保
毛米牟美麻

第七章

波
余曳由以夜

比
余曳由以夜

布
余曳由以夜

閉
余曳由以夜

保
余曳由以夜

第八章

波
袁恵于韋和

比
袁恵于韋和

布
袁恵于韋和

閉
袁恵于韋和

保
袁恵于韋和

第九章

波
呂礼流理良

比
呂礼流理良

布
呂礼流理良

閉
呂礼流理良

保
呂礼流理良

○初俊て蹈。四俊て食。二俊は祓。三俊は響。言れ活機あり。波行ふ麻行の従ふ諸言は。都て此章に就て考ふ。

○初俊て笛。四俊は繰。五俊は乾。三俊は吼。言れ活機あり。波行ふ夜行の従ふ諸言は。都て是章に就て改ふ。

○初俊て舊。四俊て張。二俊は綜。五俊は乾。三俊は梶。言れ活機あり。波行ふ良行の従ふ諸言は。都て此章に就て改ふ。

●五段共に言ふ。

第二章	第三章	第四章	第五章
麻	麻	麻	麻
曾世須志佐	登氏都知多	能祢奴尓那	保閇布比波
美	美	美	美
曾世須志佐	登氏都知多	能祢奴尓那	保閇布比波
牟	牟	牟	牟
曾世須志佐	登氏都知多	能祢奴尓那	保閇布比波
米	米	米	米
曾世須志佐	登氏都知多	能祢奴尓那	保閇布比波
毛	毛	毛	毛
曾世須志佐	登氏都知多	能祢奴尓那	保閇布比波

○初段て益・二段て春・三段は産・四段多召・五段は若れ活機なり。麻行の佐行の従ふ諸言て都て此章ふ就て攷ふべし。

○初段は待・二段ハ満・三段て睦・四段は愛・五段て持れ活機なり。麻行の多行の従ふ諸言て都て是章ふ就て攷ふべし。

○初段て非・二段は皆・三段多要・四段は・五段て物の活機なり。麻行の那行の従ふ諸言て都て此章ふ就て考ふべし。

○初段て舞・二段多・三段て諸・四段は・五段は水れ活機なり。麻行の波行の従ふ諸言て都て是章ふ就て考ふべし。

第六章	第七章	第八章	第九章
麻	麻	麻	麻
毛米牟美麻	余曳由以夜	袁惠于韋和	呂礼流理良
美	美	美	美
毛米牟美麻	余曳由以夜	袁惠于韋和	呂礼流理良
牟	牟	牟	牟
毛米牟美麻	余曳由以夜	袁惠于韋和	呂礼流理良
米	米	米	米
毛米牟美麻	余曳由以夜	袁惠于韋和	呂礼流理良
毛	毛	毛	毛
毛米牟美麻	余曳由以夜	袁惠于韋和	呂礼流理良

○初段て径・二段多耳・三段て臭・四段は目・五段は糠の活機なり。麻行ふ麻行の従ふ諸言は都て是章ふ就て考ふべし。

○初段は迷・二段は貶・三段て萠・四段て・五段て燃れ活機なり。麻行ふ夜行の従ふ諸言て都て此章て従て攷ふべし。

○初段ハ叅・二段は・三段て・四段も・五段も・若麻行ふ和行れ従ふ言れ聞えは是章ふ就て考ふべし。

○初段て圓・二段多満・三段は聚・四段て・五段は盛れ活機なり。麻行ふ良行れ従ふ諸言は都て是章ふ就て攷ふべし。

○夜行篇本章

夜	ラ	ワ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア	初
	リ	ヰ	イ	ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ	定
	ル	ウ	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ	用
	レ	ヱ	エ	メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ	令
	ロ	ヲ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ	終

以	ラ	ワ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア	初
	リ	ヰ	イ	ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ	定
	ル	ウ	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ	用
	レ	ヱ	エ	メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ	令
	ロ	ヲ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ	終

	ラ	ワ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア	初
	リ	ヰ	イ	ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ	定
	ル	ウ	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ	用
	レ	ヱ	エ	メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ	令
	ロ	ヲ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ	終

曳	ラ	ワ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア	初
	リ	ヰ	イ	ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ	定
	ル	ウ	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ	用
	レ	ヱ	エ	メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ	令
	ロ	ヲ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ	終

余	ラ	ワ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア	初
	リ	ヰ	イ	ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ	定
	ル	ウ	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ	用
	レ	ヱ	エ	メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ	令
	ロ	ヲ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ	終

右夜行の統言二百五十・毎音初行は拗言五・二十五は除て其用言二百二十五を類従して九章に分ち・

○初段は転四段は夷五段は

章一第

夜 古祁久伎加

以 古祁久伎加

由 古祁久伎加

曳 古祁久伎加

余 古祁久伎加

○初段は寛四段は奴二段は出三段は

横の活機ふり・夜行ふ諸言は都て此加

章二第

夜 曽世須志佐

以 曽世須志佐

由 曽世須志佐

曳 曽世須志佐

余 曽世須志佐

○初段て痩二段て勇三段は

寄の活機ふり・夜行ふ諸言は都て是佐

章三第

夜 登氏都知多

以 登氏都知多

由 登氏都知多

曳 登氏都知多

余 登氏都知多

○初段て暗二段て往三段て五段は

章四第

夜 能祢奴尓那

以 能祢奴爾那

由 能祢奴尓那

曳 能祢奴爾那

余 能祢奴尓那

○初段は四段て五段は

章五第

夜 保閉布比波

以 保閉布比波

由 保閉布比波

曳 保閉布比波

余 保閉布比波

○初段は結四段和二段て言三段は鰕五段は

夜行

○

第一章

和
古祁久伎加

韋
古祁久伎加

于
古祁久伎加

恵
古祁久伎加

袁
古祁久伎加

○和行篇本章

右和行は統言二百五十毎音初行の物言五〻二十五を除て其用言各〻四十五あり類従して九章を分り

和										
ラ	ワ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア	初
リ	ヰ	イ	ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ	定
ル	ウ	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ	用
レ	ヱ	エ	メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ	令
ロ	ヲ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ	終

韋										
ラ	ワ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア	初
リ	ヰ	イ	ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ	定
ル	ウ	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ	用
レ	ヱ	エ	メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ	令
ロ	ヲ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ	終

于										
ラ	ワ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア	初
リ	ヰ	イ	ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ	定
ル	ウ	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ	用
レ	ヱ	エ	メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ	令
ロ	ヲ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ	終

恵										
ラ	ワ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア	初
リ	ヰ	イ	ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ	定
ル	ウ	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ	用
レ	ヱ	エ	メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ	令
ロ	ヲ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ	終

袁										
ラ	ワ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア	初
リ	ヰ	イ	ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ	定
ル	ウ	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ	用
レ	ヱ	エ	メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ	令
ロ	ヲ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ	終

○初段ハ浮四段は●五段く稚二段は嚴三段ハ招く活機あり和行の従ふ諸言は都て是加行ふ就て攷ふ可し

第六章

夜
毛米牟美麻

以
毛米牟美麻

由
毛米牟美麻

曳
毛米牟美麻

余
毛米牟美麻

○初段ハ止二四段く夷五段く忌三段ハ弓四段く就て従ふ機あり夜行ふ諸言は都て此麻行ふ

第七章

夜
余曳由以夜

以
余曳由以夜

由
余曳由以夜

曳
余曳由以夜

余
余曳由以夜

○初段く稍二段は弥三段く辞五段く忌三段は忌四段ハ射三段く遣二段は擇五段く就て従ふ機あり夜行ふ諸言は都て此夜行ふ

第八章

夜
袁恵于韋和

以
袁恵于韋和

由
袁恵于韋和

曳
袁恵于韋和

余
袁恵于韋和

○初段は弱く二段は鶸三段く四段く●五段ハ弱く活機あり夜行ふ諸言は都て此和行ふ

第九章

夜
呂礼流理良

以
呂礼流理良

由
呂礼流理良

曳
呂礼流理良

余
呂礼流理良

○初段ハ弓四段く夷五段く忌三段ハ弱く活機あり夜行ふ諸言は都て此麻行ふ

○初段く稍二段は弥三段く辞五段く忌三段は忌四段く就て従ふ機あり夜行ふ諸言は都て是加行ふ

○初段く動四段ハ擇五段く射三段く就て従ふ機あり夜行ふ諸言は都て是良行ふ

○初段は弱二段は鶸三段く四段く●五段ハ弱く活機あり夜行ふ諸言は都て是良行ふ

○初段ハ止二四段く夷五段く忌三段ハ弱く活機あり夜行ふ諸言は都て此麻行ふ

○初段く稍二段は弥三段く辞五段く忌三段は忌四段く就て従ふ機あり夜行ふ諸言は都て是加行ふ

○初段く動四段ハ擇五段く射三段く就て従ふ機あり夜行ふ諸言は都て是良行ふ

第二章	第三章	第四章	第五章
和	和	和	和
曾世須志佐	登氐都知多	能祢奴尓那	保閑布比波
韋	韋	韋	韋
曾世須志佐	登氐都知多	能祢奴爾那	保閑布比波
于	于	于	于
曾世須志佐	登氐都知多	能祢奴尓那	保閑布比波
惠	惠	惠	惠
曾世須志佐	登氐都知多	能祢奴爾那	保閑布比波
袁	袁	袁	袁
曾世須志佐	登氐都知多	能祢奴尓那	保閑布比波

○初假て能二假く●三假て失四假は餌五假は食れ活機かり和行ろ佐行の從ふ諸言ハ都て是章ふ就て考ふべし

○初假は打四假て渡二假ハ●三假て嘔五假は乙假ハ活機る和行よ多行の從ふ諸言は都て此章よ就て考ふべし

○初假ハ罵四假て●三假も●四假も犬五假て●三假て女れ活機ふり和行ふ那行の從ふ諸言は都て是章ふ就て考ふ

○初假は倍二假は●三假ハ酔五假ハ活機り和行よ波行の從ふ諸言て都て此章よ就て考ふ

第六章	第七章	第八章	第九章
和	和	和	和
毛米牟美麻	余曳由以夜	袁惠于韋和	呂礼流理良
韋	韋	韋	韋
毛米牟美麻	余曳由以夜	袁惠于韋和	呂礼流理良
于	于	于	于
毛米牟美麻	余曳由以夜	袁惠于韋和	呂礼流理良
惠	惠	惠	惠
毛米牟美麻	余曳由以夜	袁惠于韋和	呂礼于理良
袁	袁	袁	袁
毛米牟美麻	余曳由以夜	袁惠于韋和	呂礼于理良

○初假て陪二假は●三假て産四假ハ咲五假て活機ふり和行ふ麻行の從ふ諸言て都て是章ふ就て考ふ

○初假は●二假も礼三假は敬四假て●五假は棒れ活機ふり和行ろ夜行の從ふ諸言は都て此章ふ就て攷ふ

●五段とゆふ無き言ふり

○初假て賣四假は勝五假は販れ活機ふり和行ろ良行の從ふ諸言て都て是章ふ就て攷ふ

○初假も破二假て居三假く四假は餘五假は析れ活機ふり和行ろ佐行の從ふ諸言て都て是章ふ就て攷ふ

○良行篇本章

良

ラ	ワ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア	初
リ	ヰ	イ	ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ	定
ル	ウ	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ	用
レ	ヱ	エ	メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ	令
ロ	ヲ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ	終

理

ラ	ワ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア	初
リ	ヰ	イ	ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ	定
ル	ウ	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ	用
レ	ヱ	エ	メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ	令
ロ	ヲ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ	終

流

ラ	ワ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア	初
リ	ヰ	イ	ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ	定
ル	ウ	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ	用
レ	ヱ	エ	メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ	令
ロ	ヲ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ	終

礼

ラ	ワ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア	初
リ	ヰ	イ	ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ	定
ル	ウ	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ	用
レ	ヱ	エ	メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ	令
ロ	ヲ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ	終

呂

ラ	ワ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア	初
リ	ヰ	イ	ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ	定
ル	ウ	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ	用
レ	ヱ	エ	メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ	令
ロ	ヲ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ	終

右良行は統言二百五十。此ぞも上章に如く分ぎて事ふて有れど。此行の音は頭に旅ける言どを外国ふは多く有まど。皇国にては唯ふ語辞ふのみ用ひて本言は頭に有こ一言も無れど。上章に如く分りじ事に無用なる挙るれど。其本章はを出せる形にて。上件は本章を総て十章。それ章ごとふ五に二百五十言ふて。十章都て合て二千五百言れるが。是ふて皇国の有ゆる本辭を更なり。夫は日放る国。彼の日は没る国及び宇宙万国は音韻言語は網羅に竭せり。然して毎章は段に字眞假字を一字ぶく標し。其下る片假字は並べ記せば。其眞假字ふ下る片假字は各く熟せて一言ぞ成る由なり。此を正しく合。阿加。阿伎。阿久。阿祁。阿古ぞ様に書べきまども。字畫の繁紀を厭ひて然も記せり。但し常には阿ぞも加とを一音れる様は一言とを云ふれど。今是二千五百言は一言ぞ云ふと。初章にて云むる。阿カ阿キれど様に二音を合せるる様は一言ぞハ称せるれる。ぶて文字を墨と朱を以て書別さるは。横行は字久須都奴布牟由于流を。其韻字ふて。共に合音れる様。餘ぞ皆開音れるが。此は古語は取扱ひ。ぶに外国音は捌なふ

を。專要の事ふれど。目下ふまゝ其差別を示せむとは擧ふ
ま。但し西土にて多く第三段の十音は更なり。和行は屬ぜる
音より外て和行の音ふをも開音と均しく用ひ來れど今も其定にて合口音ふて立ざる故なり。ゆへに右本
章合せて二千五百言は中ふ。皇国は是ふ下ふ阿行の从
ふ二百二十五言と。上ふ良行の如く二百五十言と。合せて
四百七十五言を除けど。二千二十五言中ふ。但し古語は中ふ。いうえを。先師さう
は三音の下ふ从ふる言も多くれど。其いうえを。
の云へれし如く。夜行和行のいうえて阿行の音ふは非ず。
を皇国言はそふ非ず外国ふて言も然ず。扨ゆへ良行の
上ふ於く言を。皇国ふ於を常多うり。其
を赤縣州は韻鏡ふる字母の來字は下ふる字等をれ良行
を冠れる徒ふる徒以て。其餘は外国をも准ず知る故し。此
を言ず之の幸ひ多蠻夷の陋し知国ふして。音音の渋を
濁れるを故ず。自然ふ弄舌音の多くう於其良行は音の上

ず於ふ於言を有る形ず。皇国を異国と
は言語音音は尊卑これふを知る故し。抑是二千二十五言
はを。天地初發は時より。神は御世經て。傳はを來し天語の。
皇国ず有ゆる言語は限ふふが。此を於く神ふ於ふ。諸外
国ふも普く傳用せし免給ずを中ハ所聞る物ふ。憐む
べし。其國ふは民等素ふり蠢化の鈍口ふして。皇國は如く。
音韻明亮ふら文。其ず上ず轉は本言は訛を於く。竟ず皆
共ふ。俦離駅舌は音中れも成終ふりふ。此事いまう赤縣州なを云むず。
其音ハを中を皇国と同し形ず。元ふり音語ふるうふ。譬
ずバ皇国ふて多阿伎阿久阿祁阿加牟と活きて明開ふど
は義ふる言は彼邦ふて多屋悪れどは音語中ふり。阿美阿
牟阿米阿麻牟中を活きて網編ふどの字義ふる言は闇奄安
れどは音語と於り。阿比阿布阿閉阿波牟と活きて遇相ふ
中を義形る言は鴨壓ふどは音語中を成れる如く。皆いと

遠き異言とぞ變じたる。然も有れど。其八千ぢは言の中ふ
も彼邦ふて皇国音語れるも此方は訓語と全同じ。なも數多
あり。そは皇国ふて皇波伎波久波加年加ど活く言は彼邦
ふて剎字は音ぞふり。志迩志奴志那年ぞ働く言の。彼ふて
死字は音形る類はいら存れり。然れど彼邦もぞ抑音の
音語む彼とある国ありしが。訓語をも交用ひくるを。後
ふも其をこれ音韻の語ふ訛れる物と見えそう。其も唐代
以前の韻書等ふて攷ふるふ。近くは彼撓壱の字等は韻の
或もマミムメモぞ動くあり。或もナニヌネノぞ動くも有
る形ど彼以て。諸字の韻もぞ動く。其をも
と訓語より轉ぜし故と知られる。殊て天竺も音語ふ非
ず訓語形るが故て。我が古言彼其はふ傳ずさる語も少
からば。其も予が印度藏志といふ書て。往く論ふを
見て知る。其餘の国語もはく准ずて知る。はて皇
国の言語も。其二千五百言は轉用蔓延して。千言万語と成
れる物ふるが此を容易く釋得るふ法あり。其ぞ右は如く
阿ら和て至る九條を。各く九章ふ區別もれど。九く八十

一章と成る。章ごぞる五段二十五言形く成るを。各く其
良行は組ある章を第一章とし。ぞの次第を立易ふる由
本編ふ説く彼。其章くは毎段ふ皇典の古語て徴して
見て悟る。はて其章くは毎段ふ皇典の古語て徴して
推攷ふまば。其言は活用轉例も更ふり。往昔ふ其言れ有て
や無しや。はく其雅言。平言。陋言は差別も忽爾ふ知られ。皇
国は言語の本原。ぞ。て此章段中ふ亮然さう。故其説を彙
集して。皇典語彙と號く。然れど其草稿も未成し得ず。但し此ぞ
臆断ふ似ふまど。実ふは然らず。縣居宇斯は上件の活用例
を著はし。的をはして指を彼さ免弓を張りて矢を形ひ
予彼して発し免給ふる者れり。然れど此書と語彙ぞよう
も著せる説等ぞ。て彼宇斯の後説とぞ謂ふ。て加ぞれる。
抑其雅言ぞは。皇典古籍て用ひ來れる古言は正雅ふる彼

謂ひ。平言とは。彼行加牟を由古。鳴加牟を那古。益佐牟を麻曽。阡佐牟を布曽といふ類を云ひ。陋言とは。息を延伎。石を延志。市を延知。往を延爾。岩を延波。今を延麻。彌を延夜と云ふ類ひ。常人の言ふ多くは是なり。但し平言を宇斯の始めて設け給れる名々。古説ふ元より有りし名々知らず。陋言を已が始めて設け給し名ふ。そは此等の類ひも右章段中は言ふし有れど。雅言ふは陋と志て用ひざる故ふ名々なり。然れども此を世の俗言とは謂ふ言とは異なり。思ひ混ふ故車ふ。此て此陋言は段々を更なり。其餘の段中ふも。一言も。古今は雅言ふ用ゐる言の無なし。其段々●を様ふ黒点を標し。唯一言ふても古言は有る段をば。其餘の四言なし後世の所聞ぶとも。舊く是を必ず有りし言は。今ふ傳はら思物と定め故。如此て右八十一章四百五段都て是二千二十五言を云ふと。實ふて其本言多く四百五言ふ有る中ふ。かは黒点ふ標せ給ふ六十一段ふ。古今ふ絶て無ふ言ふれば。殘る本言を僅ふ三百四十四言ふ。此を了解されば。語譯の學まは其大端を定ぬ。其本言は僅ふ斯の如ふ有る由を少ふ云はむふ。譬ふば阿行の伊ふ加行は以ふて氣の活機して。イキ。イク。イケ。イカム。と動ふ。イカリ。イカル。イカレ。イカラム。イカシ。イカス。イカセ。イカサム。を用ひて。みれ気を出さる言ふるグ。イコは生むの平言ふて。廃を志る如ふれど。イコヒ。イコフ。イコヘ。イコハムを用ひて。是も気の活用ふり。ふて人は志あらく氣ふ活ふ云ふ。諸国を知ら爰。我が秋田ふて。ムと動くし云ひ。ふく獣の喫相むと志て。志ふて相ふを。イコラカミ。イカムふと云ふ。ふを嚴免しは。イカ放ふて共ふ気は活用ふり。すく同じ伊ふ佐行の以ふて率早勇ふどは活機ふて。イシ。イス。イセ。イサミ。イサム。イサメ。イサマシを用ひ平

言のイソをイソギ・イソゲ・イソガン・イソガシ・イソシミ・イソシムなど用ひて共に勤しむを轉用せるなり。是を準ずして三百四十四段の本言は一言ずつ解る由を辨ずるむ。千言万語を解釈せむこそ。然しも難事ならず非ざるれども如此まで古言解釋の定式を立しとて。彌益々ふ言霊の微妙なる旨を思ひ得るに就て。はるゝ殊に万聲大統譜といふ物をも制きる故。上は九條八十一章と並べ視て。今新に替ずに得る事なむ有ふ。そは此言霊の道まゝ測らず傳ずに給ひし。九宮易威の道理なり。其數其用盡く符合してそも。神世に大国主神。かは赤縣州を取免賜ひし時に。彼国ふ有々ふ。大国主神を彼邦にて。太昊伏羲氏とも。扶桑太帝とも白せり。九宮易威の事。其古説に。大衍之數五十。其用四十有五。天地之大數莫過乎五。莫中乎五居中宮以制万品。中之所以起也。中之所以止也。亀筮之所以霊妙也。

神響之所以豊融也。通乎此則條達而無礙者也。一竪一横數之所以生也。數之所由成也。是故太一取其數以行九宮四正四維皆合於十五。五音六律七宿由此作焉と見えたる是なり。此事を思へば太昊古易傳。赤縣太古傳等に云ふはを見べし。然るに五十は正音ばかり字は一音ずつ初まりて。五母韻ふ分れたるが。謂ゆる太極の一物なる五數具はり。天地之大數。莫過乎五。莫中乎五云々を有ふる符ひ。字音まゝ横に響おて十父聲を成し。五母韻と十五相偶して。五十は正音を生せるが。大衍之數五十を謂ふふ合し。ふは其五十音ふ。各々五十音を重ぬ。上條々は如く。毎段五十言ずつを成るを。其中に阿行は五聲の。下ふ隷く言を無き故に。毎段ふ流其五言ずつ悉く除き棄るふ。各々四十五言ずつを成る

此を大衍之數五十。其用四十有五を有はり符合し。はは大衍之數五十。其用四十有五といふ文を。今傳はる周易の繫辭傳より。其委曲の說を。太昊古易傳より論ずる四十有九と有るを謂ふ。其委曲の說を。太昊古易傳より論ずる はを見て知るべし。はて毎條五段の四十五言はれを。九章ゆゑ分て。九く八十一章まで。毎章二十五言はるゞ。謂ゆる天數二十有五はの數ふ冥契し。其合口音はるを言みる中央より位して。音韻の竪横を更ふり。斜ふも貫通して。五十音は活機とはて。約れば五韻十聲は十五より帰し。ふは約むれば五音とはて。終りの字は元聲より帰る。あを熟想ふふ。諦より九宮は。五を中宮ふ居て万品を制し。中は起止を はは所ふして。一從一横數の由て生じ。由り成る所と謂ふり

符合せり。何ふ奇異はる事ふ非ずや。然れを彼九宮は文より。妙也。神響之所以豊融也。通平此則條達而無礙者矣と有れど亀筮の霊妙はる耳ふを非ず。神響豊融ふして。五音六律もまゝ此道理より作れを。言霊の幸はふ道はゝ此道理ゆ等しはを。然も有ゆを事とぞ所思ゆる。抑已ゞ九宮易威の考說はも。今一時より成きる說ふを非ず。其初を大国主神は。天神之御子命ふ。国避はして後ゆ。何處ふゝ御坐ゝむと。深く誓索ゆるとを。赤縣州は上古ふ。大昊伏羲氏と聞えしゝ。此大神ゆ坐ゝを悟を得ゆるふ。其制し給へを謂ふ事どもは。等閑より措ず難くて。何くれを攷明せふ中ふ。九宮易威の道は。天下の万理を統る道はる事はし曉を得しゝば。其說ゆ種こは書ゆかず著はし其を赤縣太古傳を

更れり。易と暦とに関れる著述と雖も十数部あれども編りそ
こに此ふ本紀おて説の立さは書等れて。
況信ぜるこそ。既る十年を多く過あり。然るに去年は冬を
りたて。古史傳を再校せむと将るに。按ふ旨ありて上
件の十條八十一章を錯綜せるよ。始めて其数其用の九宮
易威れ道に同じき事を惟ひ得て。徴し辨ふるこそ右は如
し。思ひもや其九宮は数の。かく言語は道るも符合せむ物
ぞは。時れるうを奇しれうも。然も有れど人或も。我が古言
り法れるう。彼は九宮先ふありて。我が古言は数それふ効
るるう。其先後は知ぬうら更。然きば此を偶然の事ふりと
ぞも有らむう。抑ぞを偶然の事る非ず。まさに其先後あふふ
も非ず。天地の道元より一枚ふして。東華西蕃元より道り
隔ふりれも。此ふも彼りも。惟神る傳は
る事ふを。其数の備はれるふぞ有れふ。○或人問て云く。語

意考る。上件は二言ふいふ類のみならず。同九行ふ。各三言
ふ云へる類ぞて。其活用例をも出される。然るり其を此
る慓ざふを。殊り故よし有る事ぞるう。答ぞ爲て言語も。五
十音は一言ゝゝふ。各ゝ其義あふ。下ふ他音は似ひて。二
音は言ぞ成るる至りて。始めて活機を生じ。異義をも生ぞ
る況。まゝ他音は副て。三音の言と成れども其義易らず。四
音五音は言ふ至りて。二言況合せるふ語と成る物ふき
ど。三音以上は語を。みふ二音は言ふ攝して。釋る故り。其
三言ふいふ類と有る説をば標ばふり。今其例をば云むも
有れど。本編皇典語彙る説く所。を爲て其釈例を用ひされ
て。披き見て知る爲し。今は云ふ云はむを煩はしくふ。

五十音義訣巻之二

大壑　平篤胤撰述
男　鐵胤
孫　延胤　謹校

○喉音三行辯論第五

上件五十音の經緯。及び活用の大段。已でに定めて後に。喉音阿夜和三行の有る所以を辯へ知る應し。抑是三行ある故は。日文にては。ト丨丅十丄の母韻に。◡工○の父聲相偶して成れる物なりと云ふ事も無れど。音韻の始め。唯阿行の母韻のミなる時に。夜和二行の生ぜし道理を心得ずては音韻の道に通達し難き故等なり。其を論げ字音假字用格

の喉音三行辯といふ條(クダリ)立られて。其説の。此三行と。アイウエオとより分(ワカ)れ出(イデ)し音(コエ)のして。其本は一つなり。然(サテ)て一つのして三つに分れある所以(ユエ)。アイウエオと五音の下(シタ)。皆各アイウエオは五音に重(カサ)なれば。自然と於ぐ通(カヨ)はして。ヤイユエヨ。ワヰウヱヲの音とある故に。別の此二行と有るなり。喉音のみなら此差別ありて。餘のカサタナハマラの七行に是無きといふのみ云ふ。ヤ行ワ行の音と。もと二音の故重なりしなる物なれば。実と謂ふ拗音なり。然れども喉音と餘音の類せず。柔輭隱微の通ぶ故に。二音故に重なれども。自然の故なり切なして。直音の如きある故なり。此二行の音と別なる音なり。餘の七行と。二音を重ねる時と。二音の分れて。諦の拗音のして。一音の故ぐ通ふる事なし。故に喉音の外は皆單行の通ふ例なり。故に古言の中の。アイウエオの音の重なりなる訳は。一も有ること無し。されば其明證

なり。老(オイ)船などのイエと。ヤ行のイエなる故に。オユ(オイ)エと。活用せず。通ふ地名の秋田の阿(アイ)太(タ)。置賜の於(オイ)太(タ)キの三つある伊などは。キの轉ぜしにて。ヤ行もワ行も。ア行より生ぜし通音なる故に。三行の分通と云ふべきも。或は髣髴とも云ふ。

例なるが如く。一つに思へば。まづ諦の三つのして。古は混淆なること更に無し。然れども此三行と。是字音の辯ぜ通ふも。亦緊要の事なり。能く會得せざるべし。韵学家の喉音を論せるに。皆混雜して。ヤ行ワ行と。畢竟無用の長物の如し。通ふ御国の音韵と。甚悉曇の似たる事多し。然れども。只管の彼法に囚りて。是を治める時は。通ふ違ふ事なし。殊に喉音三行と。吾が古言の音とよく解せる者なれば。其義を曉ることの為なり。五十連音図中の。イヰ。エヱ。オヲは所属の錯りなり。或は平をヤ行。まづはア行の属

し。或ゝエ段ア行ヤ行の属もる類多し。惑ふても勿き。若一字も此所属を錯るとなく。三行の辨ふ明らかなる。先初て是を正し置て。しかる後諸へて。此に如る図を作て出られしう。

喉音三行分生圖

中 ア

ア	ア	ア	ア	ア
オ	エ	ウ	イ	ア
ハ	ハ	ハ	ハ	ハ
オ	エ	ウ	イ	ア

重 ウ

ウ	ウ	ウ	ウ	ウ
オ	エ	ウ	イ	ア
ハ	ハ	ハ	ハ	ハ
ヲ	エ	ウ	ヰ	ワ
トル	トル	トル	トル	トル

軽 イ

イ	イ	イ	イ	イ
オ	エ	ウ	イ	ア
ハ	ハ	ハ	ハ	ハ
ヨ	エ	ユ	イ	ヤ
トル	トル	トル	トル	トル

オ

オ	オ	オ	オ	オ
オ	エ	ウ	イ	ア
モ	モ	モ	モ	モ
ヲ	エ	ウ	ヰ	ワ
トル	トル	トル	トル	トル

エ

エ	エ	エ	エ	エ
オ	エ	ウ	イ	ア
モ	モ	モ	モ	モ
ヨ	エ	ユ	イ	ヤ
トル	トル	トル	トル	トル

此を當頃まで。世の韻學ひと云ふ徒ゝが彼文雄僧ゞ。磨光韻鏡などの據て。其説の拙きは。誠の然る事なれど。中の甚だしく難く思ふ事あり。そは篤師説を始めて讀くるとき。四十年前の昔あるが。今の重るまて。其説変る事なし。今其由を述るの就て。其狀は異れども。其理同く。心得易き此一図を制れり。師此図を。中輕重と標さまて。後三段。後さの此図の初二三は行くと同く。共に師説の如く。阿夜和は三行と成れり。其を中と書れし初段は。阿を以て阿行を乗るなれど。阿行の帰るなと勿論なして。輕重や標され多後二段は。伊字をの父と為りて。阿行の乗まと。夜和の二

喉音竪横圖

阿ゝア	阿伊イ	阿宇ウ	阿延エ	阿於オ
伊阿ヤ	伊ゝイ	伊宇ユ	伊延エ	伊於ヨ
宇阿ワ	宇伊ヰ	宇ゝウ	宇延エ	宇於ヲ
延阿ヤ	延伊イ	延宇ユ	延ゝエ	延於ヨ
於阿ア	於伊イ	於宇ウ	於延エ	於ゝオ

行ひ切る事も論ひあし。かくて師は図の第四段。予が図は第四行。共に延ふもて阿行ひ乗ふもば。實は延阿行と云ふ物ひして。眞は夜行ひ成ふ物ども延と伊せと甚近き聲ふれど。姑く夜行と云はむも。然も有べきもどど。師の図に。第五段の於阿もワ也と有る。於伊も井と有る。於宇もウ。於延もエと有る。於こもヲと有ふ也と有るは。於ひして和行ひ成る由ふもば。従ひ難し。此第五段と。予が図の第五行ひ當れり。其と和行は。阿行中の合喉音と合せ考ふべし。阿行を母とする故にて也。全き和行は合喉音也は成ふ也。開音は於ふ父也し。阿行を母と為て。和行ひ變る理は謂ひし。是を以て従ひ難しとは云ふ也。もし誠に思ふ人は。五十音図を披ひて。反切を試むべし。右の図説と夜和二行の未生以前。阿行のみある時ひ其於に同じ阿行の五色を合する由は説ふれど。同じ阿行中の反切ある故ひ父母共に此中ひ分て。其母と添て動く父。父ひ擬ふ声は行て。母音に故々ど。始は於阿行と云ふ物にて。終ひは阿行と成るよる外ふし。此と阿行ひ限る事は非ず。同行相重ふて反切と。皆同じ事ふり。其と本篇の同行。竪横相重ふ條々の例を見て知るべし。猶言はば。已に著せる右の図はも。初行と阿行。第二行は夜行。第三行は和行。第四行まも夜行。第五行は阿行ふるが。其初行の上に有る阿くより斜に。第五行の於くも小下ふも。阿行ひ反也。其第五行は上ふる於阿ふも。斜に初行の阿於に下ふも。阿行ひ反る也。毛し師説の如く。四段も夜行。五段も和行ひ反ふとそれで。初行は上より斜ひ下るは。阿伊宇延袁と有る。

第五行の上より斜に下るは。和伊宇延於と成りて。和行に
韋恵は伊延と成りて。於袁の所属も違ふ多し。思惟を深めて
改ふべし。先師の喉音三行分生図に。謬る事ども思ふに。此を
沙門文雄が磨光韻鏡に。内轉十一の図に開かれし様。誤り
て合り改めらるる事と。何りの為にか思ふに。此を
誤りを承て。阿行の於袁。合口音り取られし故り。かく誤ら
れしなり。然れど彼字音假字用格に依。喉音輕重等第図。字
音開合指掌図。字音假字三會図説も。其に因れる誤り少
ら。其由を佗説も有りて。神字日文傳授。此書の四巻に
も論へれば。此りを柳右に竪横図とも。予が新制には有る
其大略を云ふなり。
也。詳に自然に隨ふ本図にて。其中三行に依。夜和夜の
三行も。素られ阿行に出るが故り。若ひて約むれど。終り
共り阿行に帰るべき。初五に二行に同じ。然れども夜和二

行。已り立て永く廢れず。阿行の素より正喉音なるに對
て。夜行を半喉音と云ひ。和行を合喉音といふ。但し夜行を。伊を延とも
て。二行出来られず。其伊に成れる行のみを用ひ
多延り成れる行の廢れしこと。言まくも更なり。ただ夜行
は。阿行に伊を帯びて成れる故り。其聲強壮にして。中にも
イ。エ。を。阿行にイ。エに比べては。其重聲とも云へ難く。和行を
阿行に宇を帯びて成れる故り。其聲柔雅にして。中にもウ。
を阿行のウに比べては。其重聲とも云へ難し。然れど共り喉
音とは云へる也。阿行のイウエをは異にして單音なれど。
二行十音共り。實は謂ある拗音なり。此二行の拗喉音なる
に見えて。今を佗も普く知れるが故に。故是を以て。悉曇にも韻鏡りも。此二

行ゐあゝるイウエヤ。阿行のイウエヤは。其音元より別ゐ
ヲ。其ゑ音韻自然の道ゐれぞ那ヲ。然るゐ古事記書紀ゐ。其
假字の差別ゐ記ゑ。夜和二行ハイウエ共ゐ。同音ゑ重成れ
る聲ゐて。阿行ハイウエヤは。其差別いと微ゐる故ヲ。自然
ゐ紊ヲて。二典の御撰あヲし頃ゑ。既ヲ單音ゐ呼習へる故
ゐ那ヲし。古事記ハ假字ゐ。その差別ゐき事ゑ。記傳首卷。假
字ハ車といふ條ハイウエハ下を見れば。通じて
伊中延を用ふることゑ知らる。此外ゐ汗ゐ下ハ愛ゑ三ハ
用ひゐる耳ゐりゑ有ヲ。書紀ハ其歌どもの假字ハ檢ハる
ゐ。イは伊を七十九。以ゐ十二。異ゐ十八。易を二ハ用ひ。ウ毛
于を三十九。宇ハ十八。禹を三ハ汗を一ハ用ひ。エハ曳を二
十五。愛を二ハ延を一ハ用ひゐり。然れど是ま
ゐ。其差別ゐ立ふる。假字遣ひゐゑ非ざりりヲ。ハて二典ハ
始ゑ假字ゑ有ゐ差別無れど。古言ハ活用ハ推改ゐもば。自

然ゐ其差別あり。ヤは毋ハ於毛とも。息を於伎ヤも。宇受賣
を於受賣とも。得ゐ延とも。虛言を宇都波理とも。芋ハ伊毛
ヤも。何處を宇豆古ヤも。抱ゐ宇陀伎とも。嚴を宇都久志と
も云ハ。諦ゐ阿行ハイウエハ。魚ゐいを。阿邪麻志をあぞまし。感をうひうし。今ゐうま。
阿多期をわさき。兎芽子ゐわゝ子ハあぞ云ひ。後ゐがら。動を
おどおと云ふハど。阿行の假字ゐり。善ハ余とも。往ゐ以伎とも。奴を以都古
ヤも。忽を以流加世とも。夢を由米ヤも。壹伎ゐ由伎ヤも。
利ハ由麻波理とも云ハぞは。夜行ハイエ。兎ハ乎佐藝敬を
韋夜麻比。無禮を宇夜那志。禮儀を宇夜波比。現ゐ衰都ゝ。求
を宇計良。虛ハ衰曽と云ハぞ。和行のウハヲ。此等大ゝ語意ゐ出さ

もてる訛等あるが。彼字斯いまゞ於袁の所属に違へる事
わ。心著れざるし故り。謬られしる事も有ども。引直して著
せるあり。子細に求究ぶに。猶有ること多ども。今
こ頃り。心わ浮める言のゝを出せる故り。内て三行の活用
かゝ判然と別ること。其假字に異らげる傍き由無れど。神
字にみ用ひし世に古書わは。決く其假字に差別有りむと。
漢字ゆ假字わ用ひし後よりも。漸次わ混錯て來ふりむ。其は
古事記にて其差別ゆく。書紀に。帝王本紀に多有古字。撰集
之人。屢經遷易。後人以意刊改。傳寫既多。遂致舛雜と有るこ。
神世字を。漢字わ改ある事。と聞わ。此文に意委くは古史微開題
記。まゝ日文傳に云ふて。然て古事記よりも古き書ハ。上宮
法王帝説あり。是まゝ六音混合して。其差別あること無し。
抑天地自然に音聲の。五十ゆる事は。必然る理に。惟神に道

理わ有ゆ故り。赤縣印度の末國より。其音韻具ハて有る
を。神の本國しる大御國わ。其音に元より缺ると云ふらと。
絶て有ること事わ非ず。此こ人世と形て。古字を漢字わ
易ふる時こそ。彼邦に字音の朦朧しるよて。阿夜和三行
に音ゆ混錯して遂わ三音ゆ失ひ物とぞ所思める。
思ひ合さ例ゝ事こ。今こ漢字音を詳わして。但く用ひ来
れる三行の假字とも。を撿ふ例り。二典万葉その餘に書等
わも。彼邦わて は。阿行わ属ゆるイウエをもて。我が夜和二
行のイウエよも用ひ。彼邦の夜行和行ゆるイウエを。我が
阿行にイウエわ用ひしる類ひに混雜。今
一こり勝るわ違あらゆるを以て知ること。然れど此こ。今こ
何わ思ふとも。古わ復こを置き便ふに事形て。然こ有れ。三行
に眞假字。各こそに字の異らでは。語譯わ意を竭し難き事

ども有れど。上の訂正図り。三行の假字を別ふして。已う文
ふは。其假字を用ひ〻ふ所ふあり 但し五十音は假字ども。多く
ゞ中ふ。夜行は出せる以乎曳を。如しこれども此行の字ふり。
ふ〻和行のもも。即彼方は此行ふ於ける字ふれど用ひ於。
然れども片假字草假字ふ於てを。今殊更り異字を作り出
むるをは。却りて不便ふる事も有れを。本の如くイエを通
して。阿夜二行ふ用ひウをも阿和二行
ふ通用せるふり。見む人その意を得て。ちて然イ。ウ。エは眞
假字を。別ふ用ふ所り就て。ふ〻此所ふ云べき事あり。然る
を阿行ふる伊字延と。夜和二行ふ出ふ以于曳をハ。自然り
して。親子は如き尊卑ふ似〻る差別あり。其は阿行の五聲
は。元より音韵の祖ふれど。其生出ある十行五段。四十五聲
は韻り含ふり。幽ふり祐りて其用を成しめ。顕りハ語の上

ふ在れども。假ふも下ふ在りて中無く。ふ〻辭の使令ふ預る
事多く。殊ふ阿於の二聲ハ。此行を竪ふ著せど上下ふ位し。
横ふ著せで左右ふ在りて。父母は位の如くふる故り。其間ふ
ふ伊字延。ふ〻下ふ動くふと無く。然る活用波ど。悉く夜和
二行の以于曳は。稚く壯ふるふ委任さる趣ふど有り。ふ。
但し此も語意考ふ。阿を於を言は下ふいふ事ふし。中下ふ
いと云ふ言は。みふ夜行はいりて。阿行のいふ非ばとて。下
のもふ以もふふどの。動きばまを説れさるふ本於きて。今殊
く考へ加さる説ふるど。其謂ある中下は活用。多くいの一下
音はみり非ず。以于曳の三音共ふ。動くふ中下次は如し。今を活機を少く云ひふ。萠燃
は毛曳。もふ。毛夜志を動く。悔の久以。くふ。久夜美と動き。老
の於以。和ふを動く。葵は那曳ふふと動く。愈の伊曳いふ。伊

夜須ヤスと動くれば。夜行あるゝ。植飢あゞれ宇恵ウエ。宇ヰ。宇和流レと動く。居れ須恵エ。ひう。須和流レと活用く類と和行みて阿行れ伊ウエ宇延エはは。かゝ活機あ活事ぬし。然れど夜和れ二行と。阿行の長子次子みして。父母の勞苦代て。事を執るみ我と似さりり活。此類ある詞とも猶多く活ず。其そみる下の動き字れ。同行の通ひあるを以て知る事あり。れい。ぬ也れど活くと。詞れ八衢み謂ゆる。中二段の活用と云ものふり。ふえ。ふゆれど活くを用令みて。八衢ゑ謂ゆる。下二段の活用といふ物あり。活くと云ふ。活くも。下二段れ活用ぬて。委くは彼八衢を見て知べし。

○五十音義解上第六

五十音毎行五聲ぬ成れる先後。活くと其一ト聲一ト聲れ義は。我が宇斯とひる宇ウシ斯等の。往くみ其端ぬて。示し置きてと有き

と。其全ぬ説と。殊み書著ハし賜へる書ぬし。故今は。已が年活ふく按ひ畜さもし趣を。例れ心利の活くみ云ひ述て。其當否れ定免で。世人れ評ゑ拘はる事み。先師等の。幽れ質し彼受むと欲る故り。実や五十音ぬ義解と。如此もやと思ひ設くりと。指をりて数ふ。まで。早く四十年餘り昔享和ぬ云ひ。今の天保十年己亥歳活年頃みて。尾張人鈴木朗が。江戸み在りし。わど。互り語り相さるが始ふり。後み朗が雅言音壱考とて。少し書さる物も有り。其より後り見しは。加茂宇斯の教子ぬ聞えし。信濃人光枝と云ふる。國辞解とも雑ぬも云ふ物あり。是ら。ゑ少り見故。書き説も無ふみ非。今し世み語譯家。言霊家れど称ふ未輩らの。何くれと云ふ説等の。往く耳み入る事も有れど。音義れ起りを釈得さ活説と。一ツぬ聞えゑ。ひて此大御國の詞み。古恵ぬいふみ。音聲れ二字を通用し。古登と云ひ古登婆と云ふり。言語詞辭みどの字等ぬ通用

し來れれど。赤縣九字書等わは。其差別ある事ふり。世々久
ろく然る通用の上と。今しも其議わ及ばむと。益ゆき事ゆ
如ふまど。此義一通ア心得居らでは。事よくりて。不具わ所
思ふ事も有れど。此り少う其差別ゑも記してむ。甚回らり此等の文
字相通じ用ひある樣と。古事記序わ先代旧辞・勅語旧辞ゑ
ど有るは更ふり。上ちゑ之時。言意並札數文揖句於字即難已
因訓述者詞不逮心全以音連者事趣更長是以今或一句之
中交用音訓或一事之内全以訓録即辞理已見以注明意と
有る。訓詞語辞ふど。皆差別ふく用ひられ。以音と有るも。実と
以聲と有べき文ゆるを思ふ。此よも後れ書ゑ用ふる
樣もみゑ。其ゑ内ゆ聲とは。説文耳部わ。聲音也。从耳殼聲。
のゑとし。
殼籀文聲と見えて。徐鍇ゑ通論わ。万物之音爲聲。八音中惟
石聲精詣入於耳。故於文耳殼爲聲。殼古聲字也と云ひ。字彙
わ有

氣斯有色。故云色氣成文爲音。故云色音。揚子云言心色也。
ゑ以相通。詳音字。音は同書音部わ。音聲生於心有節於外謂之
注とも云へり。音宮商角徵羽聲也。絲竹金石匏土革木音也。从言含一。段注云。有
節之意也。凡音之屬。皆从音とあり。禮記の樂記わ。知聲而不知音
者。禽獸是也と云ひ。此語ゑ史記の樂書ゑも見ゆ。韵會わ。
云。審色以知音。審音以知樂。則色音樂三者不同矣と
也。月令疏
五音一云以和爲主。五者成於一也。
也。音と聲と共ゆ色を本とし。音況末と爲ゑる説等ゑ。韻と韵
會わ。説文韻和也。从音員聲。古與均同。未知其審。單出爲聲。成
文爲音。音員爲韻と見ゆ。先師等共わ。此字を比毘伎と訓れ
ゑり。此を五十音れ上ゆて云ひ。唯ゑ阿加佐多那波麻夜
和良と呼と紀と。謂ゆる單出りて色ゑり。彼香早田各
端間箭輪等ゑ。ゆゑの義ゑり云ひ。
音ゑり。下四段れ色音も。是ゑ准ゑ。然て加行以下の色

を長く蛇呼引ぐ。各〻自然りを為て其末を隱くと、阿伊宇延於の五音を含めり。是即韻と云ふものなり。けて言は。說文言部に。妄直言曰言。論難曰語。从口辛聲。凡言之屬皆从言と見え。徐鍇が通論に。出於口爲言。君子能言滿天下。無口過也。故於文口辛爲言。辛愆也。言出禍入。直言曰言。無委曲故深戒之也とあり。韻會に。本作宕。今文作言。徐曰。凡直言者。無所指引借譬也。周礼大司樂注発端曰言。答述曰語。礼雜記。三年之喪言而不語。注言言已事也。爲人說爲語。論語曰。詩三百一言以蔽之。曰思無邪。左傳趙簡子稱。子大叔遺我以九言。皆以一句爲一言也。国策齊人有請者曰。臣請三言而已矣。益一言。漢書東方朔云。十六学子書誦二十万言。皆以一字爲一語。言也とも見えたり。注に。語者御也。如毛說一人辯論是非謂之語。如鄭說與人相答問辯難謂之語と云へり。汎く通論に。論難曰語。語者午也。言交午也。故於文訓吾爲語。易曰亂之作也。則言語以爲階。階者漸也。起於言。漸至於語也と云ひ。韻會に。增韻以言告人也。魯語何以語子。注教誡也とも見えたり。

詞は說文司部に。詞意內而言外也。从司言と見え。通論に詞者音內而言外。在音之內在言之外也。何以言之。惟也。思也曰也。兮也。斯也。若此之類皆詞也。語之助也。詩曰。惟此文王。又曰。在城闕兮。又曰。神之格思。不可度思。矧可數思。書曰。雨曰霽。詩曰。今我來斯。皆詞也。聲成文曰音。此詞。直音內之助聲。不出於音。故曰音之內。聲成文之內。一助聲也。言之外者。直言曰言。惟思曰兮。斯之類皆在句之外爲助。故曰言之外。楚詞曰。魂兮歸來些。亦詞也。在句之外也。故於文司言爲詞司者主事於外也。とあり。韻會に。集韻古作詞。或書作司。通作辭。周礼大祝作六辭以通上下親疏遠近。又見辭字注。とも云へり。辭と說文辛部に。辭說也。从辛。禽辛。猶理

辜也。段注ハ。今本說譌誤。廣韵七之所引不誤。言部曰說者釋也。と見ゆ。然るハ此字同部ハ辭不受也。从受辛。受辛。宜辭之也ゝ有ハ字と。互ニ混用し來れるハ誤ヲリ。其說段注ハ委く見えゆ。ハ〻韵會ハも。今人以辭爲辭受之辭。以辭爲文辭。楊脩傳。絶妙好辭是也。循用既久。今不燒と云ひ。ハ〻辭通作辭。集韵籀作辭。俗辭亂从舌作辭。其蕪類有。如此者。と云へるをも思ふべし。ハて言語と。聲音ゆゑ起ハ。ゆゑ素ハて。其五十聯の聲音ハ。各〻自然の意ハり。象あり形ハ。其ハ人の世ハ經る。事ハざ繁況物ハ。れど。見ハ物聞く物ヲ。ゆゑて。情それ中ハ動きて。其聲種〻ハ發る。然るハ物有れと必ず象ハ。象有れど必ず目ハ映ハ。目ハ映れど必ず情ハ思ふ。情ハ思ふ。必ず聲ハ出ず。其

聲や必ず其見ハ物の形象ハ因りて。其形象ハ聲ハ。此ゆゑ音象と謂ふ。其音象ハ大要を云ハむヲ。見れと。牙喉の加良理や。ゆゑ。良理と。ゆゑ。良理と。ゆゑる物を見れど。齒舌の佐良理や聞ハ。ゆゑ。良理と。ゆゑる物を見れど。佐良理や聞ハ。ゆゑ。良理と。ゆゑる物を見れど。舌上の多良理と。ゆゑ。良理と。ゆゑる物を見れど。舌面ハ奴良理や聞ハ。ゆゑ。良理と。ゆゑる物を見れど。唇輕の比良理と。ゆゑ。良理と。ゆゑる物を見れど。牟良理と。ゆゑ。良理と。ゆゑる物を見れど。唇重の牟良理と。ゆゑ。良理と。ゆゑる物を見れど。此等を以て。其大旨ハ。抑音象ハ。ゆゑ。況辭ハ知べし。抑音象ハ。ゆゑ。自然の定まり有りて。言と成るハ。其言必ず。其見る物ゆゑ指象ゆゑて。嗟嘆せるハ形ゆゑ。其やゆゑて其情の。中ハ動くハ因ハ。ゆゑと上ハ如し。も詩国風関雎序ハ。詩者志之所之也。在心爲志。發言爲詩。情動於中。而形於言。言之不足故嗟嘆之。嗟歎之不足故永歌之。永歌之不足不知手之舞之。足

之蹈之也。情發於音。音成文謂之音と云ることも有るは、即是意ばなり。情とは、礼記の礼運に、何謂人情、喜怒哀懼愛悪欲七者、弗学而能と有り。情実と熟して、麻古登と云なり。故て訓に叶ひ、且字良とも古ゝ呂とも訓べき字なり。故て許有りて後に語あり。語有りて後に詞あり。詞ありて後に辞あり。是をもれぞち聲音言語詞辞の次第なり。然るに其言語詞辞なる意を盡さず。是ヲ於て譬諭あり。形容の言なり。如此して言語の道始めて調へり。其譬諭とは、即神典の古傳に、状如葦牙。すること、譬へ猶浮膏。すること、猶海上浮雲。すること、久羅下那洲多陀用幣流之時、など有る類ひを云ひ。形容の言とは、許袁呂許袁呂迩畫鳴すること、玉ノ緒母由良迩、取由良迦志すること、河舟之毛曾呂毛曾呂迩すること、可ゝ齧然ニ咀嚼など の類を云ふ。大祓詞ヲ、可ゝ呑氐武と有る可ゝいも、即形容言なり。其を加茂翁の祝詞考に、可ゝ呑むとは、水を呑む音の可ゝにて、水を呑む音を可ゝと云ふ。可ゝ物の音に加ゝ布ゝと鳴る物を香むと云ひ、嗽など云ふ類ひ多きを思ふべし。可ゝと云ふは、物の鳴る音にて、雅俗なしと云るを、俗言と思ふ人も有べりまじ。師の後

秋も此説ヲ從られざり。彼音聲考に、凡て下をトもじにて承て、漢語に、何然何乎と云る、あぐひの詞は、大ゟさ音声ヲて形容しなる詞なり。倫ゝ下におく辞の、シ・ケシ・ヤカ・ラカ・メクの類の上の詞も亦同じく、皆ゝ音声に因れる言ゟと云に、多くは然も非ずて、音声に因て言語の出来たるよし、言語ヲは、餘所ゟら言語の意あるを、やがて其言語の義を以て物事を譬へ象ど為事なり。音声の意は、本にして事せず、言語の意は、末にして事廣く、譬へば、伎へ良ゆ志、須で志などゝ云ふ、音声の意にく象りさるを、道て志、物て志、などは言語の意にて繋りさる故、此二ッの別ある事を知るべし、と云へるも然る言なり。彼れ作て其始兆。一物一事ヲ指象どもて起れ其書を見るべし。

為言の譬諭までに及ぶる趣を按ふヲ。赤縣文字の用法に、六書といふ事ある為が中の、形聲、會意と謂ふは、略相類さる趣にて、末於ひぬ。或は數語ヲ轉用し、或は他に假借しおく。千言万語ヲ活機く事は、為る彼六書の、指事、象形、轉注、假借

〇

や謂ふて相似て。れわ種くれ義を爲るゝ。其謂ある六書と。
ゲ自敘ワ。一ニ曰ク指事。二ニ曰ク象形。三ニ曰ク形声。四ニ曰ク會意。五ニ曰ク轉注。
六ニ曰ク假借とある是ワ。今世ヨある説文の諸本ワ。指事者
云ゝ。象形者云ゝ。形声者云ゝ。會意者云ゝ。轉注者云ゝ。假借
者云ゝや云る文あ除と。後人の注文れ羼入ワて。中ワも轉
注の説れ謬ワ除こと。將谷望之ガ。後魏書ル江式ノ傳ヨ。此序
文を引ゝるワ。右の注文やもれ無きワ徵して。委ゝく論へ
る轉注説といふ物あ其は本編の詣章ヲ。次ゝワ釋行く隨
ヌ。其説を用ふ。
ワ。いや著記事ワは有れど。此ヲ少ゝ其一例を述むワ。阿行
篇れ第一章ある阿加え。天ツ日れ。大空ヲ懸ル。赫やく象を指
して。阿良や。阿良や。嗟歎せし詞れ。阿加と約りて。
彼日れ義を為し。ゥ故其色の名ワ定除る。其赤ル象ヨる形
容して。阿理と云除ガ。明字れ義ある ル始免。其言形ワ種

種ワ活機ヲ見。是謂ある指事象形の趣ある。其ゝ彼注文ヲ。
識察而見意。二ニ是也。象形者畫成其物隨體詰詘。日月是也
と云る如く。二ニは上下れ古文ある。詰詘ゝ屈曲と云ふ
如し。文意ゝ文字ワ指事と云ゝ其事あるて物ワ記言の類
ゝ直ワ其事れ象を形ヨ寫して。視る除ワ其事や知る。
其象を察して。製字の意ヲも見る。上下れ字の類是ある。
象形と云は。形ある物をゞ。其體の隨ヲ屈曲して。其物を畫
成せる文字ある。日月れ類是ある。各その一例を示せる
ある。本書ワ。二高也。上篆文上。二底也。下篆文下や有て指事
と称し。日月れ字の下ワ。⊖實也と有て。其實せる象ヲ形ゝ
し。⊃闕也と有て。其闕ゝる象を形せるワて知べし。我ガ
古言ゝ。其言の上ワ。指事象形の分ち。神れうらゝ備はる。赤
縣の古文ゝ。其字れ上ヲ。指事象形れ分を。各ゝワ別ゝり。然
るワ彼此ゝれ趣きの相似ゝる事ゝ。其文字の原ゝある。我ガ
大神れ傳ヲ給ひしワ因る事ある。其由は赤縣太古傳。太昊
古易傳ある論ヲ
るを察て知べし。
ちて其轉注假借ワ。相似ゝ除由は。上件
れ阿加良。阿加ゝらり起ヲて。彼日。赤れ義と成れる詞の。明

此義ヲ轉ハるは更ニ多し。明まゝ阿伎阿久阿祁と機なて。厭飽閑を始め。あゝ種これ轉用あるが上ニ。ゆゝ反語の例あり。其こ阿加は。明く潔なを云言ある歟。人體の垢をも稱ふは。葦垢余志とも謂ふも同じ類の反語なり。此等れ類こ。假借れ例ヲ取らむも違ふ事ニし。彼注ヨ轉注者。建類一首。同意相受。考老是也。假借者。本無其字。依事令長是也と有れば。此二説共ニ誤あり。其こ彼轉注説ニ。六書とは事を指示しるる。上下の類こ指事ヲ。物形を象りしる。日月れ類こ象形ヲ。此二ッを文と云ふ。まゝ其物の文ヲ从ひて。名ヲ呼ぶ毫の文を添へる。江河の類こ形毫ヲ。二文を合せて義を為しる。武信の類こ會意あり。此二ッを字と云ふ。此文と字と歟使用ふるヲ。其本義を用ふる者ヲ。義を轉じて用ふる者あり。毫を借用ふる者ヲ。本義こ説文ヲ秋せる義是なり。義の轉ばる者こ。譬へば令は発号也と有ばぞ本義ニて。法令れ字ヲ。法令を出して。民を法令の如くれら令ヲより轉じて。使令を歟

總て令と云ひ。法令こ吏長の民ヲ命ばる故ニ。轉じて其命ぞ歟吏を令ヤいふ。縣令ヲど是ヲ。ゆゝ長こ久遠也とあるが本義ヲて。遠長の字れ多ヲ。物の長短の字ヤ形しゆゝ轉じて長幼れ字と形し。ゆゝ凡人ニ勝れる人を長者ヤ云ひ。まゝ轉じて主領こる者を長といふ。此れ如ク類を轉注と云ふ。ゆゝ毫を借用ふゆ者こ。其字ふきヲて。其物の名と同音れる文字歟。何の文字ヲも有れ。借用ふる歟假借ヤいふ。譬へば之は出也と訓じて。艸の地より出ゆあり。蜀は鳥名ヲり。也こ女金れるを音の同じきれば。皆借用て語辞とひる類れ。皇国ヲて。西土れ文字れ音を借りて。皇国語を書くを假字と云ふ。全ク叔如く彼此合せて考ふゆ是ヲ同じヤ云ふ。ゆりて知ル應し。言語れ本は。情その中ヲ動ク。聲ヲ形これ。其聲ヲ音と意と形あて。調ヲゆこヤ最彰りし。故今ヤの五十聯の聲れ義を釋くヲ。其毎行五聲の起れる。先後を明さでは。本章の語解ヨ。其意を盡し難き事ども有ばバ。先其事れ原ふて

攷ふ所なり。既に云へる如く。五母韻の定はるに。彼合口宇聲より起り始まば。其子なる加行以下の諸聲も。第三段久須都奴布牟由于流より起きたること。準へて知るべし。然れど宇は牟由于流を生ぜしかど。俗の悉曇家と更ふり。契沖説りも。阿毫を其趣なる云るは非なり。かくて其十行の中に。良行と。其聲假に本言に上りて在りて無く。良む。如らし。所なる類なる形容言。はく語辭なれみ使れて。雅語にも俗語にも。下の活機を爲る事は。比類なる物なり。悉曇を謂なる。卷舌と聞なる聲等なれど。阿行と終始反對して。上九行の尾を都べき。自然の勢なるなり。既に論ずるなり如し。阿行五毫の諸行に注ずる趣

は。上に云るを。此にも來て。其必かく有るべき事の由を辨ふべく。良行の上九行なる都て。其尾を司る趣と。次に歌く行行に毎初に挙る。二十五言ども。既に見ても知るべし。かくて如此十行横列の次第と。聲音に自然に從ひ定免て。阿行良行に尊卑終始なる所なり。神典に古傳に按ひ合はるに。是まで天と泉との象に敬へり。其天日に御國まで成りて。次に泉都國定まり。然して後に。天と泉との憑相に。宇都志國の事竟さる趣なり。然れど音韻言語の道もまた如く。阿良に二行まで齊いて。中八行の音義に漸く不全く調ひ竟らむてと。推て知るべし。然るに今も。赤子に初も。更ふり。童子と成りても。アイウエオ稱く。ワヰウエヲと云ひ。ラリルレロを稱く。ヤイユエヨと云ふ間に。音韻の道に未成ざる故に。殿訓の云ふ免る。阿良二行の毫に。諦に云はるに時に至りて。始免て其

言語の調ふを以て。今此五十聯音れ義を釋くわ。
ても知るべきあり。故是を以て。
阿行は五聲唇舌頭ゐ彈む觸て。良行の五聲成れる後
わ。彼第三段ある。久須都奴布牟由于れ父聲五段ゐ響音分り
て。諸聲を生ずわ。良行そは形容を助りて。其音義を成せる
道理と思ひ決めゐ。其を次の毎行わ。説以行く況見て知ゐ
べし。但し五十音は義解とは云ふ。其一言の義を盈し釈
むやわは非ず。然るを喉音三行わを。各〻素より一音
れ言ふるゞ有れども。餘れ三十五壱ハ一音れ言と思はる
るも。実わを省語ま〻切語ゐるゞ多ゐ故。其を加壱わて云へ
むわ。引況云は使良の切り。乎をゐむを伊加の省ゐ故。所を
云て阿加於加の省ゐ。香を訓むは加保れ省ゐり。鹿をい
ふは。加具の省ゐる類ひ多ゐ也。都て二言わ於りて。其因
因ゐ論ふ〻〻便宜ゐ也。下わは喉音三行れ一言のを。
大抵ゐ精く解きて。餘りの七行三十五壱をは。唯其初義
を述て。其行〻れ心得居べき事のみを論へるゐ。

阿阿良 阿一伊伊理 伊一宇宇流 宇一延延礼 延一於於呂 於一

是行の五聲を。日文傳ゐ云へゐ如く。彼喉音れ元ゐる宇聲。其
父聲と爲ゐ。五母韻し相偶して齊へゐ聲等ゐゐゞ。其音象
を按ふ。阿を阿良理や〻〻ゐる聲。伊を伊理〻や〻〻ゐ聲。
宇は宇流理と〻ゐる聲。延を延礼理と〻ゐる聲。於は於呂
理や〻〻ゐ聲ゐて。共ゐ如く良行の五聲。其の形象を助り
て。先其合口言ゐる。宇流てゐ言れ出來しゐゐ。其音義を
成〻りゐる。其を此五壱の。訳語ゐ機〻〻。彼五母韻を。其終
ゐ用ふるゐ非ず。かく良行と相偶せるゞ因りて。
其音義を成せるを用ひしゐ。是を以て自然ゐ是等の音
象あり。然て本壱の下ゐ。阿良伊理ゐゞ注せるは。其本義を
る言ゐ〻〻。阿一。伊一ゐゞ註せるを。下ゐ引出ゐ。語書ゐ見え
ゐゐ引壱ゐり。其一は今し人も用ふる引壱の印ゐり。阿行

此壱の動かる言ゑ。我が古言ゐ素より無れど。加行以下の加い佐い那ど。正しく二音ゑ疊ぬる言しは。元より異ゐ。思ひ錨ゐ。其由何を以て知られど。阿行篇の初章ゐる二十五言なり。神典ゑ古傳。及び諸書那る古語ゐ。徴し攷ゑて是を。知ゑ。其二十五言の譜かくの如し。此章譜ゑ。第三段宇流ゐ。ゐ。其最中ゐ位ゑ定めて。其合壱ゑ竪横十字形ゑ貫通しゐ於阿良ゑ斜ゐ於呂ゑ降るも。阿呂ゑ於良ゑ降るも。共ゑ阿行の並びゐるゐ意を潜めて。此行素ゑり。三段宇壱ゑ起れる所以を。先思ふ。遍く。諸行の然る所以をも。惟ふし。抑是二十五言は。宇流ゑ起ゑ潤の義ゐして。宇良。宇理。

阿良	伊良	宇良	延良	於良
阿理	伊理	宇理	延理	於理
阿流	伊流	宇流	延流	於流
阿禮	伊禮	宇禮	延禮	於禮
阿呂	伊呂	宇呂	延呂	於呂

宇流。宇禮。宇呂ゑ活り。ゐ。宇良は阿ゑ約ゑて初段ゑ居ゑ。宇理ゑ伊ゑ約ゑて二段ゑ居ゑ。宇流ゑ宇ゑ締りて。素ゑ。ゐ三段ゐ居ゑ。宇禮は延ゑ約りて四段ゐ居ゑ。宇呂は於ゑと約ゑて五段ゐ居る。是を以て此行五聲ゑ初義ゑ。潤字の義ゑり起れゑ。但し其段位ゑ。五母韻の次第ゐ因循ふゑ。既ゐ論へ。ゐ。ゐ如し。潤字は。説文水部ゐ。水日潤下。从水閏壱ゑ。音閏。溼潤也。又沢也。滋也。と見え。廣韻ゑ。潤沢。又益也。と云ひ。字彙ゑは是。行の起れる初。ゑ。ゑ云ゑ。浸潤ゐふ意ゐり。蓋ゐゑ。其ゑ下ゐ謂ふを見る。ゑし。ゐて如此を。ゐて潤字ゑ義ゑゑ起れる。阿伊宇延於ゐ。ゐ。ゐ各ゑ良行の五聲相副しゐば。阿ゑ初段現ゑ有ゑ活用ゑ成ゑ。伊ゑ二段苛入ゑ活機ゑり。宇は素の如

く。潤ゆゝ裡の活用を爲し。延て四段得れ活機し成り。於て五段御織れ活機せ成る。されば此行の第二義なり。然るに此義阿良の二行に分れゝり。如此云ふ由て。ゆゝ阿行の阿と入の義あり。宇と云ふは潤の義なり。御と云ふは御れ義あり。ゆゝと良行れ五音に有入ふどの意なるて。乃是義の分なし故なり。其かくて是行五聲れ。然て良行の陪なり。謂ふを見る除し。起れ由來。神典に穡ふ所に。天地未無なし往古より。天高市比天眞區に。其始元無く御座して。造化の初發を成坐せる。天皇祖三柱神の産霊に質りて。大空に湧び。一物の生出る所に起る。其は神代紀一書に。天地初判一物在於虛中。狀貌難言と有所乃是にて。此を竟に天地中分なし物れ初發なり。高天市比天眞區とは。天皇祖神たちの。神留坐に本域にして。我等が居地なり。振放見て。紫微宮と称を下の那行の所に。因あるて其文旨深云へるを。然所に狀貌難言と有所て。其新くや現る出る象の。妙に奇なく。一に名狀し難く。故に白地に言ふは難らる。会易構合れ貌なし故に。傳るにて。然る言ひ難は是一物の。天地と分所狀を。次に詔ひ出る所ぞ。阿行を始る。五十聯音れ起原なる。其一は各狀し難は大要を云ひむに。会易構合の象と素質れ貌なるが。其質と。火水土相清れる物中に。溟浮と云て。或は明く。或は闇く。其澄へる越とも。潤く。旋く。疑く。聯く。滑く。奮く。聚く。動く。翻く。とゝてぞ在り所。狀貌難言と。ある古傳の意。これに。其は此一物の。虛中に宇く流て中に潤る。思ひ辨ふ。現は出る所様を。御目前に見行せる。其皇祖神等れ御

情り然る物在りと所思有せる隨り。其の象を大御言わ。詔ひ形はし給ふ故ゞ初發わて。陽ゞ此五聲は元基とは成れり。凡て神典ある世の初免の古傳に。當昔直り其有狀を見聞し知ませる趣をし。其傳ふし物あれど。其意をもて見びて有るうらゞ。其を天地の初判に。一物虛中わ生りて云ふと云ふ。詔ひ。當昔ち現れる狀を。直わ御覽せる神ゞらでは。謬り傳ふべき由ある事ゞは。彼三柱の皇祖神等ゞ及で。誰ゞ有らむ。其は此阿行のみわ非ず。加行以下の諸行に。殊り其吉いち著く。竪横に次第すでも。神典に古傳わ。幽契を陽て。実り奇霊ありとも。微妙ありとも。詞語り盈し難き趣ゞあれど。然るは。其大御言詔ませる初ゞ。初ゞ小緑ゞに事わて非ず。し。然るは。其大御言詔ませる初ゞ。初ゞ。初ゞ阿聲の定ま陽り。上件ゞ宇流の合口言ゞ。宇良。宇理。宇流。宇礼。宇呂。宇良。宇良に。良聲に副れる故り。開口音に阿わ約り。彼物を指して。阿に良に。阿に良に。詔ひ陽ゞ。竟わ阿良。

阿理。阿流。阿礼。阿呂と活く言と成る。阿良は現陽に在わて。彼物の現はに在る。今更に如く驚に所思して。詔ひ出る御言ゞ。一物在於虛中。陽。在宇神もて悟べし。其に此古傳のもと。是大神等ゞ次に。語に經來し傳れ陽て。上り論に如ゞ。阿に礼に。阿に良に。も云ふ。神世ゞを人り指教へて。阿に礼に。阿に良に。も今も同じ趣わて。此阿に良に。ゞ現在わ非ず。然て其一物に。此皇祖神に。生出給ひし物あるわ。其ゞ見行して。今更のごと驚む所思せと謂ふを。訓に難む人を有ゞむ。其は敬て。為ゞ。産霊の御德に。無して。為ゞ。産霊の御德わ。質りて。此物の成出に。に不測ゞる所わし有に。其御德わ質りて。此物の成出に。に不測ゞる所わし。御自わて所知者ゞに。道理すでを。慨ふべし。阿那かしに。ゞて其阿に良に。の阿に。此言に主音ゞあるに。動に無く。良は既り論へる如く。形容わ副に。活用聲ある故り。疾く去て其韻のみ殘に。阿ーに締

れるゞ。阿良とを成りて。然て何事ゐ侮き。情は深く感け思ふ故ある時ゟ。阿良やも阿良やも打出る謂ゆる嘆聲と為き。師云。奈宜幾え長息と云ふ。奈宜久は長息をると云ふ事あり。万葉集ゟ。長氣所念鴨形と云ふ。奈宜久は。長大息ゟ。詠ることゟ。漢文ゟも。長大息ゟ。知らず。どを云ふ。凡て情の感ぞる事ゟえ。意しきをも。怜ゟも。樂しれゟも皆いふ言形り。然るゟ後ゟは。憂しく悲き事ゟの。みゟ云ふを。深く感ぞる情の一ッを云ふり。字書ゟ。歎吟也と云ふを。大息也やを注し。常ゟ歎息と云ふ。此放れ奈宜久ゟ。ちく合ゟり。阿良と称嘆と云ふを。歎美やも連ゞ云て。此字れ義も。悲ゟ事ゟゟ限らゟ。けて此阿良は。古事記神武天皇段ゟ。已ゟ兄宇迦志ゟ。伐取ゟ所れ。大御歌の末ゟ。疊音引志夜阿良音引志夜胡志夜。此者嘲咲者也。ゟ有る阿良是ゟり。此ゟ書紀

ゟれ。皇軍士ゟ歌と云て。阿良時夜塢伊莽儀而毛とあり。然るに。本注ゟ。音引と有ゟえ。加行以下ゟ聲ゟ。加い佐ゟ。ゟ佐ゟ類ゟ。正ゟ二聲ゟ。疊紙云ふ詞とハ別ゟて。阿ゟ單ゟ長く引さる。音ゟる由ゟ注されゟり。記傳ゟ。私記ゟ。阿ゟ咲ゟ邑也と注せり。誠ゟ今此者嘲咲也ゟ見え。書紀ゟ。阿ゟ咲ゟ邑也。阿ゟ云ふと有るに。下文ゟ有るゟ據られし説ゟれ嘆邑ゟる由ゟを云ざる事委ゟら。此時の御歌ゟ全く。虧等ゟ愚ゟ拙き由を。嘲咲ゟ。せる御詞ゟる故ゟり。文ゟ。此者嘲笑者也と云ふゟ。上ゟ御句ゟ。疊で志夜胡志夜と。ゟ。共ゟ。全同ゟ。今世ゟ。エ。ゟ。拙しれど云ふ。嘲ゟ嘆きと。じ詞ゟて方ゟ。そ通ゆを。然れで此を。赤縣籍どを。ゟ。嗚呼。於手。嗚厚。於戲ゟど有ゟ文字ゟ。舊く阿ゟゟ訓る乃是ゟり。其ゟ源語若菜上ゟ。耳も齢悒ゟりけをバ。阿ゟゟ傾ゟ居ゟりと云ふゟ。老人

の狀なり。今世なり。あゝ悲し。あゝ嬉しかど。常云ふ長息は詞と。相同なを按ひ合せて知るべし。河北景禎が助辭鵠は、今挙てお多皆下音なして、嘆は辭なり。漢字の類を、おゝ多く挙る嘆と善き事なも、悪き事字義は多く因ら為事なり。然れど元より吉凶善悪を別ち事なが、お答なれ共書なきりて分て除も有こと。前會は雜じらるが如し。共云ひ谷川は和訓乗あ。はけて此阿。遂は單所なも。種々は諸あり合せ考ふべし。

聲は阿なを調ひて。應聲とも成きり。其く禁祕御抄は恒例毎月次第條なを。女宦申。御手水糸らせ侯はむ。女房あといふ。女宦。御楊枝ニッ。双へ指御簾侍がは出し糸らせ侯はむと云。侍と女房はのと云ふ共あ侍是なり。此事を。日中行事なを。女宦。御手房あといふ。女宦御楊枝ニッを。水糸らせはむ。と二タ壱申は。女らせい。と二タ壱申は。女房あと云ふ共なり。みなを次は指して。侍がり出し糸諸越は字書どもは。

阿慢應は壱と。和漢符合の詞なり。然れど舊く共。單聲はを。嘆は聲は共し事く。神武天皇紀は。嗟乎と見え。万葉一巻は。嗚呼兒乃浦と書紀。新撰字鏡は。嗟は一字を阿や訓く。書紀は。雲異記は。噫は訓み。宇治拾遺五仏胤僧説法は條は。我こそ集て大衆。異口同音は。あ。兒。扇を開は使ひ。こゝは有る阿米伎も是なり。あ。兒。阿。あと。噫。あきは。其は侍を云ふ詞なて。太平記。三井寺合戰の條は。衆徒ら本尊彌勒仏の趣なは。太平記。三井寺合戰の條は。衆徒ら本尊彌勒仏の首はりを取て。藪は隱し置こる事を。狂歌せる詞書は文は。故も。なく。鋸は以て。我が能を切りし間。阿逸多と云ふを叶は。と。有る阿逸多く。弥勒の一ト名は。噫痛はいひ掛は。侍は。今は侍は。阿逸多と云ふ詞なり。はけて阿といひ。阿ーや。打出侍こや。見侍物も云ふ詞なり。聞く物はけて。其。情中は感は其を指し嘆くこと。發る

聲形る故ゆ。自然ゆ現在の義あり。亦れ指示ふ放より。遂ゆ彼字の義を成せり。本篇の阿良より。阿和ゆ至ふ九段の阿みの此義ゆ漏るゝ事形し。其て字書どもの対せる字ゆて。他を指し人ゆ此語譯家ふど。多く此義を知らず。徒ゆ謂ゆる発語とゆて心得ゆめるて。最も拙ゆ事ゆて。彼和訓栞ゆさ。あは。元そ音ゆ基ゆし根ざ所ゆれど。諸の発語ゆ。あれ響を含めりとて。梵語漢説何くゆと引出て。説を作れど。梵漢はらし。然も有らば有れ。皇国ゆ古言ゆ。然る無用形る発語ゆ阿吾て。一ゆ物ゆや。他し。其は是阿聲ゆ。上件の諸の語釈家の説等も准ず知ず。其は是阿聲ゆ。上件の諸の如く。良行の五聲相副ふ。阿良。阿理。阿流。阿禮。阿呂や活ゆて。新有荒彼主ゆどゆ祖言形る更ふり。此て現ふり起りて。有在ふどゆ阿理。阿流。阿礼。阿良卑と活く更ふり。新荒ゆ阿良と訓て。彼刮出彼阿礼とふみ。主を阿呂ゆと訓ゆも。在や同訓の活機

ゆ。他等ゆ謂ふ委く加行ゆ从ふ。彼日赤明飽開彼所佐行は本篇を見る。し。加行ゆ从ふ。彼日赤明飽開彼所佐行の從ふは。朝葦涸汙遊多行ゆ从ふて。當味厚充迹那行ゆ從ふ。孔兄主姉彼彼行の从ふは。淡遇相饗痴麻行ゆ從ふ。餘網編雨天夜行の从ふて。文肖歩和行ゆ從ふて。沫藍青是等ゆ阿みれ。彼の義形る。以て知る。但し此ゆて文ゆ繁かく四五言ゆ出せれど。ゆを厭ひて。一段ゆ出て言は數知らず多く。首ゆ阿もし。貶ゆ言ゆ限て。其流色の末ゆりは。別義の如く聞ゆるも。無ゆて非ゆど。其原ゆ滝りて攻ふ。彼ゆ義形ら。ゆて有ゆ事ゆし。其て本篇の曜ふりゆ釈くを。侯ゆ此ゆ挙て。ゆ諸言ゆ中ゆ主ゆ痴ふどゆ類ひ。必ゆ他ゆの訓る。ゆ言ゆど。攻ふる旨あり。て出せ。ゆ〻主遊ふゆ類ひ。三言ゆ語ゆ出せゆも。訓る人必ひ有る。然れと三言ゆ語の末ふる字ゆ。多く活用訓ふれど。実ゆて二言ゆ語ゆり。故ゆ三言ゆ語を。も懼ら。ゆ出せり。下ゆ件ゆをゆれゆ倣ふ。〇ゆて伊ゆ

音義の定まるを。上件は合口言なる宇流の。宇理や活り法
グ。理聲は副ひし故を。開口なて伊は純聲を調ふり。抑伊と。
彼中府なる宇は元氣舌上を竪み進み出法聲なて。素々ひ
自然ず氣の義なり。古語を氣を伊やのみ云法と。神代紀上。
氣噴は本注を。伊浮岐や有ひ。此を古事記ず。氣吹と書紀。大
祝詞を。氣吹戸主神と有法を。大同本記を。伊吹戸主やも有
なて知ぬし。此餘は氣息の字を伊とはり伝へる例。數ふるを
る也と云は非なり。伊岐と。釈家れなく此を。伊岐の岐を省り
伊久。伊祁。伊加牟と滑く言なて。却て未なる物なや。はて其
氣進発る方なり。法の應聲と為れり。其を赤縣籍の舊訓を。
唯字は。イーや。訓る是なり。此は早く和訓栞なも。唯字をい
くや訓るを。倭語の答辞なり。字

音は響なて非ず。曲礼を元生ず諾唯而起とも見え。
文選注ず唯こ謙應也や有ひと云へるは然る事なり。都て伊
を。氣進む義の聲なる故ず。一通なては。徒何とのみ發語は
如く聞ゆるを。深く其言霊味ふ也ば。悉く氣進め法意あり。
和訓栞を。いを発語の詞を多く云ず。爾雅を。伊維也。注を。
発語辞し見えなり。悉曇なても。伊字を。根本は義あり。神代
紀の歌を。以和多羅素。万葉集を。伊縁立之。射立せる。伊隠る
伊積法なるど法類ひ。挙て數ふ也ゆらなを云ずれど。縱発語
ずらむを。氣は義ず。梵漢
の発語の類ひを。は非法。其を此伊を。上件は譜の如
く。良行は五聲相副ひ。
苛入色なとも祖言なるは更なず。此を苛入は。入を。入法。入を。入法。入を起ずて。入ず。
色は乃同語なる由を。郎子郎女など。伊良入彦入姫など
は伊理。色妹。色兄を。伊呂。これ同し語なる由の師説を
て明なり。鑄造伊流と訓むも同言なるが。射熬などを訓む
く。夜行の以流なず。其を韻は成壯なりて。差別あるを

既に喉音三行は辨の所を述る如くみて。此行は伊を成す
る紙。夜行の以て壯なり。次に挙る諸言も。各〻此差別あ
り。夜行は諸言中。攷加行は從ふ也。何活幾池息佗行は從ふ
を合せて辨ふ也。率石急多行の從ふ也。至市德愛那行は從ふて。否寢波行
は從ふ也。岩家庵麻行の從ふて。今芊夜行は從ふ也。辭痊和
行は從ふは訛りし。此等は伊みが。氣は義なる故以て知る
べし。是等は言より。轉用假借し出る諸言は更なり。
他言はても。切はて伊壱と為れるて。自然に伊壱の義
を生せり。其を本篇に次く。○けて宇は既に云ふ如く。此行五聲
は元音なるべば。乃諸音は本祖なるが。其音に潤諾得の三義
あり。其を内宇流の二聲。素らと合口音にして。其音象を
惟ふに。彼一物は生出る始免。潤るを在る樣に想ひ合

されし。口内自然に津液を生じて。純潤あるを趣あり。是で此言
に。潤宇は熟く叶ふ所以は本なる。五十音五段の中に第三
る故に。口を離てハ。都て云ふを餘はざる壱等なる中ふも。
宇流の二音は。其首尾は在り。如く相結ぶ也バ殊に然り。
唇ふ。口舌の乾燥せる時はと也出ざる
壱形に。人し自から呼試みて知るべし。けて然合口して。津
液を畜ふるを。起る音なる故に。自然に。心に諾ひ。裡
に受得る義あり。是を以て用言は祖聲と成る。故承諾の
聲をハ為れり。其を應聲に宇と云ひ。得字は宇流と訓むは
更なり。万葉六巻に。諾已曾。十三に。諾名諾名。十六に。否も諾
も欲を御儘に。かど見えて。諾を宇に開て副るなり。靖蛉
日記の文に。人告に來ぬも。何事と覚え。て。止也
と見え源信明集に。今日のうちに否やも諾とも云ひ果て。

人名れめかる事ふせらきそ。やも見えこり。山崗、妙阿が名物考ふ点頭ふうふそくやと訓るもう歟と請がふ意ふり。俗ふ心得ふ所事ぞ。ぅんやと云ふを。此詞ぉりと云へるを然る言ぉり。本編阿行篇の第五章宇閑ぉ所ぅ云ふを候歟し。猶ぉ右ぉ宇ぉ云ぅ所。應聲蟲牟とも云ひむ。其ぇ宇治拾遺五。貫子名非ざ所人貫子ぅ曲ぉる條ぅ。思ひ計らひて。沙汰しやきやと云へど。むと答ぅて立ぉ。まこと已ぉ老立ぇ所者ぞかしやと云ぅば。むと云ぅれど有る是ふり。猶こ同書三ふ小式部内侍が歌ふ中納言定頼卿の通ぅる事れ條ぅ四こ五ッ壱はうり行もやらで讃ふりけ所時ふやと云て後ざ猶ふて臥ぉ卧ぉ歟ふりふれやら見ぇ原語。枕草子ぉど。ぉ。ぉぅ免ぉと云ぅ詞あるも共ぅ同じ宇ふれど。諸ぇ義ふぇ非ぉ。例の云ぇ。中ふ畜ふ所壱の出る也て。世言ふ。ぅんと加ぅを入れて。れど。云ふ中ぉて。呻吟れ義ふり。俗説ぅ。此等ぉぅ。絶ぉぅ同じやと云ひ。或て れ免ぉ紀ふれど皆叶はぉ。應聲ぉる宇牟とも云ふて。諸宇辨ふむ歟。

鰻宇那岐をむふぉ。馬宇麻ふむま。搭宇自那を牟自那といふ類ふて。此等ぉ言ふれて。陋言ふて有れと。諦し紀古語ふて。俗言ふぇ非ざ所れり。此陋言ぇ俗言と紀差別ぇ。既ぅ五十音活用の條ふ云ひ紀。下ふ陋言と云へる言とも皆ぉ。傚ふ歟しけて此宇聲ふ。上件ぉ譜の如く。良行れ五聲相副ぅ牙ハ。宇良宇理。宇流。宇禮宇呂ぇ活ふて。裡。潤。得。憂。空れど紀祖言ぉ当ハ更ふり。此ハ潤。裡ぇり起ぅて。得て。得る。得ふ得れぞれど云ぅ語ふ。得らむて活ト言ぉぇりむを得らむと活く語ふ。浦。末ふどれ類ひも有れと。其ぇ麗ぇり起ぇて。和行の宇ぉり。九て阿行の宇は咸壱ふる壱を。和行れ于ぇ稚壱ぉる壱ぇ。上ふも下ふも述るが如し。次ふ挙所諸言ふも。各こ此差別あり。和行の諸言ぇも。攷ふ合せて辨ふ歟し加行れ従ふて。伺受佐行れ人ふは。主多行の従ふて。歌。内愛。那行れ人しぇ海。畝波行の

従ふは。諸麻行は従ふを。美倦。頴埋。夜行は从ふは言れし。和行の従ふを。殖。飢。魚あり。此等は宇みれ。右は三義を出さゐ残以て知るし。かゝ是等の訳をも更かり。他言ふてを。切りて字色と為れるは。自然て宇色は義字生せり。其を〇ちて延は音義の定法本篇ふ次く釈く残見て知るし。

る不。上件は合口言れる宇流の。宇禮と活るが。禮聲は副ある故て開口して延は純聲不調ふり抑延を伊とは上下反對不ふて。甚近く通ふ聲あり。其を彼元氣。は舌上て進みて。伊聲残生じ然て古本不退ぬて。延聲と成るり。其進退は形象を。譬へ。ぞ伊を。喉外舌上て細く響れて。進む氣勢ぬる残。延を喉内不太く應て。強く受納て勢あり。此を師は漢字三音考れる。二色の図を見て。人く自加ら呼試みて知るし伊を呼ふを。下脣残ちし出る勢ぬる残延を呼ふを。下脣をひを入る趣ぬを。是ぞ二色進退の象ぬる。是残以て此聲自然て。佗ふも自ふも押令を意あり。故古説ふ。ふ残令言と謂ふ。其が中ふも。我て令れる意ぞ本れる。然れを得を。延流とを宇流を。云ひ来ぬるど。延を本ふて宇は却りて末れる。但し自ふ令れる言ぞ本れると云を。心得加ぬく思ふ人も有むり。此を譬ふは。往き説ぬと云は躰言。往く説くを云は用言。往け説れを云を令言を謂ふこを。語意あてし以来を。佗学は人芽もみふ知りて在れど。此を。我が往くふを。已説ぬ已説と事ふり。是を以て。往るき。説るぬを猶豫忠ふ時て。エ往け。エー説ぬ。自から押入。をる意ふり。其を往むり説このと云ふも。自吾が思ふ心れる残以て知るし。ちて是音残曳ぬて云函言を。上不出せる。神武天皇は大御歌の末小。疊く引音志夜胡志夜。此者

伊碁能布曽。此五字を有る。盈くは是ふて。乃劇責さゐ聲ふり。
疊くは師説の如く盈くれ誤字ふり。然る毎師説ふ。此言を
記傳十九巻の二十二葉ふ見えさり。
今俗う。醜惡ず事。ゐさ或は汙穢死事ずど戯見聞て。延く毎
云ふ。是惡み疎む歎息の聲ずり。此も其ず同くて。兄宇迦斯
が負氣かく。逆ふ所為を辱し免惡みさ所辭ずり。音引と
ハ。二ッれ盈ず離しては讀ず。只一ッれ盈を長呼が如く。引ずて
讀免とれ注ずて。阿くれ下ずるも同じ毎ずの。實ふも俗う
れ過夫ず為出くる戯侯えり嘲て。延く戯うし延く苦く
し。延くれみれと云ふは。此ずる盈くを同じ意は矛ふて。自ずて
うら善きみと云ふ如く聞ゆるは。乃夜行の曳れ余とも通
ふ所以ふて。其延く毎云ひ。余以と云免。彼ふ免惡ず事ふれ
ども。惡む方えり唾て。然て云れり。志夜と云も詈り汚て
れ辞ずて。本編伐行篇の第七章ふ云ふを見る後し。

宇治拾遺五。仲胤僧都説法れ條う。僧都伽く良く毎笑ひて。
此毎仲胤が作ずて句ふり。盈い盈い毎云ひて。云く毎有
ゐむ。當ふ上れ盈く音引とあゐふ同し。伽く良くは笑ふ巷ふ
良く毎も云ずり。盈い盈い毎。嘲ふて嘲せる巷ずり其え今
れ文う云く毎切さる詞ふ。うさ此頃の説經をバ。大の
毎説經といふぞ。大えく人の糞を食ひて糞を伐ずり。仲胤
が説經ふ毎て。此頃れ説經師を次き。大れく毎説經と
云ふり。と云ふる毎有ふて知ゐし。かくて是聲伐さ應聲とも成れり。此も同
書ふ。兒れ虚寝入しある條ふ。いゐ一度れこせかし毎。思ひ
ふう聞ふば。云しく毎。只くひふ食ふ音れそけ毎。毎ゐ無
くて。むきれ後う。ゐいと答されて。僧さち笑ふこ毎限ふし。
毎有る是ふり。答の巷よ毎いと云こ毎。今世ふも常ある事
伐さ毎いや。と云ふ囃し巷も常ふ云へて。

中世の書らふ重き物かど。力を入れて持上る時まさ矢叫びえう。奥い色を出して。云く於と云へる事も多うり。ちて此延聲ふ。上件れ譜の如く。良行れ五聲相副ふは。延良。延理。延流。延禮。延呂と活れて。劇得於とれ祖言れる奥更ふり。此奥劇えり起て。得の木言と聞ゐるこ奥。上う云ふり如し。ふか別う擇ま。擇る。擇れ。擇らむと活く語も有れと。擇るを余流とも云ふ言あれむ。此て夜行の曳と加行の從ふて。通えさり。其行れ所う云ふを合セ攻ふ奥し。何れ陋言。佐行れ从ふば。率れ陋言。多行れ從ふ奥。至の陋言。那行の从ふて。否れ陋言。波行れ從ふは。岩の陋言。麻行れ从ふ奥。今れ陋言。夜行れ從ふは。辭の陋言。和行れ从ふて言れし。然れど延てみか。劇得れ延と同義ふり。抑是等れ言ども雅語ふて。絶て用ふこ奥無れと。舌鈍さる人等て。活し玖えかし。率をえざ。至るをえゐる。否むなえかむ。今玖えゐれど恒云ふ事ふて。是

みふ伊と延奥素えり近く通ふれふり然て枝胞夷緞鰈ふとれ類ひ。此延う屬ゐく思はそく訳も有れど。徐う按ふバ。夜行れ曳れらむ彷く思ふ。〇ちて於れ音義の定ゐるふ。上由あり。其行を見て知ゐし。件の合口言れる字流の。字呂奥活ふ。呂聲れ副さる故う。開口して於れ純聲ふ調ふ。抑於て阿奥内外反對ふして。甚近く通ふ聲ふり其を彼元氣。より喉より口玖開ふて外ふ出て。阿聲ふ上ふ生。立選りて。喉元ふ厭入ふ如く。内ふ大れく於聲を成ゐ。故其音象を推考ふる。阿て喉外ふ輕く。其廣さ除ふれ如く聞ゐる玖。於て喉内ふ重く。其廣さ限あふ如く。聞ゐる聲ふり。是ゐさ人く自から。呼び試み外う溢まてかれきが如く。於て内ふ窄みて大れく加強く聞象されて。ゐさ自然う於れ大奥量り知る奥く阿れ大て

量り知るべからざる趣あり。熟く考ふるし。是を以て此聲自然に大祀の物を歷覆ふ意ありて。大字は義を成さず。古説に云ふ所助言を云へるも。五音は最末に居り。其第一れる阿聲は。廣大なるに匹對して。助くる由を通えさせり。（なほ既に出せる語意考は。けて助言は説を合せ考ふるし。）於を。於一を曳呼ぶ。制止の聲れり。其を内侍所は。御神樂次第に云る。阿知女法る。本方（柏子取利出音）阿知女於く於く。末方（柏子取利出音）於介末方。阿知女於く於く。末方。於介。本方取り合。於く於く。本末共於云也。末方於介を有ふ。於く是よて。其御歌ど毛殘。歌ふ毎度ふを此法あり。年中行事秘抄に。鎮魂祭の神歌八首ある中に。六首を其初こを。ふ。アチメ一度。オく〻二度を有て。於介てふ言を形し。縣居宇斯の神遊考に。於く

於く。笑ふ聲なり。或説も然なり。答ふて。雄くは假字にて。本聲なり。笑ふ平聲なれは。古本等に。みな於くを書さり云く。を有れと。笑ふ聲ふて非。神遊考は云くと切る。ふ。空穂物語倉開きは上る。云くを宣ふ。一度に所よ有れど。笑ふを云を。知ぬき也と書れし文あり。然ふる其物語なれ。其二所共るくと笑ふを。屋代翁の校せる。古本云もはもふ同し然れ此は宇斯の例は。ふ。太邑平邑を云こをも此ふて用れ文事なり。ふ。ふ或説を。梁塵愚抄を云れしる。此を大御神は御前に。御遊ひ仕奉る態なふ故る。集へる人の鳴高を制めて警蹕を御式なり。其是次第は初了。先人長度火乃前仁出來云鳴高くく。二度云くを見え。右は阿知女法を下ふも。其法ありて。其所ふて。本方。

阿知女。於く於く。志く志く。末方阿知女。於く於く。志く志く。本方取合。於く於く。志く志く。末方取合。於く於く。志く志く。又本志二度とも有る。此を數古本を校して引とる。愚按抄本は是と異なり。此を侍中群要三巻供御事に係る。初供御膳人先取蓋盤。入立鬼間御障子之間。稱警蹕。其詞オシ。持寄御大盤許跪云くを有るか。按ひ合せて所知とり。其詞オシを有るか。乃阿知女法かる。於く志く。此は今も貴人の警蹕に云ふ。禁中れ警蹕の事次段にて此書に委く見えたり。和訓栞に。をくの下に警蹕も殘りを呼ぶ事なり。侍中群要に。警蹕。其詞殘んと見る云くとて。天竺の唵邑れこを朝鮮の清道と書ある旗の事なと。云出ある。は皆非なり。殊に已に見ある。侍中群要れ本を也に。其詞殘ん作る本を。下本ど小なる物なや。尚云はず。杭草子い貢は此係る。「日此れ」はしも方る。おもはも恭る足かと高し警蹕るど表く志く也云ふ聲此こも。と云へ

ふも此事なり。於く也云ひ。志くと云ふ。約先て於志と。一言に云ふ云ふなる。表志れを也。中世書れ例の假字違ひれて。春曙抄に。をしくは。足れとれ高死を警むるれり。源氏宿木巻の注に。空穗物語に。をしを云へる詞なり。そは物れと恭らにるる人の足音れ高なを恐ると云ふ心なり。禁秘抄に。陪膳人警候とある心にやと有る也然る言なれ。日本紀通語六巻。水取政の事をいふ所う。此等の我谷川れ。文我引なて。於志と云ふを。天忍石水れ事に云ふけて。水を飲む時の視言也なり。今人有咽則祝曰。於志麻奴。亦忍水之一轉訛也とも云へるも甚しき誣會れ說なり。春曙抄に。恐れも也云へる心なれと云へる如く。今も兒の教を用ふ時れど。物有ふも取り壓言ふて。於く云ふも。實は同し意はなり。古死化物の繪巻に。おうくを云ふ化昔も云ふ有しにや古死化物の繪巻に。おうくを云ふ化物の形をも畫りり然て志くと云ふは。人我も物なも追靜む詞れ。本編依行篇の第三章に釋く我見て知る也し是警蹕の聲に於く也る由也。衣笠内大臣家良公れ淺深秘抄に。稱唯時塞口警蹕時開口也。

因て警蹕伏ザ一ホ稱也稱唯起ザ一ホ稱也とあり。和訓栞ホ因て此文を引ずて警蹕而後平伏ぜあるを甚く相違ひ文かり何れる事ホ合音ある故ヲ塞口を宣ひ。警蹕を於くを稱ずて。開音ある故ホ開口と宣へ因ある諸れ儀式書。因て神樂次第ホ称唯と云ふを數知らず多りる中ホ。すいを假字を指さ因う多ひは。皆右れ故実を知き因人の誤るり。因て警蹕を畏むべき由を。示れ聲ある故ヲ。伏ざ因ホ稱し稱唯は。令せ殘承給はり。答ふる聲ある故ホ。起ひ因ホ稱せふや。警蹕のこを。西土の書等ホ出警入蹕と。あ因ホ據りて。其方さ因ホ論ふ人も有れど。皇朝ホ入出入を。を示。於く志ふを拘はり給はぬ事と聞えて。警と蹕を別ちて稱れるこを。未見及ぼ其ヲ是淺深秘抄の文ホても知るし。かむ西宮記北山抄江次第ホど。故実れ書等ホ見えさる趣ぬも攷合せを。し。はて此於の壓覆ホ義ホる由を。上件れ譜

の如く。良行れ五聲相副ずバ。於良。於理於流。於禮於呂を活紀て。織降卸ホど れ祖言ある を更ホり。は を卸の義をり起て。織を織る織を織らむ。降り降る を も活紀て。水れ淫ホど云ふも同言ホて。共ヲたり重成ず。壓覆ホ意をり。かく種くホ活用りるホり。加行れ從ふ を置。沖與。獲奢。佐行れ从ふは。押。壓。恐。多行の从ふを。穩落。怕音。那行れ從ふを。鬼巳。波行れ从ふを。逐貫。夭麻行の從ふは。臣。臨。夜行れ从ふを。親老。及和行れ從ふは。休聲ホり。此等れ於みふ。壓覆の義ある我思ふ。假借し出さる言れ。數知らず是等の言をり轉用る言れ限り。中ホて別義れ我負ふ深先て考ふ是バ。壓覆ホ義れご を聞ホるを有の を。思ひを事ある し。其て本篇ホ次く釈見て知るぼし。○はて本行五聲れ大要我。復ホく ホ取都て云むホ。阿を字良ホり起て

て。現有れ義あり。しが。單音ふ切りて。彼れ義を成し。初段ふ位して。加佐多那波麻夜和良よ。其韻を授けて。各行れ初聲あらゑ。此ゑ誰も云ふ如く。加行以下和段の音等ゑ延長く引呼へて。悉く阿音ふ帰るを謂ふ。伊は宇理ゑり起りて。苛入の義なりしが單音ふ調ひて。氣れ義を成し。二段よ居て。伎志知爾比美以韋理ふ。其韻を授けて。各行の定聲あらしめ。此は加行以下第二段の音等を長く引き呼ばで。悉く伊音よ帰る云ふ。宇ゑ宇流より起りて。情潤れ義なりしが。單音ふ切りて諸の義を成し。三段ゑ居て。久須都奴布弖由于流よ其韻を授けて。各行れ用聲ならしゑ。此ゑ加行以下第三段の音等ゑ長く引き呼ばで。悉く宇音ゑ帰る謂ふ。延ゑ宇禮ゑり起りて。劇得れ義なりしが。單音ふ調ひて。獲れ義を成し。四段ゑ位して。祁世氐祢開米曳恵禮ふ。其韻を授けて。各行れ令聲あらしめ。此ゑ加行以下第四段の音等ゑ長く曳呼ばで。悉く宇呂ゑ帰ゑを云ふ。於ゑ宇呂ゑり起りて。御織れ義なりしが單音ふ切りて。大れ義を成し。五段ふ居て。古曽登能保毛余表呂ふ。其韻を授けて。各行れ終聲ゑ成さり。此は一行以下第五段の音等ゑ引き呼ばで。悉く於音ふ帰ゑを謂ふ。ゆて此行五聲ふ各右れ義等あり事ゑ。其發音ふ固ゑり其象ゑ上て。良行相副ひて。殊ゑり其義の諦ゑ調ひて。良行れ奈れる後もゑ永く右れ音義を存せり。其ゑ唯阿行のみ然ばふ非ず。良行ゆゑ一度阿行よ偶して。右れ五義を成せばゑて。常久よ其義を矢はゞ。其ゑ諸

言は下に活用く。良行は聲どを。自然て有入。得劇。降れどは
義を含ぬり。猶良行の所を云ふ故も見る所し。

加口
久良　久理　久流　祁　久禮　久呂
加良　伎久理　伎理　久　祁禮　古呂

此行は五聲は。日文傳に云ふ如く。牙喉は剛音。其父聲し為
る。阿行の元音。其母韵と為て。齊へる聲等なり。其音象
を按ふに。加を加良理を志こは聲。伎は伎理こを志る聲。
久く久流理と志る聲。祁て祁禮理と志こは色。古て古呂
理を志こる聲に。共に加く良行の五聲。其形象に助け
て。例は合口言はる。久流て言は。出來しるそ。起り初り
は。此て古今を加良理。加こ良こ。伎理こ。伎こ理こ。久流理。久
こ流こ。祁礼理。祁こ礼こ。古呂理。古こ呂こ。と謂ふ。形容

言は多う認ち思ひ通して雜ふ。然て本色の下に。久良
加良は。と注せる。其本義こる詞。即り。次に委く云ふを俟
し其由を。加行篇は初章はる。二十五言は。神典は古傳と。阿
聲に。加行の從ふは五言を小。徴し攷ふてそ所知りは。
加良　伎良　久良　祁良　古良　其二十五言は譜かく
加理　伎理　久理　祁理　古理　は如し。是章に第三段
加流　伎流　久流　祁流　古流　久流の合口言
加禮　伎禮　久禮　祁禮　古禮　れは。其中央に位し。其堅横は斜に貫
加呂　伎呂　久呂　祁呂　古呂　通る趣て意は深を。此行の三段久流を
二十五言て。久流より起り。旋は義に。久良。久理。久流。久
禮。久呂を活り。久良を加を約りて。初段に。居て。久理て

伎と約まて二段了居まて久流と久ゞを締りて。素はまゝ三段
ふ居ゆゑ。久禮と祁と約わて。四段了居まて。久呂ゞを古ゞ約まて
て。五段了居ゆは是ゆ以て。此行五聲は初義ハ。共了旋字は義
ふり。但し其段位と。五母韻の次第ふ用ゆゑ。既ふ云へ了ゞ
如し。旋字は說文方部了。周旋旗之指麾也ゞ見え。段注了。
旗有所。鄉必運轉其杠。是旦周旋。引伸為凡轉運之稱と
云ひ。化字書どを。疾也。遷也。回也ゞも云へて。蓋ふ是五色
ふ初義なこゞ云ゆふ。毎色種くゝは末義あり其て下ふ謂
ふを見ゆゆし。はて如此を爲て。旋字は本義ふ了。加伎久祁古ふ。
ゝ各ゝふ。良行の五聲相副しゝば。加ゞ初段軟の活用ゞ成
て。伎は二段煌は活機とれり。久と素は如く。三段旋は活用
ゆ成為し。祁と四段消の活用ゞ成て。古ゞ五段凝の活機と成

ゞり。此ゞ是行は轉用せゆ初ふり。軟は說文軟部ふ。日始出
りて。世言ふ加良理ゞ軟く。加良理と晴ゆれを語ふ形容言
ふ叶ゆ了字ゆり。煌と同書火部ふ。煌ゝ。輝也。火皇色と見
え。佗字書どを。音晃明也ゞも。ゆ。消ゞ韻會ふ。說文消盡
也。水肖色と見え字彙ふ。減也。減也衰也。退也。釈也。殺也れ
と了。凝て韻會ふ。增韻結也。一日成也。定也。水竪也ゞ。
消凝て例の引伸ふて如此用ひし了。然て凝て元ゝり加
引ふ根せ了。然ゆ了良行は五聲は。ゞ形容より。機は副ゆ
る訓ゆり。然ゆ了良行は五聲は。ゞ形容より。機は副ゆ
聲等ふれど。其本聲ゆひ了ゆて韻のみ残て。加伎久祁古は
單聲と齊わるゆ一度かくゝ良行は副ひて。右は音義を成せ
ゆゝり。永久了其義を存して。各ゝ其音ふ自然は如く。軟。煌
旋消凝の義を持ゝり。然て有れど。其ゞ實ふは。第二義ふり
て。其活機の大要を云む。初段て軟ふ起りて。軟仮刈彼
輕ふゆゆは祖言。二段ゞ煌は起りて霧切著断明昭ゞは

祖言・三段は旋を起して、闇・操・黒・暮・暗なども祖言・四段と消殺・殺・殺なども祖言五段と疑ふ起りて著来・鬱・氷・是・比・御言などを多うり。其て本篇に就て見るべし。けて是五聲は。然御言・御類こゝに轉用し出さ起れる由来を。神典う枕詞ふ。彼初て。大空て生出し一物の。浮雲をこゝ。根係る所ふく在りは趣な。神代紀正書ふ。天地未剖会易不分渾沌如雞子。溟涬而含牙と見え。古事記ふ。久羅下那洲。多陀用幣流之時に有て。此て其物の。未剖ざ御間を。会易構合ひ狀はし傳ふて。此傳は。溟涬を久〻母理。阿加久良はど訓くると。久羅下那洲て、譬言はむ。是行の趣り弘知るは神語はる。前條ふ引く本文は。其貌難言。其は那行は下詰ふ。乃是狀はりし故ふ。云を見て知るし。然は其物の。会易構合せは有狀ふ。牙

含みて溟涬はら。或て明く或を闇く。海月はを漂ひて。久く流〻こを旋を。久〻良く久〻禮く在りは狀な。目前う見行せる。神は御情ふ。ふ所思着せは隨て。其様を。大御言ふ語ひ形はし給ふる。此古傳は。發出さは初て。即是五聲は元基と為を。其は溟涬りて。牙を含むと有る狀始賢せる神ふらは。當昔ふ有る狀な。御語はる。海月はを云ふ傳ふ。由無れは。乃其神等の真し添ある詞ふれど殊う熟く叶牙は譬へて。已船うて正相は。此物は。海う漂ふ様を見し事ある。実ふも浪は月は映れる趣ふて。久〻良く久〻祀く。見えみ見えをみはる物は。然れは其名義を。轉暮は如く。見えみ見えをみはる物は。然れは其名義を。轉暮は如く。漂ふは。轉く。を。て。暮消る如は故う。久良久祀。呼ひしは。其久祀の。は。を切れる名うは有る。彼一物は。大空う漂ふは。戒は。此物は。譬ふは。を以て。其物の様は或を明く或て闇く。久良久祀と。て。在りる事は。も悟て。は。うし。

抑其元基は然る所以を。何聲ふ加行の從ふ添。五言ふ因て
で所知る。其て阿行篇第二賁は初段ふ。阿加。所伎。阿久。
阿利。阿古は五言是あり阿を皆例の指色ふて。彼は義ある
ば。上件の二十五言を。相照し攷ふ添る。初言の阿加は。明は
義あれど。此を彼一物持。久く流く。久く良く在添ふ指し
て。阿久良と詔せふ。其物已る剖りて。精妙れるう萌騰て
で。天日を成れるふ。尚旋く。て。赫ふ懸ふ添故ふ。阿久良
やで其言を為て。良は開音ふ因りて。阿加と約り。彼譜の
初段れる。加良。加理。加流。加禮。加呂は活機をれし。阿久良て
と彼闇の義ある。阿加と為て。彼日ふと彼所の義を
し。其を一字訓う綜べは赤まと明は義ふて。明る。明は

明ふむ。と活用く。ば謂ふ。阿賀と濁ふで。上
騰れとは訓を。其も荒ふり同言ふり。はて阿加良は阿
加を約り。阿加理を阿伎と。ふり。阿加流て阿久を。ふまて。
阿加禮て阿祁と約り。阿加呂を阿古を約て。明は活機ふ
る。赤開熟も元より同言れて。然ふて。其然上ふ添。天日は
うり。赤著明ふる物ふく。其騰る時を。是世は開ふ添初
れ。ふり。赤は説文ふ。南方色也。从大火。段注了。俊赤色。至
地。謂不毛也。と見え明て同書ふ。照也。从月。回。段注ふ。火部。日。
照明也。小徐作照。日部。旦。明也。大雅皇矣傳。日照臨四方。日
明。凡明之至。則曰明。猶昭。也。と見色。其餘の字義を。
此ふ漠し。ふ。猶右は五言より。機は出さふ言等い。を多うり
本篇を見て知る。然れで阿聲ふ。加行は從ふ添五言を。彼譜は初行
れる。加良。伎良。久良。祁良。古良の活用と。其元一ふして。彼

旋と指さ添言は。活機ありしが。阿加。阿伎れと其五言は。其副ある良聲の去れる言。加良伎良等れ二十五言を。其冠さ添阿聲は。省の足齊等添言等ふて。共う右は古傳な詔ひ用ある。當初は神語なるは。疑なし。其を阿邑を。凡て指さる事物は無ては。決めて出さる邑なる。彼阿加は。彼旋と指ある物あり。彼軟を指さる事ありて。発れる訳なるを以て。かく是謂ふあり。其を此阿加ふ姑く良行の五邑残て。彼加理加流れど。其五言ふ仮う各く指詔は阿な冠ら活用かし。呼試みても知ねなる。○けて上件て。此行は起原。まあ各音ふ。一義を持さ添。都較の説なるが。亦同行互う。音義相通ふ事は有るて。彼二十五言は。横五段竪五行ふ整へる上うて。初行の五言は。共う加を成て。第二行の五言を。共ふ伎と行て。第三行は五言て。

共ふ久を成り。第四行は五言は。共う祁を成り。第五行の五言を。共う古と成れるふ因添事あり。故是を以て。同行あがふ。其音の相通ふ耳なら夫。加を呼ぶ邑て一ふして其義の易る事あり。其を此一下邑は。然るふ非夫。伎久祁古も。共ふはあじ趣あり。抑是行の五聲。かく彼二十五言は。混錯りて調ずるが故う。今しを一義を執ては。決免難ふ似あれど。其中ふ就て。加は主あるを。軟の義ふて。久良。加良は約て。伎の主さ添て。煌は義うて。久理。伎理の約り。久て旋の義素ふて。上下の四義を兼ね。祁は主あるを。消は義うて。久禮。祁禮の約て。古は主さ添て。凝の義ふて。久呂。古呂は約を去て。各く其上う冠れる四十五言。各く其下ふ從へる五十言。共う此義は差ふ事れ

し。各く其上ふ冠れる四十五言ぞハ。加伎久祁古を頭ゑ冠
まゐ言れ。各く四十五言ぞハ。加伎久祁古れ。下ふ従ふる言れ。各く五十
ゑ有る五十言ぞハ。加伎久祁古れ。下ふ従ふる言れ。各く五十
言ゑ有るを謂ふ。ぞ既ふ。古言活用れ條。加行の所ゑ云へ
ゐるゑ。是行五色れ。上ふ在りて機
ゐる祖言ゑ有るが。猶是ゑ転用假借し出ゑる諸言ゑ更ふ
り。佗言ふてゑ。切りて此行の五色ぞ成ゑるは。函と自然ゑ
其義を生せり。其由は。本篇ふ次く。釋以て行く残見て知る
ゑ。ゐて此五聲はゑ。佗行と同ぞく牙喝ふ起れるが。牙喝
ゑ元より。剛ふ堅如れ。柔ふ多利ゑ。相兼さる所ふ
て。此行ゑ。其剛ゑ堅如れ。柔ふ方ゑり。發ゑる聲等ふ故ゑ。其
音象自然ふ其趣ふ聞えて。右れ如く五義ふ別て。軟煌旋消
凝ゑ。ゐ顯ゑ立ち。旋ぞ。ゐ幽ゑ主て。言霊の幸ゑ為こぞ。上
件れ譜ふ視て知る。其ゑ右二十五言の譜れ。ふ非ず。本
篇毎章の二十五言ゑ皆是例ふり。

或人此行の音象を詳して。譬ヘバ。劔太刀鞘ゆ抜ケ出て。伊
香山と云ふ如く。劔擊の響ゑ音て心の底ゑ徹りて聞ゆ。
ゑ云ふ。ゐ。実ふ然ゑ音ゑ。ゐて其音象の随ゑ。加ぞ初段ふ在りて。
る詞ぞ聞えさゐ。ゐて。極免初むゐ音ゑ為し。伎ゑ二段ふ居て。極み定むる音をれ
し。久ハ三段ふ在て。極免用ふる音ゑ為し。祁ぞ四段ふ居
て。極め。今次る音ゑ為し。古ハ五段ゑ在りて。極免終ゑ音を
為せぞ。五色共ハ。旋字ゑ義ゑ持ゑ。初色の父ゑ熏ふる
受る音質ゑ。各ふ。初体用令終ゑ音の別ふ。ゐ。五母韵ゑ
事を指ふ。信。伎ぞ事ゑ極ひる。極ぞ事ゑ指ふ。光枝ゑ国辞解ゑ。加て
は事を指ふ。ゐ言。古ぞ事ゑ指治ひゐ言。と云へる。れ未ゑ委ふ
ら。ゑ。然れど加茂宇斯の門人ふして。一言れ解ゑ為ふる。
此人を始ふ。かくて此五聲の。語上ふ在て。語下ふ応て。活
は有る。
機ゑ。其連聲ゑ因て。其義の轉り通ひ。函ゑ或ぞ上省

うて下省りて。各〻一聲に言を為れるも鮮からず。其て此所ふ盡し難れど。其聲どを以出ふ諸章に。因こふ釋辨ふ弓城俟ず。

佐須良 佐良 志須理 志理 須須流 世須禮 世禮 曾須呂 曾呂

是行れ五聲て。日文傳ふ云ふ如く。牙喉舌末相兼こふ柔音。其父聲を為て。阿行れ元音其母韻と為りて。齒へる聲等れ弓が。其音象を按ふて。佐を佐良理を志ふ聲。志て志理こ著を志ふ聲。須は須流理と志ふる聲。世を世禮理と志ふ聲。曾を曾呂理を志ふる聲ふて。共て如く良行れ五聲。を以形象を助りて。其合口言形る。須流てふ言れ。出來しりぞ。

起り初りふ。此は古今ふ佐良理佐こ良こ志理こ志こ良こ須こ良こ世礼理世こ良こ曾呂理曾こ呂こ如ど謂ふ形容言れ多う説を思い合せて辨ふ弓し。然く本邑の下ふ須良佐良れど注せるは其本義ふる訓形り。次ふ委く云ふ。俟弓し。然ふて。佐行篇の初章形る。二十五言球。神典れ古傳と。阿聲ふ。佐行の從へる。五言を。微し攷て所知

佐良 志良 須良 世良 曾良

佐理 志理 須理 世理 曾理

佐流 志流 須流 世流 曾流

佐禮 志禮 須禮 世禮 曾禮

佐呂 志呂 須呂 世呂 曾呂

得居 柳是二十五言を。須流より起て。爰の義ふして。須良。須

理。須流。須禮。須呂。活用ハ。須良は佐と約りて。初段は居て。須理と志を約りて。二段は居て須流を須と締て。素は
ゆ〜三段ハ居て呂。須禮を世を約て。四段ハ居り。須呂は
曾を約りて。五段は居ハ。是を以て此行五聲は初義と。共ハ
爰字は義なり。但し其段位を。五母韻の次第ハ猶ふこと。既
ハ云へるが如し。爰字は。説文夂部の行爰ニ也。二曰借也を見
類に。左て爰ハ火ハ安ニ聚ハ。爰利ハ義ハ用ひ。爰ハ段注ハ爰ハ行見と。淺駿峻ハ。
ハを。是五色ハ初義を。云ふ。ハ毎色種ニ。ハ末義あり。蓋
其て陸ハ謂ハ見爰ハ。ハて如此次爰て。爰字は本義ハ。佐志須世曾
ハ。ハ〜各〜ハ。良行は五聲相副しハば。佐と初段ハ。ハは活用
と成て。志を二段著の活機と成り。須は素の如く。三段爰の

活用ハ。世て四段迫は活機を成て。曾は五段反は活機
と成り。此を是行の轉用せる初ふり。本は説文ハ部ハ人
見を。段注ハ。違離也。人離故ハ大ハ人也を云ひ。佗字書ハ也
ハ來。去離ハ。ハ就之ハ色と。相違也。ハ大ハ色
著。注ハ。著形之大者。明著之頭者を云ひ。字彙ハ。章也を云ふり。
迫て説文辵部ハ。近也。ハ辵部ハ白色と見え。廣韻ハ。逼也。急也。增
韻ハ。窘也を見ハ。其て説文又部ハ覆也。ハ又厂と見え。徐
注ハ。又手也厂象ハ物之反覆此指事。詩小雅威儀反ハ。角弓章
翻其反矣ハ。ハて然て反て
素を。曾呂ハ起れる言形り。然ハハ良行は五聲を。を形
容より。機は副へる聲等ハれど。其本聲ハひハ本て。韻のみ
残て。佐志須世曾は單聲と齊ハる。一度かく良行は副ひ
て。右は音義ハ成せるを。永久ハ其義は存して。各〜其音
ハ自然の如く。本著。爰迫。反の義を持〜る。然を有れど。其て

實、ふは。第二義ニ於ケこと上ノ如し。其活機の大要を云ふ。
猿・洒ニ於ケど祖言。二段を著シ
言三段と發ス。起りて、尚摩研為ス起て
活ス、五段は反ス起て、空ノ様ニ剥ス其ノ除ク
ふか轉用し出ふは言ヲも多ク。其て本篇ニ就て見ル
けて此五聲ト。然起れる由來を。神典ニ於ケ誓ふ。上件ノ。溟
滓而含牙と云ふ牙を。委くハ。天地之中生一物。狀如葦牙と
を國中生物。狀如葦牙之抽出也とを有りて。是乃カ初ノ。会易
不分ヲ有ふ。易元ふ。此物空中ニ萌騰りて。天日を為て。
天霓と薄靡ふ時。天地開けし時を謂ふ。天地之中生一物を。天
地を為べき彼一物の中ニ別て是葦牙ふ。彼初發ス生出し物を。
ふ由ふて。國中ニ生ル物と云ふも同義ふり。
ふ初一物を称し。ふ其物の中ニ含ル牙ふ葦牙ふ
萌騰ふる物を。一物と云へふり。此差別を。勿思ひ錯ル

く。委くは古史徵ニ。天説辨ニ云へり。其空中ニ萌騰ふる狀を。神代紀ニ。天地
初判。有物若葦牙。生於空中。云ふ。古事記ニ如葦牙因萌騰之
物而成神名。宇麻志阿斯訶備比古遲神。次天之常立神と。
ア。天地初判ル字。神代記ニ。三所ふ出て。共ニ。アメツチハジメノトキと訓ふ。
ハジメノトキを有ふ。今ふ。ア。メツチハジメノトキと訓ふ。
ふを採ふり。然れど其謂ゆふ。國中ふる所ふり。抽出て萌騰
ふる時しも。須ふ流ふ峻ふ。須ふ良ふ。佐ふ良ふ。志ふ良ふ。
を在ふる象を。目前ニ御覽せば。神ル御心ニ。ふる所思看せ
ふる随ニ。其様を大御言ニ。詔ひ形はし賜へふ。此古傳ル發
出ふ。初て。即是五聲の元基とは為て。其て葦牙ル抽ク
ふる始。右ル古傳ふ。出ふ如く。と警
ふ神ふらでは。語り傳ふ。ふる狀を見行せ
ふじ。道理ふ。こを。前條ふ論ル

ると、合せ考ヘて悟り給ふし。いて其元基の然る所以を。阿聲ヨ佐行に從へる。五言ふ因てぞ所知ける。其は阿行篇第三章の初段に

る。阿佐。阿志。阿須。阿世。阿曽に五言起ふり。阿〻皆例に指聲ふて。彼に義ある故。上件の二十五言と。相照し攷ふるう。初言に阿佐ぞ。浅に義あれど。此は彼一ツ物の。須〻流〻。須〻良〻ぞ在ふを指して。阿須良と詔せる故。其物分りて。清易れるが。晋み杏りて。天日ぞ成とるふ。尚爰にして住懸れる故。阿須良やうて其言と為り。良に開音ふ因て。阿佐ぞ約り。彼譜に初段ある。佐良。佐理。佐源。佐禮。佐呂に活機を形し。阿須良は乃彼爰ふ。ま〻彼尚に義ふるが。開音して阿佐と為て。彼早はま〻彼小の義を形し。其は一字訓て綜ては。

旦まと浅の義て。浅に浅ぶ浅れ浅らひと活用く成詔ふ。求をアサリぞ訓むを乃是とり出さて。にて阿佐良と阿佐ぞ約り。阿佐理ぞ阿志と訛はて。阿佐流ぞ阿須ぞ訛り。阿佐禮と阿世と約り。阿佐呂は阿曽と約て。浅の活機形ぞう。旦葦洒も元とり同言形り。然ふて。其清上れる物ま。如葦牙とあふて。徒ふ辟に言に みて非爰。其を含える所に。浅〻ふ邉て。元ふり自然て葦生て。其牙と見錯ふ。天日に萌騰り晋て杏て。葦乃て其足ぞ在て。故て。此各ま貫ひ。う訛其進み杏ふ時はも是世に旦の初ふ。旦に夢形て。旦て説文訓て。朝也。从ふ日見一上一地也。段注ふ。下文云。朝者旦也。二字互訓。韵會小徐曰。日出於地也。廣韵早也。ぞ見え。浅は説文て。不深也。从水戔聲。段注ふ。按不深曰浅。不廣亦曰浅と見ふ。其餘の字義て。此ふ漏し訛。猶右に五言とり。機ま出る言等い

を多こうり。本篇を見て知るべし。然れど阿聲ハ。佐行の從ふる五言を。彼譜は初行ハ。佐良。志良。須良。世良。曾良は活用せず。其元一ツにして。彼爰と指さゝ言は活機ハ。阿佐。阿志れども五言を。其副ある良聲の交ハる言佐良。志良等は二十五言し。其冠さゝ阿聲は。省かり齊へる言等なて。共ハ右は古傳ハ記ひ出ある。當初は神語ハ。然はも阿邑を。尼を指さる事物の無て疑ハし。決めて出ざる邑ハるが。彼阿佐。彼爰と指さる物あて。彼交を指ある事ありて。起れる言ハる況以て。かくは云ふ。其し此阿佐ハ。姑く良行の五音を。彼佐理佐流ハども五言ハ。假ハ各ハ指詞は阿ま冠らし。活用かし呼試みて知るべきなり。○けて上件を。此行は起原ハ。各音ハ。一義ハ持さゝ。ハ。較略の說ハるが。亦同行互ハ。音義相通ふ事の有ハを。彼

二十五言は。横五段竪五行ハ整へる上ふて。初行は五言し。共ハ佐を成ハ。第二行の五言を。共ハ志とれて。第三行の五言は。共ハ須を成ハ。第四行は五言を。共ハ世と成ハて。第五行の五言し。共ハ曾と成ハるハ因ハ事ふり。故是を以て。同行ふ耳から爰佐と呼ぶ邑を。互ハ其音の相通て此一邑は然ハ非爰。志須世曾も昔ハれ同じ趣ふり。其抑是行は五聲ハ。彼二十五言の混錯ハて調へはが故ハ。今しを一義ハ執てし。決め難は。似ハ多れど。其中ハ就て。佐の主ハるは。交は義ハて。須良。佐良の約ハて。志の主ハるは著は義ハて。須理。志理の約ハ。須を。爰は義素ハて。上下は四義を包括。世は主ハるは。迫は義ハて。須禮。世禮の約ハて。曾は主

さなれ。反の義ふて。須呂。曽呂は約として。各々其上ふ冠まる
る四十五言。各々其下ふ従ずれば五十言。共ふ此義ふ差ふ事
なし。各々其上ふ冠れる四十五言をハ。佐志須世曽頭ふ
冠れる言の。各々四十五言ぞ有るを謂ひ。各々其下
ふ従ずる五十言と名。佐志須世曽は下ふ従ずる言は。各々
五十言ずる有る字と謂ふ。そは既ふ古言ふ活用ふ在りて。機ふ依り
る如し。斯くて其四十五言は是行五音の上ふ在りて云ずる
祖言形る猶是を転用假借し出ふる諸言を更ふり。依りて其義
言ふても。如之ぞ此行の五音ふ変ぬるをば。自然ふ其義
を生せり。其は本篇ふ次々釈以て行く状見て知る宜し。
けて此五声はも。加行と同なく。牙喉ふ起れるが。其柔ふ発
利ふなれ方とり発れるを。舌音ふ添ふる声等ふれど。其音象
自然ふ其趣ふ聞えて。右の如く五義ふ別る。去著發迫反を
は顕ふ立ち。変ぞは幽を主とて言霊の祐を為こそ。上件は

譜面の如し。其も右二十五言のみふ非ず。本篇毎章の二十
五言どを。皆斯の如し。或人此行の音象を評し
て。其音韻を譬ずむふ。小竹葉の深山も亮る喧く如く搢身ふし
ま御人綴透りて。滴なく覚ゆと云ひ。加佐二行の十音を八坂瓊
を須まさる如かし。音響も由良ぞ云ずり。擬けて其音象に随ふ。佐く
初段に在りて。進み初むる音を為し。志をば二段ふ居て。進み
定むる音を形し。須は三段に在りて。進み用ふる音を為し。
世をば四段ふ居て。進み令ぬる音を形し。曽は五段ふ在りて。
進み終る音を為せり。五音共に。変字の義を持さるをば。初音
の父ふ稟さる音は。各々初鉢用令
終ふ音の別なるは。五母韻を受さる音質なるこそ。上の如
し。彼因辞解に。佐は事を指定むる言。志は事を定め鎮むる
言。須は事を鎮め定むる言。世は事を鎮め押ふる言。曽は
をば事を定め治むる言をぞ云ずれど。此をば未だ委からず。
て此五声の。語上に在る。語下に於て活機に於る。其連声

〇

ふ因りて。其義の轉て易り。はと或て上省て下省りて。各
〻一聲は言と為さはも鮮から爻。其て此所り盡し難れ
て。其聲どもは出る諸章の。因〻ふ釋辨ふる様見て知ほし。

多都良　都理　都流　都禮　都呂
多良知　知理　氏　氏禮　登呂　登呂

此行は五聲て。日文傳ふ云へは如く。舌上の剛音。其父聲と為
て。阿行の元音。其母韻と為りて。齊へる聲等はるが。其音象
な按ふる。多は多良理と云さは聲。知て知理〻や云ある聲。
都て都流理と云ある聲。氏も氏禮理と云さは聲。登て登呂
理と云さる聲ふて。共ふかく良行は五聲。それ形象は助り
て。其合口言はる。都流てふ言は。出來しらてそ。起り始けは。

此も古今ふ。多良理。多〻良〻。知理〻。知〻良〻。都流理都〻
良〻。氏礼理。氏〻良〻。登呂理。登呂〻はど謂ふ。形容言は
多うる様思い合せて辨ふ為し。然て本色の下ふ。都良多良
ふど注せるは。其本義〻はは。訳ふる。次ふ委く云ふる俟為し。
其由て。多行篇は初章はる。二十五言ふ。神典は古傳と。阿聲
ふ。多行の從ふる五言ふ。徵し攻為てそ所知りは。ふ其
多良　知良　都良　氏良　登良　二十五言は譜かくは
多理　知理　都理　氏理　登理　如し。是章ふ第三段都流の合口言はる
多流　知流　都流　氏流　登流　が。其中央は位して。其
多禮　知禮　都禮　氏禮　登禮　竪横はふ斜ふ貫通て。此
多呂　知呂　都呂　氏呂　登呂　る趣ふ意を潛見て。此
十五言は。都流より起て。聯の義ふして。都良。都理。都流。都禮。
行る。三段都流てふ。起
行る所以を。はふ
心留居為し。抑是二

都呂を活用とし。都良と多と約して。初段に居り。都理を知を約りて。二段に居り。都流は都と締りて。素れば〳〵三段に居れば。都禮を氏と約して。四段に居り。都呂と登を約りて。五段に居れば。是を以て此行五聲は初義は。共に聯字の義なり。但し其段位を。五母韻の次第に因ること。既に云へるが如し。聯字は。説文耳部に。聯は作るて。連也。从耳。从絲。从耳。耳。連也。於煩切。絲。連不絶也と見え。段注に。連員車也。員車者以人輦車。人與車相屬。因以為凡相連屬之偶。周人用聯字。漢人用連字。古今字也と云へり。蓋は。是五色は初義に引用せり。其を下に謂へるを見る。義あり。けて如此を。聯字は本義なり。多知都氏登に。はゝ各〻に。良行の五聲相副しるば。多を初段垂は活用と成て。知て二段散は活機と成て。都は素は

如く。三段聯は活用を為し。氏て四段昭の活機と成り。登を五段取の活機と成り。此を是行は轉用せり初なり。垂は土部に。遠邊也。从土。乘聲。垂者遠邊也。莊子翼。若垂天之雲。崔云。垂猶邊也。其大如天。一面雲也。垂本謂遠邊。引伸之凡邊皆曰垂。と云ひ。增韻に。又自上縋下也とあり。散を説文良部に。糜肉也。从肉。散聲。散者會意也。散分離也。引伸凡散皆作散。散行而散廢矣と云ひ。字彙に。散疏離而不聚也。又布也を見る。昭を説文日部に。明也。从日。召。邑と見え。段注に。引伸為凡明之偁。字彙に。音招。明也。光也。著也を云ひ。取を説文耳部に。捕取也。从又耳と見え。字彙に。獲也。牧也。受也。資也をあり。然て取て素なり。登呂に根させば。訓なり。然ばに良行は五聲を。を形容より。機は副しに。聲等られで。其本聲は別に。ひに。なりて。韻のみ残て。多知都氏登は單聲を齊れるが。一度かく良行は副して。右は音義を成せばとり。永久に其義を存して。各〻

其音ふ。自然の如く。垂散。聯。昭。取れ義を持ふり。然も有れど。
其て實ふは第二義ぬりて。其活機の大要を云ふ。初段
祖言。二段は全く散れ活ず。三段を聯ふ起りて。足樽誰ぬどれ。
の祖言。細段を昭ふ起りて。類釣弦ふ起て。五段て盪ふ起
て。虎鳥取ぬとれ祖言ぬる類ひ。ふ轉用して此五聲
出ふる言ぬも多うり。其は本篇ふ就て見ぬしれて
れ。然起れる由来を。神典ろ替ふる。上件れ謂ゆる。國中ち
り葦牙ぬして。萌騰ふる物れ。天日を為れる後ふ。天地の成
定ふ。ふ趣ふ。神代紀正書ふ。其清易者薄靡而為天重濁者淹
滞而為地精妙之合搏易重濁之凝竭難故天先成而地後定。
然後神聖生其中焉とうふ。薄靡ふ多那比伎。淹滞を都豆伎
と訓ふ。古語ふ頼てぞ所知れふ。此傳れ文て赤縣籍淮南
子ふ據ふれ也とを実ふ

然ふる古傳れ有れふ。漢文ふ塡ふれ
ふこぞ。既ふ古史徴ふ云ふ見ふ。然ふ多那比伎
を。棚引ぞ書ふふ字れ如く。棚ぬし引く義ふり。ぬど釋む
こ事も無れど。多多都良の約り垂れ義。那は奴良れ約ふ成
の義ふて。垂成引ふり。都豆伎て續と云ひふ。是ふふ事は無
れど。都は都流の約り。連れ義ふて。連付て。言ぬり。上れ字
ふる所ふ著せふ。垂字の義を思ふ。垂ふ捉を義を釈と
椙歟ふ詞言ぬり。古語ふ天足ぞ云ふ。倭漢自ぬうふ
言ぬり。然れで其天と垂成びず。地を連付くふ。都ふ流ふ少
聯。垂紀。都ふ良ふ。多ふ良ふ。知ふ良ふ少を在りふ狀ふ。目前ふ
見行せふ。神れ御情ふ。そふ所思看せふ隨ふ。其様を大御言
ふ。詔ふ形はし給へふ。此古傳れ發出ふふ初ふて即是五

聲は元基(モトヰ)にハ為れて。其を右は古傳(ふるつたへ)大倭(おほやまと)ふまれ。吾縣(あがた)ふ由神ふらで。如此(かくの)語り傳(つたへ)ふ。其狀(そのさま)を。世(よ)は始(はじめ)絶(たえ)正目(まさめ)ふ。御覽(みそなはす)ふ論(あげつらふ)を。思ひ合せて知(しる)べく。亦是(また)ふてを。倭漢(やまとからくに)と国と異れども。天地(あめつち)初發(はじめ)の傳(つたへ)は。同一(おなじ)致(いたす)ふり。抑其(そもそも)元基(もとヰ)は然(しか)る所以(ところゆへ)て。阿聲ふ多行は從へる。五言ふ因てで所知(しられ)ふ。其て阿行篇第四章の初段ふる。阿多。阿知。阿都。阿氏。阿登は五言是(これ)ふり。阿を皆例(ためし)の指聲(さしこゑ)て。彼(あ)の義ふる故。上件は二十五言と。相照し攷ふる。初言は阿多(あた)て。當(あた)の義(こと)ふれて。此は彼(あ)一物は。都(つ)こ流(ル)。都(つ)こ良(ら)こを在る故指(さ)して。阿都良と詔せる故。其物已ふ判(わか)て。精妙(くしたへ)ふる。天霆(あまつらい)と薄靡(たなびく)ふ連(つら)こをして。垂(たり)周(めぐ)る故。阿都良(あつら)やぶて其言を為(つくり)。良は開音ふ因て。

阿多(あた)と約(つづ)り。彼(あ)譜の初段ふる。多良。多理。多流。多禮。多呂は活機(いきざし)ふ。阿都良を。乃(すなはち)彼連の義ふる。開音して阿多と為(つくり)。義ふれし。其を一字訓は。彼(あ)重は義ふ。當(あた)ふ當(あた)。當ら。む。活用(はたらき)ふる故。謂ふ。煖(あたたか)も。當(あた)ふ當(あた)。當ら。む。活用(はたらき)ふれど。其言傳はら。ず。遂(つ)る火ふ。何ある。を云ふ言同じ活用(はたらき)ふれし。残は。阿多良は。阿多と約(つづ)り。阿多理は阿知と訛(なまり)て。阿多流を阿都と訛(なまり)て。阿多禮は阿氏を約(つづ)り。阿多呂は阿登を約(つづ)て。當は活機(いきざし)ふ。煖味(あたたかみ)も。元(もと)より同言ふり。然ふと。天日は氣勢(いきざし)の隈(くま)ふ。廣(ひろ)ぶて垂(たり)成びは連(つら)成て始(はじめ)ふる。時は。是世は煖氣は當(あた)ふ初ふ。ば。當は說文は田相値也。公田尚相持相抵皆曰。色段注ふ。値者持也。田與田相持也。引伸之凡相持皆曰。當報下。旦當皇人也。是其一端也。韵會ふ。敵也。直也。生也。即也。底也。中也。見元。煖說文ふ。盈也。公火爰色段注ふ。盈各一本作溫。今正。說卦傳日以晅之。晅亦作煖。煖字也。佗字書ど

をふ本作煖火熱也或作暖火氣也見元
等いり。其餘の字義を此ふ淺し。故に猶右れ五言をり出さる。訶
篇を見て知るべし。然れども阿聲ふ。多行れ從ふ五言也。彼、譜
れ初行れる。多良知良。都良。氏良。登良の活用と也。其元一つ
して。彼連と指さふ言れ。活機れるしが。阿多阿知れどれ五
言也。其副ある良聲の本れる言。多良。知良等れ二十五言は。
其冠さふ阿聲れ。省うて齊ふ言等ゐて。共う右ゑ古傳ふ
詔ひ出ある。當初乃神語れるこを疑れし。其て阿、邑はも凡
無ては決めて出さる邑れるふ。彼阿多と。彼連と指さふ事物の
あり。彼無と指ある事あり。姑く良行の五言をそ。彼多理呼多
謂ふ。れる。其て此阿多れ。起れる言れる。ゑ以て。かく也て
流ふ。五言ふ。假れ各ふ指詞れ阿る冠らし。活用うし
試みてを知。○れて上件て此行れ起原はある各音ふ一義を

持さふ。都較の説れるが。亦同行互う音義相通ふ事れ有る
て。彼二十五言れ。横五段竪五行ふ整へる上ふて。初行の五
言は。共う多と成て。第二行れ五言也。共う知也れり。第三行
れ五言也。共う都也れる。第四行の五言ハ。共ふ氏と成り。第
五行れ五言也。共う登也成れるふ。因ふ事ふり。故是を以て。
ふ。其音の相通ふ耳れらず。多れ呼ふ邑は一ふして。同行ある。
易ふ事あり。其て此一邑のみ然ふ非ず。知都氏登も共う。其義れ
趣れり。抑是行れ五聲。かく彼二十五言れ。混錯りて調ふる
が故う。今しも一義を執ては。決め難ふ似されど。其中ふ
就て。多れ主ある也。坐の義ゐて。都良。多良れ約う。知れ主さ
ふて。散の義ゐて。都理。知理れ約り。都て聯の義素ふて。上下

此日義を持ち。氏の主あるは。昭に義ふて。都禮。氏禮の約て。登に主ふ故。取に義ふて。都呂。登呂の約を以て。各ゝ其上ゝ冠れる四十五言。各ゝ其差八事形し。各ゝ其下ゝ從ふ五十言。共ふ此義を謂ひ。各ゝ其下ゝ從ふ五十言を八多知都氏登の下ゝ從ふる言ゝ。各ゝ五十言有りを云へるが如し。斯て祺四十五言を。五十言を。其を既る古言活用に出る條。多行に所を云へるが如し。斯て祺四十五言を。五十言を。猶是より轉用。假借に出さる語言。更形り。倭訓ふを。切て此行の五音に成る故。自然て其義を生せり。其は本篇に次ゝ。釋以て行く。知る為し。けて此五聲はを。那行と同ぶく。舌上て起れるが。舌を元とく。剛ふ光澤れると。柔ふ滑潤ふ故。相兼さる所ふて。此行て。其剛ふ光澤ある方より。發れる聲等形る故に。

其音象自然て。其趣ふ聞えて。右に如く五義ふ別て。垂散聯昭取を以顯ふ立ち。聯を以幽を主りて。言靈の幸を為こを例に如し。其は右二十五言に譜て更形て。本篇毎章の二十五言も。みな此例に違ふ事形し。然て此五音。那行と同じ舌音ふら。彼行く。柔に起りて会に如く。此行を。剛ふ起て場に如く。夫婦の如く相通ふこを。縣理の如く。居宇斯に。早く教育遺れるが如し。けて其音象の隨ふ。多は初段て在て。立初むる音を為し。知を二段て居て。立定むる音を形し。都て三段ふ在りて。立用ふ音を為し。氏て四段ふ居て。立令ふる音を為り。五音共に。聯字の義を將ふ。初弛に父て京音を為り。五音共に。聯字の義を將ふ。初弛に父て京母韵ふ受る音質形るこを上に如し。彼国辞解て。多て事心を指持形る言ふり。知は事を持ち令に言。都を事をは

し持ち言氏し事を合し押しる言登て事を持る
治むる言少て云ふも其謂あるる事かれど委うら爻。かくて此
五聲は。語上ふ在り。語下ふ、移れて活機ひ移る。其連聲ふ因
て。義の轉て易り。はる或は上省て下省りて。各く一聲
の言を為ることも少うら爻。其は此所て盡し難れど。是聲
どもは出る諸章は。因こふ釋辨しるを俟るし。

那奴良ニ奴理ヌ奴流ナ禰奴禮能奴呂
那良爾理爾禮能呂

是行は五聲し。日文傳ふ云ふ如く。舌上は柔音。其父聲を為て
り。阿行の元音其母韻を為て。齊へる聲等形る。其音象
は桜山ふ。那を那良理成とそこふ聲。爾て爾理こを云ある聲。
奴は奴流理少て云ある聲。禰を禰禮理とそこふ聲。能を能呂
滑 柔 延 柔

理と云こふ聲ふて。共うかく良行は五聲。其の形象を助け
て。其合口言ひる。奴流て言は出來しるを。起り始けふ。
此は古今ふ奴良理奴こ良こ爾理こ爾こ理こ奴流理奴こ
流こ禰礼理禰こ礼能呂理能こ呂これど謂ふ類の形容
言の多ふふを思ひ通して如此を謂ふ形り。然て本色は下
ふ奴良那良那と注せるは。其本義こる言等形り。其由て下
俣ひし。然ふて。那行篇は初章ひる。二十五言は。神典は古傳

那良 爾良 奴良 禰良 能良
那理 爾理 奴理 禰理 能理
那流 爾流 奴流 祢流 能流
那禮 爾禮 奴禮 禰禮 能禮
那呂 爾呂 奴呂 禰呂 能呂

と。阿聲ふ。那行の從へふ五言を。微し攷て是を知る。ふ其
二十五言は譜かくは如し。是章ふ第三段奴流の合口言ひる

が。其家中ハ位して。其竪横はゝ斜に貫通する趣ニ。意を潛めて。此行し。三段奴流をり起れる所以なり。ゆゑ心得居るべし。

抑此二十五言は。奴流と起り。滑の義ハして。奴良。奴理。奴流。奴禮。奴呂ゼ活ハ用ゆが。奴良を那と約して。初段ハ居り。奴理て爾と約して。二段ニ居り。奴流て奴ゼ締て。素のはゝ三段ニ居ハき。奴禮を禰ゼ約りて。四段ハ居て。奴呂は能と約て。五段ニ居ハ。是を以て。此行五聲ハ初義て。共ハ滑字の義ハり。但し其段位ハ。五母韵の次第ハ循ハこゼ例ハ如し。滑字は。説文水部ニ。利也。从水骨声と見え。段注ニ。古多借為汩亂之汩ゼ云ハ。字彙ハ滑。達也。涯滑也ハど見ゆ。此字義ハ由て。其ゼ舌上の滑潤ふ。所ハ此行五聲の。ハ奴流理ゼ出ゆ。色ハれ。ハ滑ハる所ハ義ハる。ハて更ハり。楽を那ゼ云は奴良ハ約ハり。土を爾と云ゼ奴理の約て。根ハ祢と云て奴礼ハ約て。斷を

能ゼ云は奴呂ハ約ハり。那爾奴祢能の一音ハる言等ハ。數多あれど。皆是ゼ来ハ。ハて轉用ハ起れり。其て因ハ所ハ云ハと欲ハる約ハり。ハて如此ハ。滑字ハ本義ハる。那爾奴禰能ハ。ハゐ各ゝハ。良行ハ五聲相副しハる。那は初段成の活機と成て。爾て二段柔の活用ゼハて。奴ゼ素ハ如く。三段滑の活用ゼハて。禰て四段埏ハ活機ゼ成り。能は五段楽ハ活用て成ハて是ぞ此行の轉用せる初ハる。成て説文戊部ハ就也。从戊丁。色と見え。佗字書ぞ也。柔て説文木部ハ木曲直也。从木矛。色。段注て。凡木曲者。可直。直者。可曲。引伸為凡柔弱之偁。とあり。埏ゼ説文土部ハ八方之地也。从土延。色と有れど。祢祇て由ハる。用ひ為ハ如ハ。あれど。用ひ為ハ。楽て説文木部ハ楽ハ作て。覆也と見え。段注ハ。其端也と云ひ。佗字書等ハ。音成。御也。駕也。登也。跨也。憑也。治也。禰也。又因也。れ。東是其一。如其上ハ。楽。襄東ど有て。然て楽ゼ素ゼり能ハ。根ハ。良行せる言ハり。然ハ。

れ五聲は。をも形容なり。機は副ひ牙ひ聲等ゐれど。其本聲は
ひふ太て。韵のみ殘て。那爾奴禰能の單聲と齊しるが。一度
かく良行れ副ひて。右れ音義を成せるなり。永久る其義を
存して。各ゝ其音ふ。自然れ如く。成柔滑埏桑の義を持さり。
然て有れど。其て實ふを。第二義ゐるこを。上れ如し。其活機の大要
を云むふ。初段を成る起りて。生鳴馴れどれ祖言。二段て柔
ふ起て。似意形ゆれ祖言。三段は滑ふ起りて塗。濡どれ祖言。五段て桑ふ起
祖言。細假て埏て起て。胡煉根形ゆれ祖言。ゐる類ひるふ轉用し出ゐる
言ゆも多さり。其て祖言。形どれ祖言。五段て桑ふ起
本篇ふ就て見をし。ひて此。五聲れ。然起れる由來を。神典ふ
誓ふるふ。神代紀一書ふ。天地未生之時譬猶海上浮雲無所
根係。其中生一物。如葦牙之初生渥中也と所見ゐる。此傳ふ。

其中生一物。を有ひ五字ぞ。此行の起原を知ゐを文ゐる。其中
ゆは。上は條くふ引さる文等る。天先成而地後定。然後神聖
生其中焉。ゐ天地之中生一物。狀如葦牙。ゐ国中生物。狀
如葦牙之抽出也。ゐどを然る。彼天地ゆ分てし一ツ物る。其
見えさる皆同し事形り。
中と稱をひ一所ありて。其中ふ別る葦牙れ如紀。一物の生
わる傳ふて。其葦牙ゐせひ物て。萌騰りて天日ゆ為て。ゐさ
天霞ゆも。薄靡ひ物ふる。易元れ象形をし事。をでふ上
る云へひ如く。かれ天地と剖をし物を。ま形一ツ物と指して。
ゐ。一ツ物とハ云へひふり。此事をてふ佐行ひて其萌騰をし物
れ所る辨すさり。立部ゐり。ゐ生る。葦牙の如ま物狀
の。易元れ象也し狀思ふる。其を含ゐる。其中と指ゐる所れ。
会元の象也し事も推して知ゐし。中字を那加ゆ訓る言れ

意て。滑所(ナラカ)とは成所(ナリカ)の約(ツヅ)まりて。生成那流(ナル)と訓(ヨム)る也。既(スデ)に那(ナ)聲の那理。那流。那禮也活(ナラ)。其滑(ナラ)くや成(ナリ)る所(ト)にて。滑(ナラ)くや出(ヂ)

とは故(ユヱ)に生(イ)ると謂(イフ)也。然(シカ)るに那流(ナル)の本言(モトコト)を奴良流(ヌラル)なりと。

説文(セツブン)に坤(コン)は元気(ゲンキ)の初分(ハジメワカ)、軽清(ケイセイ)易為天(ヤスキヲアメトナス)、重濁(ヂウダク)会為地(ヱヲチトナス)、万物所陳列(バンブツショチンレツ)也(ナリ)。

傳(ツタヘ)に因れる制字(セイジ)なるこゝや。赤縣太古傳(セキケンタイコデン)を論(ロン)ずるを見て知(シル)べし。然(シカ)るに此方(コノカタ)は沈著(チンチャク)の訓(クン)なる。那理(ナリ)とは訓(クン)なる也。字を填(ハメ)

さるに。古人(コジン)は深く慎(ツヽシ)み。其(ソノ)音(オン)あり。其(ソノ)日本霊異記(ニホンレイイキ)なり。やを訓(クン)み。

る。女会(ヨクワイ)の字(ジ)。閻字(ヱンジ)を用(モチヰ)て。クボ。ヒナドを訓(クン)ず。此(コヽ)や西土(サイド)

名義(メイギ)抄(セウ)に。坤(コン)を訓(クン)ず。此(コヽ)や聞(キヽ)るをも思(オモ)

字書(ジショ)に。坤(コン)字(ジ)あれど。此(コヽ)に古人(コジン)の制字(セイジ)や聞(キヽ)るをも思(オモ)

合(ガフ)に。然(シカ)らば其(ソノ)滑所(ナラカ)おもし。處(ヒヨ)て。今(イマ)何所(ナニヒト)ぞと謂(イフ)る。

門國(ヒナド)の海(ウミ)に在(ア)る。速吸(ハヤスヒ)名門(ナド)とも。速鞆(ハヤトモ)。速迫戸(ハヤセド)とも云(イフ)所(ヒト)なり。

て。此(コヽ)や大地(ヒナド)と会門(ヒナド)。はゝ謂(イフ)る四(ヨツ)ふし有(アル)れど。此所(ヒト)やがて。

彼(カヒ)開(ヒラ)け成(ナリ)合(アハ)て。滑所(ナラカ)ふれも有(アル)ぬ。来家漢語抄(ライカカンゴセウ)は。会門(ヒナド)比奈登(ヒナト)とあり。霊生門(ヒナド)は義(ヒナ)ふ

彼(カヒ)滑所(ナラカ)の名(ナ)は。後(ノチ)人(ヒト)の会門(ヒナド)ふ。名(ナ)を云(イフ)と。通(ツウ)

速吸(ハヤスヒ)門(ナド)て。ふ。名義(メイギ)て。伊豆(イヅ)速(ハヤ)く。潮(シホ)を巻(マキ)て。潮(シホ)吸容(スヒヨウ)る

滑戸(ナラト)の義(ギ)あて。名(ナ)や云(イフ)ふる。生滑(ナラ)の義(ギ)て更(カヘ)る。鳴(ナル)義(ギ)をも

兼(カネ)ふり。其(ソノ)て此門(コヽ)を近(チカ)ず。阿波(アハ)の鳴戸(ナルト)の。同(オナ)じ類(ルイ)の戸(ト)ふして。

名義(メイギ)も同(オナ)を思(オモ)ふ。生成(ナリ)鳴(ナル)字(ジ)こそ異(コト)なれ。其(ソノ)訓(クン)

並(ナラ)に洞言(ホラコト)に活機(ナリ)ることや。本篇(ホンペン)を云(イフ)る。合(ガフ)せ考(カンガ)へ。

是(コヽ)滑所(ナラカ)のこゝや。故(ユヱ)に有(アル)て。赤縣(セキケン)上古(ジヤウコ)ふも。其聞(ソノキヽ)え高(タカ)く。其国(ソノクニ)

籍(セキ)どを。谷神(コクシン)。百谷王(ヒヤクコクワウ)。玄牝之門(ゲンピノモン)。天地之根(テンチノコン)。大谿(ダイケイ)。暘谷(ヤウコク)。無底之

谷(コク)ぞと。谷口(コクコウ)ふ云(イフ)。東風(トウフウ)谷(コク)と云(イフ)。然(シカ)れど。

こゝや。是(コヽ)を起(オコ)れる。委(クワシ)く。谷口(コクコウ)を別(ワカ)て著(アラハ)せる書(シヨ)等(ナド)あり。

其(ソノ)謂(イフ)る中(ナカ)ふ。海苔(ノリ)の類(ルイ)の生(ナ)ると。奴(ヌ)流(ル)ふ。滑(ナラ)の。奴(ヌ)良(ラ)

ふ良(ラ)ふ。奴(ヌ)ふ呂(ロ)ふ。ふ。在(ア)る。ろ。

了。ふ。ろ所(ヒト)思(オモ)ふ看(ミ)せる。随(ヒヨ)て。其(ソノ)

ふが。右(ヒダリ)に古傳(コデン)の發出(ハツシユツ)ふ。初(ハジメ)て。即(ヒト)此(コヽ)五聲(ヒトツ)に元基(モトヒ)と為(ナ)

れり。其は右の古傳、固と當昔そう有りし狀を。正目に御覽上の條々に論ずる說等を始め給ふ國じ化道理明らかに。
に按ひ合せて辨ふ可し。いで其元基の然る所以を。阿聲の
那行の從へる。五言に因てぞ所知ける。其を阿行篇第五章
の初段に。阿那。阿爾。阿奴。阿禰。阿能の五言是なり。阿を皆
例の指聲にて。彼の義なるを。上件の二十五言と。相照し攷
ふるに。初言の阿那と。孔の義なるべし。此は彼滑所なる所の。
奴々流々。奴々良々。在なを指して。阿奴良と詔せる歟。其
中に含る物の葦牙なる萌騰りて。其氣勢の垂成引き
象かの古語に。天之壁立極とも有が如く。塗立さる狀
瞻なれど。阿奴良やがて其言なる為り。良の開音に因りて。

阿那を約て。彼譜の初段に。那良。那理。那流。那禮。那呂の活
機なるべし。阿奴良て。乃彼滑の義なるが、開音して阿那を為す
て。彼成の義なるを。孔は國
さ空の義なり。然れど此て上件の如く。活用く言は傳に
はら支て。殊に種々の轉用あり。其て本篇を見て知べし。
て阿那良は阿那を約て。阿那理を阿爾と訛まり。阿那流て
阿奴と訛まて。阿那禮て阿禰を約て。阿那呂は阿能を約り
て。孔の活機なるが。後に可也聞え弘。世の初に多天霧に也
然云ふ所こを著し。其て言の本て阿奴良なる。塗立さる
如く圓々に空なして觀もる歟。惟に。孔は說文に通也。
段注に通者達也。於易卦為泰。孔訓通。故俗作空。宛字多作孔。子通也。
其實空者竅也。作孔為假借。凡言孔者。皆所以嘉美之。毛傳曰。
孔甚也。是其義或曰。詩言亦孔之醜。豈嘉美之乎。曰此即今甚
字。通於美惡之意也。空て同書に竅也。从穴工。段注

ふ。今俗語所謂孔也。天地之間ホモフ孔耳といひ。他字書どを
ふ。音孔虛也。又大空。天地とも。古言は阿那て。彼方
る所を現はして。阿奴良也指驚ず嘆ずる色を指して。
見ては事は切なるふ。出ぬ色ばかりが。甚字は義ふて。美悪ず通
ずる訓のみるが。乃ち空の称と為り。然て空のも云ひ。
孔の字義ず筋ず。かくて名を那と云ふも。實て阿那は
省まて。空也同言ふり。然れで阿聲ず。那行は從ず五言と
本篇を見て知る為し。
彼譜は初行ばる。那良。爾良。奴良。禰良。能良の活用也ハ。其元
一ッふして。彼滑と指ある言は活機ばりしが。阿那阿爾ばを
は五言を。其副ふ。良聲の変れる言。那良爾良等は二十五
言て。其冠ある阿聲の。省かり齊へる言等ふて。共ふ右は古
傳を詔ひ出ふ。當初は神語ばるは也疑ふし。然るて阿色
る事物の無ては。夫めて出さる色ふ。彼阿那て。彼滑と
指ふる所あり。彼成と指ある物ありて。起れる訓ばる物以

て。かくハ謂ふ。そは此阿那て。姑く良行は五色をそ。
彼那理那流ばどは五言ず。假ふ各ニ指色の阿を冠らし。活
用かし。呼試みて上件て。是行は起原まる各音ふ。一
を知ぶず。○ばて上件て。是行は起原まる各音ふ。一
義を持ふ。較畧は説ふ。亦同行互て。音義相通ふ事は
有ふて。彼二十五言の。横五段。竪五行ふ整ずる上ふて。初行
の五言を。共て那と成て。第二行は五言て。共ふ爾とかり。第
三行は五言は。共ふ奴也成て。第四行の五言を。共て禰也ばを
て。第五行の五言て。共ふ能也成れるふ因ふ事ふり。故是を
行あるひ。其音は相通ふ耳ふら。那能呼ふ色を一ッふし以て。同
能も。共て。其義の易る事あて。其て此一色のみ然るふ非。爾奴称
ふじ趣ふり。抑是行の五聲もかく右二十五言は。混錯て
調へる故て。今しの「義を執て色。決免難ふ。似これど。

其中ニ就テ。那ハ生ある事。成の義ニて。奴良。那良ハ約ス。爾の主ニあるを柔ハ義ニて。奴理。爾理の約り。奴ヲ滑の義素ニて。上下ハ四義を包弦。禰ハ主ある事。埏ハ義ニて。奴禮。禰禮の約ス。能ハ主ニあるを。柔ハ義ニて。奴呂。能呂ハ約ニて。各く其上ニ冠れる四十五言。各ニ其下ニ從へる五十言。共ニ此義ニ差し事ハし。如各稱能の下ニ從フる詞ハ。各ニ其下ニ從へる五十言ハ。那爾奴禰能ハ古言活用ハ條。那行ハ所ニ云ハ。五十言ハ。是行五音ハ機ニ有ル。但言ハ。猶其ヲ轉用假借し出ニる諸言ハ更ニ他言ニてもかりて此行五音ハ成ぬる事。四ニ自然ニ其義を生せり。其ハ本篇ニ次ニ。釈以て行くを見て知るべし。ハて此五聲ハ。多行と同ニく。舌上ニ起れ

れ。舌ハ元より。剛ニ光澤ある事。柔ニ滑潤ニ。相兼ねる所ニて。此行ハ。其柔ニ滑潤ある方より發ル。鼻音の添ある聲等ハれど。其音象自然ニて。其趣ニ聞えて。右ハ如く五義ニ別て。成柔滑埏柔ハ顯ニ立ち。滑ハ幽ニ主りて言霊ハ幸ハ為ニ例の如し。其ハ右二十五言の譜ニ更も。みに此例ニ差ある事ハ。本篇毎章の二十五言ぶら。柔ニ起りて鼻音を兼ル事ハ。然て此五音。多行と同し。舌音ハ吹ハて鬱を彈じ。鼻ニ入る事ハ。契沖ハ此行の説ニ。舌ニヌ。ハ五音ハ。都て云ハ鼻ハ。ハと云ハ。実ニ然る故ニ。鼻を強く塞ぎて。ハ。言ハ。こ。ハて其音象の隨ニ。那て初段ニ在りて。成初ハ音ハ為し。爾ハ二段ニ居て。成定ハ音ハ。奴ハ三段ニ在て。成用ニる音を為し。禰ハ四段ニ居て。成令ハ音を為し。

能て五段に在りて。成終る音を為せり。五色共に滑字の義を持つるて。初色は父子稟こる色。まこと各初淀用令終る。音は別すべき。五母韻に受ける音質形ること上に如し。彼国辞解に那て事を指むる言と。稱し事を推押る言。能て事を納発推言。治紛々むる言と云へるも。其謂あれど委しからず。かくて此五聲の語上に在り。語下に於て活機なる。其遠聲に因りて。義は轉ること易り。或て上省あり。下省あり。各〻一聲は言少て為れども少うら。其は此所に盡し難ければ。是聲どを由て諸章は。因こに釋辨して見るべし。